

第1回

西の正倉院

みさと文学賞

作品集

「西の正倉院みさと文学賞」実行委員会・編

「西の正倉院 みさと文学賞」創設に寄せて

美郷町は、平成18年1月に3つの村（南郷村、西郷村、北郷村）が合併して誕生しました。

美郷町は、このたび古代と謎のロマン百済王伝説とその関連で建設された「西の正倉院」を物語資源とした「みさと文学賞」を創設致しました。地域再生の事業として位置づけられた、このような事業は、歴史に裏打ちされた風土色を抜きに語れません。

広辞苑によると、風土色とは、「風土の差異によつて生ずるそれぞれの特徴」とあります。今回の文学賞創設にかかわる風土的背景として、独断的に、この地域に根付いた2つの活動をご紹介します。

1つは、『さいごう文芸』『いだごろう』等の地元文芸誌の存在です。『さいごう文芸』は、旧西郷村で昭和55年2月に創刊されました。以来、季刊号（年4冊）として、毎号約100ページ、発行部数250部、美郷町に合併するまで25年間、1000号を発刊。『いだごろう』は、旧南郷村で平成6年11月創刊、10号まで発刊しました。また旧北郷村は、『いにしえ』『寅やん物語』を刊行。また、合併してからは、旧3村の文芸活動の発展的解消によつて『美郷文芸』になり、現在まで、47号を発刊致しております。

2つには、これらの地域文芸誌の活動の中で発掘された歌人・小野葉桜と藤田世津子の存在であります。

国民的歌人、若山牧水と親交のあった歌人・小野葉桜はその悲運な人生によって「薄幸の歌人」と呼ばれました。本名、小野岩治。明治12年、旧西郷村花水流に生まれ、昭和17年、63歳で永眠。長年、埋もれていたこの歌人は、文芸誌の編集の中で、よみがえりました。地域の文化活動に携わる人たちが、葉桜自身がかかわらなかった歌集出版の願いを実現させました。遺稿歌集のタイトルは、葉桜自身がつけた『悲しき矛盾』。昭和62年の発刊でした。

歌人・藤田世津子は、旧西郷村小原の出身で、第6回駿河梅花文学大賞の受賞者。歌集は、『反魂草』と教え子が編集した歌集『風とひかりのなかへ』の2冊があります。癌を患い、64歳でこの世を去りました。現在、小野葉桜と藤田世津子の二人の歌人については、美郷町において、それぞれ「葉桜短歌賞」と「藤田世津子賞」を設け、全国から短歌を募集するなどの顕彰活動を展開しております。

私たちは、このような土の香りのする郷土色豊かな地域文芸誌を目指した活動とそのことによって、よみがえった歌人の顕彰活動を通して地域文化の素地を創ってまいりました。

もちろん、文化的素地は、これらの活動によって集約されるものではありませんが、「西の正倉院みさと文学賞」は、これらの流れのなかで、生まれてきた文学賞であることは確かです。地元の人間としてはそう整理することに意味があると考え、この事業によって、新たな文化的土壌が構築されることを心から願っております。

宮崎県美郷町

目次

「西の正倉院 みさと文学賞」創設に寄せて

宮崎県美郷町

2

総評 作家 中村航

6

大賞

「次元と時空」 武田加代子

9

優秀賞（MRT宮崎放送・日本放送作家協会賞）

講評 日本放送作家協会理事長 さらだたまこ

32

「水たまり」 和田海作

35

優秀賞（審査員特別賞）

講評 地域創生プロデューサー 高野誠鮮

60

「風」 志奈

63

講評 民俗学者 遠志保

「神門」みかど 原田須美雄

89 86

佳作

「うそつき」平伊志七

115

「郷光る花咲き盛る」辻佳代子

143

「月よ、高く昇れ」松岡博

169

「サラバ、いつかゆく末で」七ツ樹七香

193

「また、な」柴田瑤

221

一次審査通過作品リスト

236

第2回「西の正倉院 みさと文学賞」のお知らせ

238

総評

作家
中村航

今回、縁があつて、みさと文学賞の選考委員を引き受けることになり、初めて美郷町を訪れた。町内のいろいろな場所を巡り、いろいろな人の話を聞き、初めて知った美郷町の歴史は驚くほど深く、その伝記や伝承はロマンチックで、とても想像力を掻きたてられる。ここには魅力溢れる未知の物語が多く眠っていて、誰かに掘り起こされるのをじっと待っている、と、そんな気がした。

美しいこの町は、自分の原風景のようなものを感じさせる場所だ。故郷ではないのに、ここを故郷と呼びたくなる。まさに美しい郷である美郷町の名を冠したこの文学賞には、今回、八十九作品の応募があつた。

二次審査通過作品および次点となった作品、合わせて二十作品を読ませてもらったのだが、どれもこれも面白かった。選ばなければならぬから、断腸の思いで大賞を選んだ、というのが正直なところだ。

美しい郷に思いを馳せ、そこに眠っている物語を掘り起こし、またそのことで書き

手の世界観を表現する。お世辞抜きに、どれも本当に面白かったのだが、選に漏れたものには、共通の弱点があった気がする。出だしから中盤にかけてはすごく良いのに、終わり方が惜しい。厳しく言うと、小説として終わっていない。作品が多かったように思う。

作者には言いたいことや書きたいことが溢れていて、だけど枚数制限のなかで、小説として、きっちり終わらせなければならない。どんな事象でも次へと繋がるわけだから、終わらせる、というのは本当に難しいものだ。だけど、読む人が気持ち良くページを閉じられる、というのは、良い小説の一つの条件だ。

大賞の「次元と時空」、また佳作の「うそつき」、「郷光る花咲き盛る」、「月よ、高く昇れ」、「サラバ、いつかゆく末で」、「また、な」は、美郷町の魅力を存分に伝え、なおかつ物語としてしっかり終えられていた。

ここで掘り起こされた物語を、ぜひとも全国の人に読んでほしい、と願わずにはいられない。今後、この賞が文化として根付き、今後も新たな才能の発掘の場になることを、一小説家として、また一小説ファンとして、期待している。

大賞

「次元と時空」

武田加代子



伊佐賀タケルが死んだ。

その知らせは、掌のスマートフォンに改行もなく飛び込んできた。

電光掲示板が特急電車の通過を告げる。閉じたホームドアの向こうを、銀色の風が音を立てて一直線に通り過ぎて行った。

「あたしが無にお金使つてようが、もうほつといて欲しいんだよね。だって自分が働いたお金じゃん？」
咲希は季節外れのフラベチーノをスマホのカメラで撮った後、ダークチョコのパウダーが積もる生クリームから、そろりとストローを抜いてふて腐れた。

ここの所、咲希と母親の関係が悪化している。新卒で就職した会社を二年で辞めた辺りから、関係が拗れ始めたのだと咲希は言う。

「やっぱり派遣で働いてるっていうのが不満みたいなんだよね」

真面目な顔で分析しているが、理由はもっと別の次元だ。

「遅れてきた反抗期みたいじゃない？」

正哉はいつものようにからかったが、咲希は険しい顔でスマホを操作しながら、

「ああ、甘くみてたあ」

と大袈裟に落胆し、指紋だらけの画面を突き出した。正哉は、『抽選結果のお知らせ』と件名の

書かれたメールを、声に出して読む。

「厳正なる抽選の結果、残念ながらチケットをご用意することができませんでした」
不機嫌な顔で何度もメールを確かめる咲希に、正哉は呆れた調子で言った。

「何回観りゃ気が済むんだよ。今日も行くんだろ？ 百済王伝説外伝」

『百済王伝説外伝』

それは、WEB漫画が原作の舞台だ。漫画の世界を役者が忠実に再現して演じる舞台。咲希は今、その2・5次元舞台に夢中になっている。母親との関係が悪化している最大の要因だ。しかし咲希は、自分を不快にさせる種を弾き飛ばすかのようにスマホの画面を閉じ、

「最近人気出てきたんだよね。テニミュの一年目よりも動員数が上なんだって」

と、2・5次元舞台のバイオニアである『テニスの王子様』を引き合いに出し、まんざらでもない口調で言った。

「先行予約がダメってことは、一般販売はもっと過酷だなあ。正哉も協力してよ」

「なんでオレが咲希のオタク趣味に付き合わなきゃなんないんだよ」

「あーっ。オタクって！ 自分は違うみたいに言うじゃん。もともとあの漫画は正哉が勧めたって事、忘れてない？」

「そりゃそうだけど、オレは漫画を勧めたの。漫画が好きなの。漫画が舞台になって何が面白いの？ 世界観崩れてるし」

「はいはい、世界観ね」

咲希はスマホをポケットにしまい、ダークチョコが溶け残ったプラスチックカップを掴んで立ち上がった。

世界観か……。

カップの分別に迷いながら、咲希は考えた。

例えばこの世界がレイヤーで出来ているとしたら、違う次元へ潜ってみたい。うまくいかない、思い通りにならない現実の膜を剥がし、0・5次元違う世界へ行ってみたい。

「……と言うわけで、行ってまいります！」

店を出ると、咲希はまるで戦場に行くかのようにリュックを両肩に背負い直し、「じゃあ！」と、エスカレーターを駆け上がって行った。

どこに向かつてるんだ？

渋谷に来るたび咲希は思う。

この街の再開発完成予想図を見たのは、咲希が大学生になって間もない頃だ。キラキラの大学生生活を想像して入ったアカペラサークル。その新人生歓迎会へ参加するため渋谷駅へ降り、出口が分からず迂回した通路にそのポスターは貼られていた。

『2027年 渋谷は新しく生まれ変わります』

描かれていた街は、漫画の一コマみたいな遠い未来だった。誰もが他人事のように、その横を通り過ぎていた。

遅れて店に着くと、咲希の席はもう空いていなかった。ピンク色の酒を飲んでる女子と目が合ったが、席の無い咲希を気に留める様子もなく話し続けていた。

「予定外の人数が参加したから」と、急きよ追加したテーブルには、新入生が気まずそうに座っていた。咲希達は、とりあえず儀式のように、ライン交換を始めた。

「磯田咲希さん、アイコンがネウロだね」

その時目の前にいたのが、咲希と同じく歓迎会に出遅れた正哉だった。

「オレのアイコンも、魔人探偵脳嚙ネウロ。気が合うね」

信号が一齐に青になると、交差点が一瞬で人の渦になる。

咲希は人混みから弾かれないう、息を殺し突き進む。あの頃とは違って、咲希の座るイスが確実に用意されている場所だ。

『らピア2・5シアター』

煌びやかな扉を開けると、咲希は海に放たれた魚のように手足が自由になる。大きく息を吸い込むと、光の粒が咲希に集まり、体が深海魚のように色を変えた。

八〇〇人定員の会場全体に、嵐の海が映し出される。雨音にも似た音楽が流れる中、三人の男が

一艘の舟に乗り、舞台へ現れた。客席から、雨のような拍手が湧く。

舟に乗っているのは、古代百済の王、禎嘉王。そして二人の王子、福智王と華智王だ。三人は、母国百済の内乱を逃れ、倭国に逃げてきたのだった。

咲希は、華智王に扮した伊佐賀タケルに釘づけになる。

全五公演中、三公演分のチケットが取れた事は、今となれば奇跡だ。原作漫画を知っていた咲希は、人より早く反応することができたのだ。人気が出てからでは、もう遅い。世間の評価が出てからでは、手遅れになってしまう。2・5次元の入り口は狭い。そして何より、この舞台がデビューとなる伊佐賀タケルに先行投資したことも間違いではなかったと、咲希は満足する。今夜の公演が終われば暫く会えなくなる伊佐賀タケルを目に焼き付けようと、咲希は舞台からさほど離れていない客席で、オペラグラスを目に当てた。

『百済王伝説外伝』は、原作漫画を少しアレンジし、百済王の長子、福智王と敵国新羅王族の姫君との悲恋物語に仕上げている。2・5次元舞台にしては異質な古代もので、伊佐賀タケルが百済王の次子、華智王と、新羅の姫君の二役を演じていることも話題になっている。

母国の内乱から逃れ、倭国への亡命を企てる百済の王族達。しかし、敵国新羅王の姫君が追いかけて来る。実はこの姫君、百済王の長子である福智王と恋仲にあるのだ。許されぬ恋故に身に危険が降りかかることも承知で、敵国の姫と共に逃げることを覚悟した百済の王族達。ところが追討軍により、華智王が命を落としてしまう。無念な死に心を痛めながらも、姫君は華智王になりすまし、

福智王らと倭国を目指す。

たどり着いた山間の村で、村人に手厚く匿われた百済王族は、穏やかな日々を過ごしていた。会場全体に投影される山々。まるで神話の世界に紛れ込んだようだ。福智王と新羅の姫君が歌声を重ね、甘い歌を歌う。霧が二人を包み込む。どうかこの霧がいつまでも二人を隠してくれるようお願いの歌だ。しかしそれも束の間、新羅からの追手より、華智王の正体が新羅の姫君である事が分かってしまう。捕まれば引き離され、福智王の命は奪われてしまう。舞台は戦場と化し、太鼓の音が鳴り響く中、二人は逃げ惑い追い詰められる。行き止まりの場所はふる里にも似た丘の上。母国を偲びながら、束の間の幸福を歌に乗せる。そして運命を悟った二人は、互いの王家の刀で絶命し、永遠の愛を誓う。

モノクロの線で描かれた2次元の世界が、カラフルに立ち上がり目の前に現れる。2・5次元の世界は現実をそぎ落とした夢の世界だ。そして残像さえ残さず、次々と泡のように消えてしまう。儂い夢だ。

倒れた福智王に、新羅の姫君に扮したタケルが折り重なっている。タケルの絶唱が終わると、その体に、炎にも似た照明が当たる。それはやがて会場全体を焼き尽くすように赤々と広がり、突然舞台は暗転する。

息絶えてしまったタケルに、咲希は絶望する。

「まじかよ」

咲希のラインは既読すらつかない。正哉はデスクの上で、何度もスマホを開いては、不安な気持ちになった。

伊佐賀タケルが自殺した事を知ったのは、ネットのニュースサイトだった。

〳〵2・5次元アイドル、自殺か〳〵

その見出しに胸騒ぎを覚え記事を開くと、見覚えのある名前が目飛び込んで来た。

2・5次元舞台『百済王伝説外伝』で人気上昇中の伊佐賀タケルさん（二〇歳）が、都内の病院で亡くなりました。自殺とみられています。

短い記事だった。

「短すぎるだろ」

真っ先に咲希の顔が浮かんだ。

〈今期最後のタケルでした

サイコーだったよー！〉

ラインが来たのは、一昨日の夜の事だ。そっけないスタンプを返した事を、正哉は後悔した。

〈大丈夫？〉

何度スマホを開いても、正哉が送ったメッセージに既読はつかなかった。

経理部なんて、始終忙しいわけじゃない。正哉は、適当な口実で会社を早退した。

咲希の家には、一度だけ送って行ったことがある。正哉は品川駅から大船行の京浜東北線に乗った。
〈港南台駅のスタバにいるけど、出て来れそう?〉

自宅の部屋にこもって、落ち込んでいる咲希を想像していた。暫くして既読が付き、自転車に乗ったネコのスタンプが返されてきた。正哉は少しほっとした。

しかし、自転車ですべて来た咲希は、たった一日で別人になってしまったように、生気の無い顔をしていた。正哉は子供の頃に観た映画を思い出した。偶然異世界に迷い込んだ少女が、様々な冒險の末、成長して元の世界へ戻ってくる。それなのに現実の世界は数時間しか経っていない。そんなストーリーだ。

「家にいると思ったよ」

正哉が言うと、咲希は「うん」と頷き、グレーのネットクウォーマーに、半分顔を引っ込めた。

伊佐賀タケルが人気上昇中とはいえ、所詮2・5次元の世界だ。ネットの底では、無責任な噂話が囁かれている。

「根拠のない噂は信じない方がいいよ」

正哉は言ってみだが、咲希はもうすでにネットの底まで潜り、手当たり次第、ゴミのような噂をさらっているのだろう。やはり顔色が冴えない。

「正哉、まだ、ネウロなんだ」

「えっ？」

ネットウオーマーのせいでこもった声に、正哉は聞き返した。

「正哉のラインのアイコンってさ、まだ魔人探偵脳噛ネウロなんだね」

「えっ？ 唐突になに？ オレ、ずっとネウロだけだ」

咲希は、ネットウオーマーの中で「変わらないね」と少し笑い、遠い昔を思い出すように話し始めた。
「昨日会社に行く途中、ネットニュースで知ったんだ。信じられなくて、暫くホームのベンチに座ってた」

咲希は、ファンサイトの情報から、タケルの自殺の原因が、事務所社長の男色にある事を知った。根拠のない無責任な噂に、タケルが汚されていくのは耐えられなかった。ほんとうの事なんてどうでもいいと思ったし、何がほんとうだったのかもわからない。ただ、もう二度と伊佐賀タケルに会えなくなってしまう空虚な事実だけが、汚れた海の底からきれいな死体のように浮き上がって来た。

一本の大きな支えを失くしたように、バランスを欠いてしまったのだと、咲希は小さなため息をついた。

「ネウロ見てさ」

「えっ？」

「だから、正哉のアイコン。魔人探偵脳噛ネウロのアイコン見てさ、久しぶりに大学時代を思い出

してた」

「今更？」

「正哉って、なんでアカペラサークル入ったの？」

「唐突だなあ」

正哉は少し考えた後、「笑わない？」と、咲希に確かめるように聞き、

「歌いたい歌があったから」

そう言って、本日のコーヒーを一口飲んだ。

「うそだ」

冗談に聞こえたのも知れない、と正哉は思ったが、はっきりと否定した。

「うそじゃない。ほんとうだよ」

大学に入って間もない頃、男女六人のグループが、構内で懐かしい歌をハモっているのを聞いた。忘れていた記憶が一瞬で甦った。それは、父が楽しそうに指揮をしている姿だった。

正哉の父は高校の音楽教師だった。自宅から離れた学校に、単身赴任をしていた。正哉が子供の頃、父が勤務する高校の文化祭に一度だけ行ったことがある。ステージで合唱の指揮をすうと言うので、母親と見に行ったのだ。

「別人みたいに生き生きしてた。そんな父親の姿見るのって、初めて最後だったな」

「なんで？」

「なんでって、別れたんだよ。ていうか、いつ離婚したのかも、事後報告だったけど」

今日のコーヒーは、冷めると余計に苦くなる。咲希はイスに座り直し、「大変だったね」と神妙な顔をした。

「大変なのは母親だよ。小学校の教師だったから、世間体もあったんじゃない？」

「正哉って、宮崎だったよね」

「うん。今も母親は宮崎に住んでる。父親はオレが子供の頃から家にいなくて、気付けば女つくて蒸発だよ。教師のくせに、サイテーだろ？」

「なんか他人事みたいに話すんだね、正哉って」

「子供だったし、最初っから蚊帳の外だし、他人事だよ」

自分の知らないところで問題が起こり、勝手に解決していた出来事が、今も正哉の中で燻り続ける。

「お父さんには、会ってないの？」

「会ってないね。いや、一度だけあるかな？」

バランスの取れていない脚のせいで、イスが、がたついている。正哉は、苦味だけが沈んだコーヒーを、喉の奥に流し込んだ。

どこにいるんだ？

正哉は思う。

この世界のどこかに自分の探しているものがあるとしたら、それは間違いなく父の存在だ。半分翳ったネウロのように、丸い窓からモノクロの顔を出し、世の中を覗いている。

母親を困らせたくなくて、父のいない理由を問い正す事もしなかった。聞き分けの良い子供でいたかった。

けれど正哉は、一度だけ母親に嘘をついた事がある。小学六年生の頃だ。故郷宮崎美郷の『師走祭り』中日の夜神楽で、別れたと聞かされていた父に偶然会ったのだ。神門神社の境内で、「正哉元気か？」と突然声を掛けられ、お化けでも見たような顔になったのが自分でもわかった。神楽鈴が束になって響いていた。正哉の心臓も音を立て、ずっと鳴り続けていた。人混みに紛れて父と歩いた。「大きくなったなあ」と言われ、春から中学生になると答えたら、「そうか」と優しく頭をなでられた。

焼餅を手渡されたが、食べる事が出来なかったのを覚えている。冷めて固くなった餅を持って帰ったら、母親に不思議がられ、「お腹いっぱいになった」と嘘をついた。

「明日帰る」と言った父を、次の日、神門神社で捜した。正哉に近づいて来た父は、黒く塗った顔で笑いながら、正哉の頬にも黒いスミを塗った。「おかあさん、たのむぞ」と小さい声で言われ、おかしくもないのに二人で笑った。スミで顔を黒く塗るのは、別れの悲しみを笑って隠すためだと、正哉は後で知った。

京浜東北線の上り電車に乗りスマホを開くと、咲希からラインが入っていた。

〈正哉が『百済王伝説外伝』を好きなワケがわかったよ。今日はありがと〉

遅れて、親指を立てたネコのスタンプが届いた。正哉は少し考えた後、咲希に返信した。

〈今度、師走祭り、行ってみる？〉

〈いいよ〉

咲希から速攻返事が来た。

イヤホンから流れてくる歌は、父の思い出と共鳴して、正哉を懐かしい世界へ連れ戻してくれる。みなとみらいの夕景が輪郭だけを残しながら、きらめき始めていた。

宮崎空港から日豊本線に乗り日向市駅で降りると、正哉の母親が迎えに来ていた。

「磯田咲希さん？ いつも正哉がお世話になってます」

「お世話してんの、オレだし」

照れたような正哉の後ろで、咲希はペコリと頭を下げた。

「じいちゃんの葬式以来」だと、五年ぶりの帰郷を懐かしむ正哉と母親の会話は、カーラジオから流れる音楽のように漂っている。咲希は後部座席から慣れない相槌を繰り返した。

「正哉の母親は小学校を早々に退職し、子供達が集える居場所のために自宅を解放していると、誇らしげに話した。

「じいちゃんも死んだし、空き家管理も大変だからさ、いつその事、美郷に住むことにしたよ」
「相変わらず頑張るね」

感心する正哉に、母親は「頑張るよ」と返し、両手でハンドルを握り直した。

咲希は白く曇る窓を、手袋から出た指で丸くなぞった。祭りが近付いているというのに、町はどこまでも静かだった。

「咲希。あれ、わかる？」

突然窓を下ろし、正哉が指差した。刈り込んだ田んぼに、季節外れのクリスマスツリーのようなものが何本も立っている。正哉の母親とルームミラー越しに目が合った。

「あれは杉槽って言うってね、火を点けてお迎えするの。咲希ちゃん、迎え火って知ってる？」

「なんとなく……」

「そうよね、都会のお嬢さんだもんね。師走祭りが、百済王族の禎嘉王と福智王の年に一度の父子の対面ってことは、知ってるわよね」

ルームミラー越しに咲希は頷いた。

「無事に父子が対面できるように、迎え火を焚くのよ」

咲希が理解を示した様子を確認して、正哉の母親は、満足そうな顔で頷いた。

「よくしゃべるから疲れるだろう？」

迎え火を見ようと連れ出された川岸で、正哉が困った顔をした。「部屋は空いているから」と、正哉の実家に泊めてもらうことになった咲希は、母親から質問攻めに合ったのだ。

「悪気はないんだけどさ、自分の中に『整理箱』みたいなものがあるって、その中に人を無理やり分類するようなひとなんだよな」

「整理箱か。家の中も片付いてるもんね。『あー、先生だ』って思っちゃったよ」

咲希は、自分が分類された箱を知りたくなかった。箱に名前を付けて人間関係を整理整頓する正哉の母親は、ある意味真面目で誠実な人なのかも知れない。咲希は、歪みも隙間もなく四角く積まれた箱を想像した。

しかし正哉はどうだろう。

潔く分類し終えた過去の前で、欠けたパーツをいつまでも探している。咲希はダウンジャケットのファスナーを首元まで引き上げ、「寒いね」と正哉を見た。正哉はポケットから手を出して、咲希の左手をそっと握り、

「迎え火が上がるよ」と咲希を見た。

正哉の瞳に、漫画のような炎が映った。次々と赤く燃え上がる杉櫓の間を縫い、禎嘉王と福智王父子のご神体が対面する。異郷で命を落とし離れ離れになった魂が、炎と共に息を吹き返し、再会

を喜んでいるみたいだった。乾いた風に煽られ、火の粉が夜空に舞い上がる。煙が山里を覆い、すべての現実を燻され、やがては静かな闇に戻った。

「タケルはもういないんだね」

咲希が呟くと、正哉が強く手を握り直した。

濃い霧にも似た煙が消えると、夜空も闇を取り戻していく。隠れていた星が、生まれ変わったように輝き始めた。

「きれいだね」

タケルが死んだ時にも出なかった涙が、咲希の頬を、流れ星のように伝って落ちた。

正哉の家へ戻ると、玄関先で母親が少女を送り出していた。迎えに来た少女の親が何度も頭を下げている。

「祭りの日くらい、休めなかったの？」

靴を脱ぎながら正哉が聞いたが、母親は顔色一つ変えず、

「お祭りだから忙しい親もいるでしょ？」

と脱いだ靴を揃え直した。

「咲希ちゃん、迎え火どうだった？」

気の利いた感想を言おうとしたが、母親は咲希の答えを待たずに、

「正哉も久し振りだったんじゃない？」

と、冷蔵庫を開ける正哉に声を掛けた。

「おなかすいてるでしょう？ 田舎だから、しゃれたものはないけど」

ビールを注ぎ分ける正哉の前に、母親は夜食用に作っておいた煮物を手際よく並べた。

「明日は夜神楽だから、少しはお祭りの雰囲気味わえるかな？」

「雰囲気？」

母親の言葉を遮るように正哉が聞き返した。

「夜神楽の雰囲気が好きだって言ってたでしょ。忘れた？」

煮物をよそった小皿を咲希に「どうぞ」と手渡しながら母親が聞いた。きちんと包丁を入れた野菜が正しく煮しめられ、皿に行儀よく盛られていた。

「こういうとこだよ」

正哉は、測ったように正確な六方むきの里芋を、箸で倒そうとしながら呟いた。

奥の座敷から、時計が『ボン』と一つだけ鳴った。スマホの画面を見た咲希に母親は、

「あー、一時だと思ったでしょう」

と、生徒の間違いを見つけた先生の口調で説明する。

「あれはね、奥の座敷にある振り子時計。一つだけ鳴るのは三十分ってこと」

咲希はスマホで時間を確認する。

「ほんとだ」

「正哉のひいおじいさんの代からある振り子時計でね、毎朝ネジ巻きで時間を合わせるの」

正母は里芋に箸をつけたまま母親を見た。

「そういうとこだって。母さんはいつでも正しくて、だから父さんはしんどくて、逃げ出したんじゃないの？」

正哉の時計は止まったままだ。ぜんまいを巻くネジの在り処は、多分、母親が勝手に片付けた。整理箱の中にある。

「オレ、父さんに会ったよ、小六の時。母さんを頼むって言われた」

母親が咲希を見た。しかし咲希が黙って頷くと、力が抜けた様にイスにもたれ掛かり、項垂れてしまった。奥の座敷から、微かに時間が巻き戻って行く音が聞こえる。

「……正哉の言う通りかもね。お母さんは、お父さんを苦しめたのかもね」

「だから若い女作って……」

母親は、それは違うと首を横に振り、

「それは……、お母さんが勝手に作った嘘。ごめんね正哉。でも、そう思うことにしたの。そう思わないと、頑張れなかったから」

「何を頑張るんだよ」

「じいちゃんやばあちゃんや正哉や……、仕事に、全部。ただ自由になりたいからって、そんな子供みたいな理由で勝手にいなくなった人なんて、お母さん許せなかった」

困った顔に見えたのか、母親が咲希に、「ごめんね」と小さな声で謝った。

「雰囲気が好きで、夜神楽に行ってたわけじゃないんだ」

ぽつんと正哉が呟いた。

「知ってる。小さな町だもの」

母親は、もう一度正哉に「ごめん」と呟き、

「お父さんに、また会えると思ってたんでしょ？」と、少し背筋を伸ばした。

夜は、すべての嘘をのみ込んで、宇宙のように膨張していく。

咲希は、泡の消えたビールを口に含んだ。

スマホの時計は、まだ0・5時間も経ってはいない。ぜんまいはとうに巻き戻ったのだろうか。

時間が闇に沈んでいく。

「夜神楽に行くのなんて、何十年ぶりかなあ」

「本日閉館」の札を掛け、正哉の母親が玄関の鍵を閉めた。

神門神社は、夜神楽の見物人で賑わっていた。深い木立に取り囲まれた境内には、神楽ばやしや木霊するように響き渡り、咲希は、初めて来る場所なのに、なぜか懐かしさを覚えていた。

「お父さん、ここでよく正哉を見つけられたわね。全然会ってなかったのに」

夜神楽の舞を見ながら母親が言った。正哉も母親に何かを話していたが、お囃子や見物客の喧騒

に紛れ、咲希の耳には届いて来なかった。形あるものも、ないものも、すべての縁が一夜の舞台に舞い降りて来る様は、時空を超え、異次元の世界へ紛れ込んだ錯覚を覚えた。

暫くして、ラジオの周波数が合うように、正哉と母親の話す声が聞こえてきた。

会おうと思えば、いつでも会えるし、これからだって、会えるんだよ。

それは不思議な呪文のように、咲希の気持ちを軽くしてくれた。

師走祭り最終日、顔にヘグロというスミを塗られると聞いて、「それはパス」と咲希は即答した。帰りの飛行機までは時間がある。

「行きたいところがあるんだけど」と正哉に言うと、母親が、「咲希ちゃんは都会のお嬢さんだから、顔にスミを塗られるのなんて嫌よね」と運転手を買って出してくれた。

「お見送りするまでが師走祭りじゃないの？」

正哉は納得しない様子だったが、咲希は、

「なにそれ。帰るまでが遠足です、みたいな言い方」と茶化し、「恋人の丘」へ向かってくれるよう、母親に頼んだ。

予想通り、質問攻めに合いそうだったが、

「多分、福智王と新羅の姫君が追い詰められた場所なんです」と、『百済王伝説外伝』のストーリーを熱く話し始めると、みるみる不安そうな表情になり、

「都会のお嬢さんの話は、次元が違うわ」

と、それきり興味を示さなくなった。

咲希は、その反応が自分の母とよく似ていると思ひ、なんだか懐かしく、そして少しおかしくなった。「ここで待ってるから」と言う母親を車に残し、正哉と恋人の丘へ歩いて行つた。小高い丘から、眼下に広がる山里の景色を二人で見下ろした。大きく息を吸い込むと、咲希の体は透明な空気であつた。膨らんで行く。

「ところでさ、正哉の歌いたい歌ってなんだったの？」

「それはもういいんじゃない？ オレも咲希も、万年二軍だったしさ」

咲希は、「それもそうだね」と言つた後、

「じゃあ、帰つたらカラオケでも行こうか」

とスマホで検索を始めた。

「やだよ。咲希のオタソン聴かされんの」

「いいじゃん、オタクで」

咲希は開き直るようにそう言い、正哉の手を引き、百花亭へ向かつた。

「せっかくだから鳴らしとく？ 絆の鐘」

その音色は想像と少し違つていて、二人で顔を見合わせ笑つた。

思い通りにいかない世界でも、きっと誰かと出会い、繋がり、響き合う。

「そろそろ帰ろうか」

どこまでも、どこへでもつながる空に、白い一直線の飛行機雲が音もなく突き抜けて行った。

優秀賞 （MRT宮崎放送 日本放送作家協会賞） 講評

日本放送作家協会理事長
さらだたまこ

放送メディアにとって、文学は切っても切れない関係にあります。名作と謳われたドラマには、優れた文学作品を原作にしている作品が多々あるからです。

ただし、小説をドラマ化するにあたっては、脚本の形にすることが必要で、同じ物語を紡ぐとしても「物書き」の世界では小説と脚本は明らかに別物という認識があり、両者はきちんと棲み分けがなされています。とはいいつつも、小説家で脚本を手掛ける方もいれば、脚本家が小説を書くこともあり、その境界線を往き来することも少なくありません。

2019年の9月18日に創立60周年を迎える日本放送作家協会は放送作家（＝脚本家 ※放送業界の黎明期は脚本家も皆、放送作家と呼ばれていました）の文化団体ですが、創設メンバーには文学者である久保田万太郎（初代会長）、内村直也（初代理事長）が名を連ね、その後、協会員からは直木賞作家の青島幸男、藤本義一を始め、数々の文学賞作家も輩出しています。そのような歴史を歩んで来た放送作家協会が還暦を迎

える年に、創設された「みさと文学賞」をお手伝いできるご縁に新たな使命感を強く抱いています。

優秀賞（MRT宮崎放送・日本放送作家協会賞）は、放送作家・制作者の視点からドラマ化したくなる優れた作品という基準で選ばせていただきました。最終審査に残った十二作品は、いずれも読むだけで映像が目には浮かぶ作品で、一作品に絞るには逡巡もありましたが、受賞作「水たまり」は、時を経ながら主人公の老人と孫の心の動きと成長が丁寧に描かれていた点、過去と現在、あの世と現世といった時空の繋がりと広がり、脳裏に鮮やかに浮かんだ点、そして哀しみを抱いた人間がそれぞれに未来に向かつて生きていこうとする姿にインスパイアされ、どんな脚本家も腕を揮いたくなるであろうという評価を得ました。

今後は放送作家協会員の脚本家と宮崎放送の協力を得て、音声や映像によるドラマ化を実現したいと考えています。この「みさと文学賞」が、小説と脚本の境界線に新たな息吹をもたらす21世紀の文学のエポックメイキングとなることをミッションとして、さらなる発展に繋げていきたいと願っています。

優秀賞 (MRT宮崎放送・日本放送作家協会賞)

「水たまり」

和田海作



「まるでどこかの民俗資料館だな。親父のやることは相変わらず分らないよ」

汚れない座布団に賢一は腰を下ろし、囲炉裏の向こう側に座る妻の麻希に小声で話しかけた。

「素敵じゃない。こだわりがたくさん詰まっってお義父さんらしいわ。まあ、住みたくはないけどね」
そう言って、いたずらに微笑む。

「おいおい、親父の前ではやめてくれよ」

「だいじょうぶ。まかせといて」

二歳になったばかりの大輝は、首をきよろきよろ動かしながら、囲炉裏の周りを歩き回っている。

「ああ、そこは駄目だ」

土間に降りようとすると大輝を守が制止する。

正月の挨拶と新築祝いを兼ねて一人息子の賢一家が東京から守の家を訪れていた。

東京で生まれ育ち、大手銀行で社長にまで上り詰めた仕事人間の守が、退職をきっかけに田舎暮らしを始めたのだ。

三年前に母を病気で亡くし、老後の楽しみを失っていた守の新たな出発を、息子として賢一も素直に喜んでいた。

と言っても実際は、引越しが済んだあとで報告を受けたにすぎないのだが。

空き家となっていた一軒家を購入し、内装を自分好みに改装した。もちろん口を出さずだけで実際に作り上げたのは地元の大工たちだった。二階には、機織り機や火縄銃まで揃えられている。

天井が高い土間の壁には、教科書で見たことがあるような農具がびっしりと掛けられていた。

「公園にも連れていってくれたことがない親父が田舎暮らしだなんて」

「いいじゃない昔のことは。なんか前より顔がいきいきしてるし、楽しそう。大輝も田舎が出来て嬉しそうよ」

「いなかのじいさんか。俺もあの人みたいに勝手に生きてみたいよ」

「ふふ。あなたには無理よ。勝手なのも才能なんだから」

守が選んだ宮崎県北部にある美郷町は、東京から半日かけてようやく辿り着くような、まさに田舎と呼ぶに相応しい場所だった。

首に白いタオルを巻いた守が、籠に炭を載せて勝手口から入ってきた。

囲炉裏の中に、持ってきた炭を一気に落とす。

「いい家だな」

「ああ。まあゆっくりしていきなさい」

「ありがとう」

「少し休んだら、そのへんを散歩してくるといい。大輝に自然を見させてあげなさい」

「大輝もこんな山奥に来るのは初めてだしな」

「子どもは自然に触れたほうがいい」

「ああ、そうさせてもらおうよ。それにしても、どうしてここなんだ」

「特に理由はない。気に入ったんだ」

守の声が少しだけ低くなったので、それ以上訊くことはやめた。

「田舎暮らしには、最高の場所ですよねお義父さん。自然も多いし、空気も澄んでて」

「さすが麻希さん、その通りだ」

賢一に向かって麻希がこっそり舌を出す。

その間も守は黙って囲炉裏の炭を組み直している。だが、何度も動かしては元に戻す動きは、どこか彷徨っているようだった。

ふと麻希が独り言のように呟いた。

「お義母さんとの思い出の場所だったりして」

大輝が隣の部屋からはしってきて、囲炉裏のなかを這うように覗き込む。

「あぶない。落ちるぞ」

守の大きな声にびっくりして、大輝は額を畳に擦りつけて動かなくなった。

「親父、悪いけど、いきなり大きな声を出さないでくれよ」

「こんなんで萎縮しよって」

「ほら、大輝。じいじと一緒に遊ぼうって」

しばらくして起き上がった大輝だが、麻希の背中に顔を埋めていた。

「じし」

風が吹けば流されてしまいそうな声で、守の動きをぼんやりと見ていた。

大柄で声の低い守は、大輝にとってはどこか近寄り感がたく怖かった。もつとも、大輝が知っている大人のようにニコニコした顔で話しかけてこないところが、視線をなかなか合わせられない理由でもあった。

賢一が耳元で何度も「じいじ」と囁いたが、一度尖らせた口を開くことはなかった。

夕飯は麻希が準備した鍋を、囲炉裏を囲んで食べた。

正月らしいゆったりとした時間を過ごしたが、食事が終わると賢一が突然帰ると言い出した。

守は泊まっていくよう言ったが、明日の朝一で大輝を大きな公園に連れていくとかで、自慢の檜風呂に入ることもなく三人は帰っていった。

窓から見える赤いランプは、呆気ないほどすぐに遠くへ消えていった。

守が布団に入った頃、居間にある黒電話がけたたましく鳴り響いた。いつもとは違う、耳に刺さるような音だった。

恐る恐る受話器を耳に当てると、電話口の向こうでは、野太い声の男性が落ち着いた口調で事故について伝えた。

いっさいの感情は含まれておらず、相手を興奮させないそんな話し方だった。

賢一の運転する車がセンターラインをはみ出した大型トラックと正面衝突し、三人は病院に運ば

れた。

命の危険もあるとの事で、すぐに病院に駆けつけるよう病院名と住所が告げられた。

守が病院に行く手段がないことを伝えると、すぐに車を手配するので家で待つよう指示された。うす汚れた軽トラックは、対向車のいない山道を猛スピードで突き進んでいった。車から放たれる黄色い光だけが、暗闇のなかで蠢いていた。

気付けば指定された日向市の病院入り口に着いていて、守は中へと駆け込んでいった。

医師の説明によると、麻希は即死、賢一は一命を取り留めたが、先ほど死亡が確認された。

孫の大輝だけが、危険な状態ではあるが生きているとのことだった。

心臓の中心を細い棒で、なんども強く押されているようだった。医師の話す言葉は耳へ届くことなく空を切って地面に落ちた。

医師の胸元の名札に野上という文字を見つけて、そういえばむかし野上という同僚がいたことを思い出した。

誰もいない待合室の冷たいイスに座り、窓の外でぼやける街灯だけをただじっと見つめていた。

さっきまでの出来事は、とてつもなく遠いことのように、そもそも夢だったのではないかと思った。

だが、家に帰ると鍋がまだほんのりと温かみを残していた。

時間を忘れて、ひたすら鍋を磨いた。束子が壊れるほど握りしめていた。磨いても磨いても、鍋は元通りにはならなかった。気づけば、守の掌には無数の傷が出来ていた。

大輝がやってきたのは、それから二週間後の一段と寒い日の夕方だった。

奇跡的に助かった大輝には、守以外に身寄りがなかった。

黒いコートを来た小柄な女性に手を繋がれて、大輝がふたたび守の家へやって来た。

引き戸を開けて中に入っても、土間の角に立ったまま一歩も動かず立ち尽くしている。

「ほら、じいじのおうちだよ」

やさしく肩に手を乗せる彼女の声にも反応せず、掌を強く握りしめている。

荒井加代と名乗る彼女は、役場から派遣されたカウンセラーだった。

電話で何度か話をしていたが、想像よりも若いことに驚いた。

肩から提げた大きな鞆の中から汽車のおもちゃを取り出すと、やさしく大輝の手に握らせた。

「少しでも待っててね」

大輝が車で遊び出すのを確認してから、守がいる和室にそっと移動し後ろ手に戸を半分だけ閉めた。

大輝の様子について、荒井は丁寧にゆっくりと説明した。

大きな怪我もなく、かすり傷程度で済んだこと。咄嗟に母親が覆い被さるかたちで衝撃材になってくれたこと。救急隊が到着するまでの間、母の腕の中に包まれていたこと。病院では笑顔も取り

戻したこと。

一通り話し終わると、顔をあげて守の目を見た。

「支えになってあげてください。お願いします。何かあればすぐに連絡をください。いつでもかまいません」

そう言って名刺の裏に携帯番号をメモして手渡した。

「大輝くんは元気です。正確には、元気そうに見えます。けどそれは、一種の現実逃避の状態なんです」

守が名刺をじっと見つめていると、荒井が和室の戸を少しだけ開けた。

「大輝くん、お父様とお母様がいなくなったことを分かっています」

僅かに開いた隙間から、ぶつぶつ言いながら汽車を走らせる大輝が見えた。

「そうですか。あんな子供が」

「ええ。大輝くんは、ご両親がいなくなったことを理解しています。事故のあと一度もパパ、ママと言わないんです」

「はあ……」

「でも、心の底ではまだなにも消化できていないと思うんです」

「いつまで……」

守は途中まで言いかけた言葉を喉の奥で飲み込んだ。

なにも答えが見つかからないことだけは分かっていた。

荒井が深々と頭を下げて大輝の元へ戻っていくと、甲高い二つの声が天井の窪んだ部分で混じりあつた。

彼女の帰った家の中は驚くほど静かで、雨戸が揺れる音が聞こえるたびに互いに目を合わせた。

何度目かの音はひととき大きなものだったので、守が目を大きくさせると同じように大輝も目を見開いた。

不自然かもしれないが、口角を上げて歯を見せて笑ってみると、同じように大輝も笑ってみせた。その日の夜は布団を二つ並べて眠りについた。

翌日から本格的に二人の生活が始まった。

天窓から月明かりがほのかに差し込む部屋のなかで、守はじつと天井を見つめゆっくりと息を吐いた。

隣の布団では、呼吸に合わせて布団が小さく上下している。その膨らみに合わせて穏やかな寝息が聞こえてきた。

布団から少しだけはみだした手は、強く握れば潰れてしまいそうなほど、小さくて弱々しかった。そっと一枚だけ雨戸を開けると、空が夜明けの準備をしていた。

やがて星はなくなり、空には月だけが微かに残る。しばらくすれば、太陽が出てきて月も姿を消し

てしまおうだろう。

そんなことを頭のなかに巡らせているうちに、鳥たちが鳴きはじめ眩しい光が差し込んできた。

守は立ち上がって、大きく伸びをした。

「おはようございます」

努めて明るい声で、まだ眠っている大輝の布団を剥がすと、呻き声とともに顔をこすっている。

「ううう……パパ」

「……ほら大輝、朝だ」

「……うん」

「寒くても起きなさい。朝だ」

転がるように布団から出て、ようやく起き上がった大輝だが、立ったまま目を瞑っている。その横で守が布団を畳んでいく。

窓を開けると生ぬるい部屋の中に爽やかな冷たい風が注ぎ込まれ、草の匂いもくっついてきた。

体中の細胞が一気に覚醒される。

大きく息を吸うと空気の味がした。

「さあ。顔を洗おう」

鏡の前に並んだ二つの顔は、眉毛のかたちだけが唯一そっくりだった。

普段通り豪快に顔を洗う守を、大輝は不思議そうに見上げていた。

「ほら大輝も顔を洗いなさい」

裏返したビール箱の上に乗っていたので、次第に足の裏が痛くなってきた。けれどいつもの椅子はなさそうだから我慢することにした。

「つめたい……」

「冬の水は冷たい」

「……やだ」

人差し指の先だけ水に触れてはみるが、この日は顔を洗わなかった。大輝は首を傾げ、どうしてこの家にはお湯がないのだろうかと考えていた。

朝食はパンと取れたての野菜が山盛りテーブルに並べられた。綺麗な盛り付けではなかったが、色取りだけは鮮やかだった。

大輝は手づかみでパンや野菜を口に放り込み、手の甲を上手に使って溢れたきゅうりを押し込んだ。大輝の椅子のまわりにだけ、レタスやにんじんの欠片がいくつも散らばっていた。

その日は牛乳のコップも二度倒した。

「にゅうにゅう」

「ああ……動かない」

大輝の食事が終わると、コーヒーを温め直しいつもの食事を始めようとしたが、自分用に焼いたトーストは、一かじったただだけでゴミ箱に捨てた。

太陽はまだ東の空を昇っていた。

「散歩しよう」

首を傾げる大輝に、後ろからジャンパーを着させた。

昨晩降り注いだ雨もすっかりやんで、家の前の小道には、大小いくつもの水たまりが浮かんでいた。

大輝は泥水の表面をじっと眺めている。太陽の光を反射する水たまりには、突然なにかが出てきそうな不思議な雰囲気があった。

守も雲一つない空を見上げて、裏山から降りてくる風に耳を澄ませた。

軽快に擦れ合う葉の音を聞いていると、書齋の窓を開けて原稿用紙に筆を走らせる自分の姿が頭に浮かんだ。こんな日は、いい文章が書けそうだ。

「あおいねえ」

空を指さす大輝と目が合い、散歩に出かけることにした。

「あぶない」

目の前の水たまりに大輝が足を踏み入れそうになったので慌てて手を引いた。

「しつかり前を見て歩きなさい」

大輝は俯いて、ちいさく一度頷いた。

初めての散歩は、田んぼの周りを一週歩いた。いつもは五分で歩けるところを、その日は一時間も掛かった。

次の日も、その次の日も朝食が終わると二人は散歩へ出かけた。

同じ道を歩いて、同じ景色を見る。

同じところで留まり、同じ顔をする。

家の横にある十段ほどの石段を、大輝は上がっては下がってを繰り返した。

時折、段差の隙間を覗き込んでなにごらひしている。

「いないねえ」

守も覗いてみたが、何物もいなかった。

階段の下に立ち、股の間から顔を出して、家の方向を見てみた。

大きな木の後ろに大きな木があり、その後ろにはもつと大きな木がそびえ立っていた。そこが森であって、その上には薄い雲が散りばめられた空が広がっている。

「おお。くも。ハレ」

大輝が見たものを順番に声にしていく。

彼の無邪気な姿を見ている、息子が幼かった頃のこととは思いつけずにいた。

何か手掛かりを手繰り寄せようとしても、記憶の線が切断されていて映像がなにも浮かんでこなかった。幼い賢一の輪郭はぼんやりとしていて、霧の向こう側で音もなく遊んでいた。こちらから近寄ろうとしても、背中を向けて離れていってしまう。

大輝と暮らし初めて一ヶ月が経った。

朝起きると、家の前の小道にはいくつもの水たまりが浮かんでいた。

「あめ。あめ」

全身の力を使って引き戸を開けた大輝が、嬉しそうに外を指さしている。

「水たまり」

「みじめめり……」

「みずたまり」

小さな水たまりの真ん中に、茶色い葉っぱがそとと舞い降りると、水の輪っかが外側に徐々に広がっていった。

吸い寄せられるように大輝が走り出すと「やめなさい」と守の手が伸びた。

危うく水たまりにはまるところだった。

守と大輝の生活も、日めくりカレンダーを捲っていくように規則正しく過ぎていった。天窓から差し込む日射しで目を覚まし、冷たい水で顔を洗い、瑞々しい採れたての野菜を口いっぱい頬張る。

天氣が良い日は、氣の向くままに散歩に出かけた。その日の氣分で歩く道が決まった。暖かい風が吹く頃には、石段の隙間からヤモリが顔を覗かせることもあった。

春を喜び、夏に埋もれて、氣がつけば冬の足音がもう山の向こうまで迫ってきていた。

稲穂が山に向かって傾くの横目に、二人は神社のそばの小さな公園まで歩いた。

「のりたいね」

木漏れ日のなかに古びたブランコが二つ並んでいる。

「乗ってごらん」

まだ小さな背中を後ろから押してやると、軋む音を立てながら、ブランコがそっと風を掴んだ。

大輝は、俯いたまま地面を見ている。

背中を押す勢いが、無意識に強くなっていく。

「会いたいねえ……」

大輝の言葉は空を切って、守には届かない。

徐々にブランコの揺れが大きくなり、大輝の掌にはじつとりと汗が滲んでいた。

守の耳は木々の揺らぐ音に奪われ、頭のなかでは儚い海を見ていた。背中を押す手が、さらに強くなる。

「こわいよ……」

「こわいよ……」

「こわいよ……」

遠ざかる声にはつと目を開き、地面に横たわる大輝の肩を抱き寄せた。

「大丈夫か」

振り返ると、ブランコが止まることなく、大きく揺れ続けていた。

「もう……こわいね」

大輝は目尻を少しあげて、やさしく微笑んだ。頭を撫でると照れくさそうに顔を背けた。

「帰ろうか」

「かえろう」

田んぼ横の畦道を歩いていると、先を歩く大輝が立ち止まって、なにか言いたげな表情でこちらを振り返っている。

近づくと、ちいさな水たまりの前で大輝は立ち尽くしていた。

避けて通ればいい、ただの水たまり。

「はら、いこう」

そう言って、大輝の横を通り過ぎようとしたとき、守のなかに突然、何十年前の記憶が蘇ってきた。そこには、大輝と同じように水たまりの前で立ち尽くす賢一。

雨上がりの砂利道には、ちいさな水たまりが浮かんでいた。

賢一が勢いよく足を踏み入れると、細かい水しぶきとともに泥が顔にはねた。

気づいたときには、振り向いた賢一の左頬に強い張り手をしていて、突き飛ばされた賢一は音を立てて尻餅をついた。

あれほどまでに、怯えた目を見たことはなかった。

知らぬ間に、蓋をしていた記憶だった。

あの日から、賢一は守の前で笑わなくなった。

いつからだろう。

水たまりに心が奪われなくなったのは。

いつからだろう。

水たまりを避けるようになったのは。

いつからだろう。

水たまりを嫌いになったのは。

自分の歩いてきた道のりは、間違っではないいけないけれど、正しくもなかったのかもしれない。そんな気がした。

いま守と大輝の前にある水たまりは、足を踏み入れると、どこまでも吸い込まれてしまいそうだった。守はゆっくりと空気を吸い込み、肺の奥底から一気に押し出した。そして大きく屈んでから、空を見上げて水たまりに飛び込んだ。

ぴしゃという乾いた音とともに、泥水が跳ね上がる。

守と大輝の顔に泥が飛び、二人が同時に目を擦る。

「じし」

驚いた表情をして、守を見上げる。

やがて頬を緩ませ、口を大きく開けて笑った。

キラキラした二つの瞳は、どんな星よりも煌びやかに輝いていた。

「じし、じし」

大輝が大きな声で呼びかけた。

初めての『じし』は、守のなかで何度も何度も繰り返された。

「じし」

水たまりに大輝も入ってきた。

目を細めてにこにこ笑っている。

かがみ込む大輝の横で、守がこんどは尻もちを着いてみせた。

「じし」

声を出して笑いながら、大輝も尻もちをつく。

誰もいない畦道の真ん中で、尻もちをついた二人は寝転がって空を見上げた。

雲一つない空が、どこまでも広がっている。

「あおいねえ」

「青いねえ」

横を向くと、泥水が頬に触れた。

風と水たまりの間に、土の匂いがある。

大輝もこつちを向いて、笑っている。

「つめたいねえ」

「冷たいねえ」

泥だらけの顔を近づけながら、幾度となく笑いあった。

あの日から五年の月日が流れた。

師走祭の開催が明日に迫っていた。

五年という月日は、短いとか長いとかではなく、守にとって間違いなく幸せな時間だった。暗がりの中、天井を見つめながら大輝が静かに話しはじめる。

「じし起きてる」

「ああ、なぜだか目が冴えている」

「よかった」

「眠れないのか」

「あしたのお祭りいっしょいこねえ」

「ああ。そうだな」

「空、明るくなるかなあ」

「ああなるとも」

「たのしみだねえ」

「楽しみだ」

眠りにつく前、大輝はいつも守に話をした。今日起きたこと、明日のこと、ずっと前のこと、ずっと先のこと。

見えるもの、見えないもの、心のなかで起きたことを、ぜんぶ守に訊いてもらいたかった。

大きな咳払いをして、少しだけ大きな声で守が話しだした。

「大輝も、大きくなったから、大切なことを伝えておくことにする」

「たいせつなこと」

「ああ、そうだ。師走祭の秘密だ」

「うん」

「大輝の心の中にだけ留めておきなさい」

「……そうする」

「空の色が炎で橙色に変わるだろう」

「うん。空燃えるんだ」

「あの時、あの世からは炎に照らされた場所が見えるんだ」

大輝は暗がりの天井を見上げながら、橙色の空を思い出していた。

「あのよ」

「あの世って言うのは、大輝の父さんや母さん、おばあちゃんがいるところだ」

「へえ、そうなんだ」

理解しているのかどうかは分からなかったが、口のなかで何かを呟いていた。

「会えるの」

「会えない。向こう側からしか見ることが出来ないんだ」

「そっかあ。晴れるといいね」

「そうだな。おやすみ」

「おやすみ」

守が四十年前に美郷を訪れたとき、妻から教えられた話だった。

誰にも言わずに、心に秘めておくつもりだったが、大輝にだけは伝えておきたいと思った。いや、伝える義務があると。

翌日は、雲一つない快晴だった。

「じし。行くよ」

「まだ早いだろう」

引き戸を開けて待ち構える大輝の背中には、真新しい黒のランドセルが背負われている。

この春から、小学校に通う予定だ。

「はやく、はやく」

なんども空を見上げては、守を急かす。

「晴れたね」

部屋の奥から、守が大輝の体の半分はありそうな大きな白菜を抱えてきた。

「じし、それ持っていくの」

「持っっていこうかな」

「やだよ。ねえはやく」

「ランドセルでいくのか」

「うん。だつて見てもらうから」

太陽が夕焼けに変わりかけ、もうすぐ迎え火が始まろうとしていた。

迎え火の炎と煙が勢いよく天に昇り始めると、大輝がそつと守の手を握った。少し離れた畦道に佇む二人の顔が、明るい炎に照らされている。

「見えてるかなあ」

「ああ。見えてるさ」

「会いたいねえ」

「ああ。会いたいね」

「じしも会いたい人いるの」

「……ここにいる」

そう言つて大輝の首を擦ると、天まで届きそうな大きな声で笑つた。

そつと佇む二人の場所にだけ、下から巻き上げるような強い風が吹いた。

「寒いねえ」

「寒いね」

最後の煙が空に溶けてなくなるまで、いつまでも遠くを見つめてふたりは佇んでいた。煙が消えたあとも、空がぼんやりと橙色に染まっているようだった。

優秀賞（審査員特別賞）講評

地域創生プロデューサー
高野誠鮮

2017年9月、宮崎県美郷町に呼ばれ、まだ檜の残香のする「西の正倉院」を見学し、百済王渡来伝説を耳にした驚きと、地域に埋もれているお宝を掘り起こし活用できるかもしれないという、根拠の無い淡い期待感が同時に去来したことを今でも覚えています。

原寸大の正倉院を造り上げたいきさつや、この地域に伝わる伝承伝説をこれからの地域活性に活用できないものか。元TBSビジョン（現社名・TBSスパークル）のエグゼクティブ・プロデューサー本間修二さんに連絡を入れ、美郷町の職員と一緒に相談に乗って頂くと、「新しく物語の募集をしようよ！」ということに。この一言から「みさと文学賞」は始まりました。

私は、多くの秀逸な作品の中から「風」を選ばせて頂いた。それは、今日のギクシヤクしている日韓関係の融和と解決の糸口を、美郷町を舞台とするこの作品から垣間見ることができたからです。

かつて本間さんは、超能力特番、私は、UFO特番を手掛け、この二つが手を組み「みさと文学賞」が産まれてきました。

この文学賞が発端となり、小説化やラジオドラマやTVドラマ、或いは映画化され、放送メディアと日本放送作家協会と自治体が異体同心となって行う地方創生の一つのモデルとなることを願ってやみません。

優秀賞
(審査員特別賞)

「風」

志奈



そつと階段をあがる。昇りきった上から振り返ると遅い紅葉が始まった山が見えた。

「ほんと、何も無いわね」

建物の前は広場のようになっていゝる。山に囲まれた豊かな自然。遅い紅葉が疎らに見え、時が止まったように風までが穏やかだ。鳴野しぎのきょうか杏花は大きく息を吸い込んだ。

「そうなんですよ。お陰でこの有様で」

苦笑しながら少し距離をとつて並んだのは、このイベントの主催者である井上だった。まだ三十そこそこの青年だ。

「まだ早い時間だからじゃないの？」

いえいえ、と井上は笑みを深めて首を振る。ちょうどその時、観光客と思しき年配の二人連れと学生のような若い女性の三人組が館内に入つていくのが見えた。

「土曜日だからまだ多いほうですよ。平日なんか半日お客さん来ないなんてこともあるんですから」

「大変ですね」

杏花は井上の言葉を聞き流しながら、山向こうに目を凝らした。都会では五メートル先にビルがある。建物で遮られない風景を見たのはいつ以来だろうか。

「建てられたのはいつなんですか」

杏花が立っているのは奈良の正倉院を復元した西の正倉院といわれる建物だった。ただ古都奈良とは違い、ここは宮崎県である。寺社や過去の遺物は奈良の比にならないほど少ない。

「一九九六年です。二十二年前になりますね」

「そうですか」

杏花は目を開けて建物に向き直った。

「もっと古いものかと」

確かに、と井上は頷いて続けた。

「奈良の正倉院原図を元にして忠実に再現したレプリカですからね、真新しい感じはしないでしよう」
それに、と井上は自慢げに、樹齢四百から五百年の木曾天然檜を使ったんです、と加えた。

「もう今ではなかなかそんな木材は手に入らない。京都の寺社が立替のために苦勞していると聞きます。もつとも彼らはそのために植樹を続けていますけど」

「そういえば、去年清水寺にお参りした時、そんなことを聞いたわ。工事をしていて古い柱が展示してあったの。じっと見ていたら、お寺の方がそう仰ってた。切ってから長い間乾燥させなければならぬんですって」

ええ、と井上はまた頷く。

「そんな苦勞をしたのにこの有様では、ね」

言葉を選びながら井上は溜息をついた。京都のように観光資源で溢れているわけではないのだから、これだけのためにこんな山奥までやってくる物好きなどそれほど多くはないのだろう。

「でも素敵なところ。なんだか懐かしい気がして」

ことさらお世辞でもない。目を細めると井上が安堵したように横顔を眺めるのがわかった。杏花は笑みを返し、館内を案内してもらうため入り口に向かった。

村おこしの舞台などまったく興味が無かった。舞台女優として高い評価を受ける杏花がこんな山奥での一日限りの仕事を引き受けたのは、演出家から直接依頼があったからである。

「ねえシギちゃん、急なんだけどさ」

急なんだけどさ、という時の佐々木俊哉からの電話はロクなことがない。三日後に開幕の舞台に穴が開いたから代役を、とか本決まりだった主演女優が急に降りたから引き受けてくれ、とか。

「イヤです」

内容を聞く前に返事をする。佐々木は電話の向こうで、やれやれ、と大袈裟に溜息を吐いて見せた。
「頼むよ、シギちゃんしかいなくてさ」

十八で初舞台を踏んだ時、佐々木は演出家の助手だった。日本を代表する大御所の演出家が去年鬼籍に入り、その後を担うと目される佐々木が直接持つてくる仕事など面倒に違いない。

「無理ですよ、先生。お仕事ならちゃんと劇団通してくださいね」

「話したよ、ちゃんと代表と」

「あらそうですか。聞いてませんけど」

「直接交渉して、落とせたら許可するって」

今度は杏花が溜息を吐く番だった。

「つまりは大変なお仕事ってことですか。明日が初日とか」

「いや、ラクだよ。読み語り」

「読み語り？」

「そう、台本見ながら朗読。小芝居挟みながら」

「ふうん」

「稽古は前日一日と当日のゲネだけ。気分転換になるぞ、空気美味しい」

「ねえ先生、今どこにいるの？」

杏花は電話を右手に持ち替えた。

「宮崎県美郷町」

「——どこ、それ」

よっ、と片手を上げた佐々木は日焼けしている。稽古場である廃校になった小学校の体育館の隅で、佐々木は数人のスタッフと台本を囲んでいた。佐々木の声に、スタッフが一斉に杏花を見た。

「おはようございます」

杏花があいさつをするよりも早く、館内の全員が大きな声でいいながら頭を下げた。

「おはようございます、鳴野です。よろしくお願いします」

杏花は良く通る声でそういつて深く頭を下げた。案内してきた井上が恐縮したように一步離れた。杏花は振り返り礼をいう。

「ご案内、ありがとうございます。もう一人で大丈夫ですから」
「はあ」

呆然と生返事を返す井上をそのままに、杏花は佐々木の方へまっすぐ向かった。スタッフの視線を堂々と浴びながら背筋を伸ばし、口元に微かな笑みを浮かべて。

「久し振り、シギちゃん」

「お久し振りです、佐々木先生。よろしくお願ひします」

うん、と頷いた佐々木は杏花に椅子を勧めた。

「受けてくれてありがとな、助かった」

「ええ、貸ししておきます」

笑いながら杏花は腰を下ろし、バッグから台本を出した。外はまだ暑いが館内はひんやりとしていて、心地良い緊張を孕んでいる。

「で、大丈夫なんですか、彼女」

「ああ、たいしたことない。若いからすぐに治るだろう」

「そうですか、良かったです」

「観には来るらしいぞ、明日」

「恥ずかしくない舞台にしますから」

「おう、頼もしいな」

佐々木はニコリと笑う。二十年前と少しも変わらないこの笑みが杏花は好きだった。初舞台で演出助手をしていた佐々木はその二年後、自身の初演出の芝居のヒロインにまだ無名に近かった杏花を起用した。

「わたしのほうが上手い、とかいわれないようにしなきゃ」

杏花の役をやる予定だったのは地元出身の若い女優で、最近主演映画も封切られたせいもあり人氣が出始めていた。しかし一週間前にバイク事故を起こし、手足を骨折してこの舞台に出る事ができなくなったのだった。凱旋公演だと張り切っていたらしい。

「なあに、大事な仕事の前に怪我するような役者にシギちゃんか負けるわけないって」

「相変わらずですね、先生も」

「杏花さん！」

笑いながら杏花が台本を開いたのと同時に背後から声がした。

「あら諒くん」

「おはようございます、母上」

大江諒は人氣の出始めたテレビ俳優で、杏花とは昨年シェイクスピア劇で共演している。

「よろしくね、福智王」

「相変わらず麗しい」

諒が芝居がかった言い方で杏花の前に跪いた。

「それ、オレの台詞」

「違うよ、オレですよ春日井さん」

春日井の声のあと、僅かに間があった。佐々木の氣遣わしげな笑みに目で答えてから杏花は笑みを刻み直して振り向いた。春日井秀司も今回の共演者の一人だ。

「メインキャスト顔合わせになったな、こりゃ」

佐々木は揃った顔を見渡し続けた。

「春日井秀司さん、禎嘉王役。禎嘉王と行動を共にするのが次男の華智王、劇団Mの林健次郎さん。長男福智王は大江諒。彼と共に動くのが禎嘉王の後、之伎野、鳴野杏花さんです。よろしく」

「綺麗」

見上げて呟いたきり、言葉がでなかった。西の正倉院のすぐ南側に百済の館はあった。壁面や天井など建物のいたるところに施された装飾は鮮やかな青や赤に塗られていて、その細かい細工に杏花は魅入られたように眺めていた。

「この染色は丹青タンチヨウといましてね」

井上が静かに続ける。

「韓国から専門の職人を呼んだんですよ。丹青は韓国特有の塗料で百年は変色しないそうです。丹青師は国家資格で、誰でも出来るわけではないんです」

「ええ、そうでしょうね」

杏花は息を吐いた。丁寧な職人仕事は美しいなどという陳腐な言葉では表せない。見事、という他ない気がした。

「百済最後の王都『扶餘』の王宮跡に立っている『客舎』をモデルに、建てられました」

重厚な石の土台の上に建つ城壁の館は、赤く塗られた柱に支えられ白壁が映え、屋根の反り返りの裏は深い緑を基調にして蓮華や鳳凰に龍など細かい文様がこれでもかと描かれている。

「瓦や敷石も韓国から取り寄せました。中には百済時代の国宝や文化財を多く展示しています。レブリカですけどね」

井上の説明を聞きながら敷石の上をゆっくりと歩き、杏花は大きく息を吸った。晩秋の風が心地良く頬を撫で、思わず目を閉じる。

「あっ」

小さく声を上げた杏花に、どうかしましたかと井上が問う。目を閉じたまま彼を手で制し、もう一度風の名残を吸い込んだ。

「——何の匂いですか」

目を開けた杏花は井上にそう訊いた。匂い、と井上は訝しげに首を傾げる。

これ、といいかけて杏花は眉根を寄せた。匂いが消えたのだ。土のような木のような、なんとも
いえない懐かしい匂い。

「ごめんなさい、気のせいでした」

苦笑して詫びた杏花に井上はいいえと首を振った。

「都会とは違いますからね。風はいろんな匂いを孕んでいます。花や草木、或いは水」

「——水」

「大和も百済も海に面した国です。海を挟んですぐ隣なのに」

口籠った井上に杏花は顔を向けた。いえ、と少し気まずそうに井上がいう。

「この建物も日韓友好のシンボルとして造られたものなんです。なのに、ね」

ね、と切った言葉の真意を杏花は正確には計りかねた。だが昨今の拗れた日韓関係のことである
うことくらいはわかる。

「あなたはもうなんですか」

杏花は建物の前の広場に目を移しながら訊いた。

「どう、とは」

「韓国、嫌いですか」

はあ、と井上は杏花に並んだ。

「韓国、というより僕は百済が好きなんです」

「――百濟」

「ええ。ほら、あれをご覧になってください。見事な蓮華だとは思いませんか」

井上の指した壁の上方には、なるほど鮮やかな赤と桃色で目の覚めるような蓮華が咲いている。

「なんだか京都で見たような気がするわ」

「ええ、そうです。百濟は大和よりずっと進んだ文化を持っていた。多くの渡来人が日本に帰化し、

技術を伝えたんです。鳴野さんが京都でご覧になったのもきっと百濟文化の影響を受けた寺でしょう」

「そうなんですか」

「今の韓国がどうかかそういうのではなく、僕は純粹に百濟の人々に敬意を抱いています。という

ことは、その子孫である韓国の人たちにも敬意を払いたい」

「払いたい？」

「ええ。しかし残念ながら、我々の間には誤解が生じていると感じています。誤解、というより無知」

「無知、ね」

「ええ。どこの国だって自国が一番っていうところはあるでしょう」

「そうかしら」

「そうですよ、と彼は少し顎を上げた。

「日本だってそうです。日出処の国、日の本。名前からして高慢だ」

杏花が微かに苦笑したのにも気づかず、井上は饒舌になっていく。

「イザナギとイザナミが日本を作ったのと同じような伝説が韓国にもあるんです。きっとこの国だって、自分たちの国が最初に作られたという伝説があるはずだ」

「あなたは日本の国生み神話を否定するの」

「いいえ、と井上は首を振った。そうじゃありません。ただもつと謙虚に認め合い、互いを尊重すればいいと思うだけです。」

「理想論ね」

「そうでしょうか」

「イマジンの世界だわ。だけど国境はこの先なくなることはないし、民族紛争も宗教戦争もなくならないと思いますけど」

「――残念です」

井上は広場の向こうに目を凝らし眩いた。

「鳴野さんがそんなふうに仰るとは思っていなかったです」

「わたしだから、かも知れませんが」

二人はそれきり押し黙り、しばらく風の向こうを眺めていた。

「じゃあ昼から立ち稽古します。一旦解散」

腕時計を見て佐々木がいうと、諒がふうと大きな溜息をついた。

「大丈夫？」

隣に座っていた杏花は台本を繰りながら訊く。

「大丈夫じゃないですよ、めちゃくちゃ難しいじゃないですか。段取り覚えられるかなあ」
覗き込んだ諒の台本の汚れ具合に杏花はクスリと笑った。

「今回は台本片手なんだから大丈夫よ」

「って杏花さん、台詞全部入ってるし」

杏花は笑って諒を見た。

「癖なのよ。なんか完全に頭に入っていないと不安で」

「だからってオレの台詞まで完璧に覚えることないじゃないですか」

「台本見ながらなのに嘔むからよ。ちゃんと読んできた？」

読み稽古の間にも若い諒には佐々木からの容赦ないダメだしが飛び、彼の台本は書き込みで真っ赤になっている。

「隣に杏花さんいるからですよ、緊張して」

「あらわたしのせいなの？」

「そうですね、母上」

「頑張れ息子」

はい、と答えて諒は座ったまま伸びをした。

「ほれ、弁当」

ぼん、と杏花の前に佐々木が包みを置いた。

「ありがとうございます」

「佐々木先生、杏花さんだけですか？ オレには？」

「あっちにある。野郎は自分で取りに行け」

「あ、それってセクハラっすよ」

「どこがどうしたらセクハラになるんだよ」

「男女差別じゃないですか、どうせ持ってくるんだったら一つも二つも一緒でしょ」

杏花は思わず笑い出し、目の前に置かれた弁当を諒の前にやった。

「これ頂きなさい。わたし取りにいきますから」

「もらいたいののは山々ですが」

諒は上目遣いで佐々木を窺いながら、そっと包みを杏花に返した。

「佐々木先生に殺されそうなので遠慮しておきます」

「当たり前だ、馬鹿野郎」

「うわ、パワハラ発言」

もうお前は、と手を上げる仕草をした佐々木から逃げるように、諒はキャーと笑いながら立ち上がって弁当を取りにいった。諒の向こうの椅子が空いていることに気づくと杏花は一瞬泣きそうな

顔になった。

「あいつ、外に出たみたいだな」

「そうですね」

ぎこちなく笑いながら返した言葉を佐々木は聞き流さなかった。

「何年になる」

「何がですか」

「わかってて訊くな、別れてだよ」

「八年です、わたしが三十の時ですから」

「お前もう三十八かよ」

「そうですね、先生だってもうすぐ五十でしょ」

「まだ四十六だ、勝手に繰り上げるな」

杏花は笑って弁当の包みを開けた。鮮やかな山菜や煮物など、家庭料理が溢れるほど入っている。

「わあ美味しそう」

「なんで別れた」

「——それ、今答えなきゃいけませんか」

「ああ、答えろ」

弁当を眺めたまま息を吐き、小さな声で続けた。

「わたしが子どもを欲しがったんです。でも彼は望んでなくて父親にはなれないと。離婚というやり、わたしを解放してくれただけ」

「どんな言い方したって離婚は離婚だよ」

「そうですけど、と杏花は顔を上げた。」

「でも結局、こんな年になっちゃった。彼以上に結婚したい人を見つからなくて。なんかバカみたい」

「みたいじゃなくてバカなんだよ。お前は昔っから無いものねだりばっかだし」

「ねえ先生」

ん、と佐々木は杏花ではなく戻ってくる諒を眺めている。

「お弁当頂いていいですか」

「食えよ、せっかく持ってきたのに」

「食事まざくなりそう、先生と話してると」

まあそういうなって、と佐々木は杏花の頭を小さな子どもにするようにポンツと叩いた。

「知らん間に結婚してさっさと離婚してから事後報告だもん。ずっと気になってたんだ」

「すみません、御心配おかけして——」

「あつちで食えよ！」

頭を下げた杏花の言葉を遮り、佐々木は弁当を手に戻ってくる諒に叫んだ。

「やですよ、杏花さんと食べたもん」

先生こそ、と諒は椅子を引きながら顎を上げた。

「向こうで食って下さいよ、ほらスタッフさんと打ち合わせとかあるんじゃないですか」
「るっせえよ」

いいながらも遠慮がちに佐々木を呼ぶ声を耳にして、佐々木は立ち上がった。

「そういえば、杏花さんって春日井さんとなんかあったんですか」

屈託の無い笑顔の諒の問いに行きかけた佐々木の足が止まる。

「どうして？」

杏花は割り箸を割りながら訊き返した。

「どうしてって訊じゃないですけど」

諒は杏花の弁当を覗き込んで美味そうと目を輝かせた。

「なんとなく、杏花さんの春日井さんを見る目が」

「元夫よ」

「ゲッ」

ゲッて何よ、と笑う杏花に、佐々木は眉根を寄せた。

「マジっすか、それ」

「マジっすよ、諒くん」

杏花は割り箸を握ったまま佐々木を見上げ頷いた。

「極秘結婚だったから秘密ね。もしリークしたら二度と一緒に仕事しないから」

「しませんよ、いやあマジびっくりした。なんで別れたんですか。春日井さんの浮気とか」

「ううん、わたしの我儘。彼は悪くない」

ああ、と諒が呟いた。

「何がああ、なの」

「なんか、わかった気がしたから」

「なんのこと」

「ヒミツです」

杏花はそれ以上訊こうとせず、諒も口を閉ざした。佐々木はまた杏花の頭を軽く叩き、二人の傍から離れた。

『なんてこと』

杏花は手元の台本を見ていない。読み語りという形式なので台本を見ながらでいいのだが、杏花は台詞をすべて覚えてしまっていた。

『ご心配なく母上。あと数日歩けばお父上に会えます』

『福智王や、禎嘉王や華智王は息災なのでしょいか』

ここ宮崎県美郷町には百済を追われた王族が日本に逃亡してきたという伝説が残る。禎嘉王を祭

る神門神社や離れた父王に長男である福智王が会いに行く師走祭りも行なわれていた。だが知名度は低く、観光資源としても乏しいことを憂えた自治体が企画したのが今回のイベントである。

西の正倉院を使って百済王伝説を読み上げ広く周知してもらおう、というのが趣旨であった。そのヒロイン、つまり后役に決まっていた地元出身の女優がバイク事故を起こし、急遽代役を務めることになったのが鳴野杏花だった。自治体主催の公演ということで稽古は前日の一日のみ。夕方からの公演を控え、場当たりを終えて今は舞台となる正倉院前で稽古中である。

メインキャスト四名は揃って白いシャツにジーンズという格好で派手な衣装はない。台本片手に時に狂言回し、時に役をこなしながら立ち回る。その中で紅一点の杏花の良く通る声は、程よい緊張感と癒しを与えた。演出を手がけた佐々木俊哉は中央の席に腕を組んで舞台を見ていた。前日はうって変わって指示は何一つ飛ばないが、杏花はどこか違和感を覚えていた。長い台詞を淀みなく続けながら、佐々木を一瞥した。ほんの一瞬、目が合う。

『倒れて——』

「一度、止めて」

杏花の台詞を遮って佐々木がパンと手を叩いた。杏花が驚いたように佐々木を見る。

「十分休憩します。鳴野さんちよっと」

杏花は急いで舞台を降り佐々木の所へ向かった。

「なあシギちゃん」

周囲のスタッフから杏花を庇うようにして佐々木が杏花を呼んだ。スタッフらは気を利かせてかさりげなく離れる。

「どうした」

「何がですか」

「芝居はいい、なんかとてもいい」

「——どういう意味ですか」

「あいつか」

チラッと舞台上の春日井秀司に目をやり、佐々木は声を擧げた。

「だから何がですか」

苛立ちと共に出た声が擦れ、杏花は思わずすみませんと後ろを向いた。背後を通ったスタッフがチツと舌を打ち、在日が、と呟いた。

杏花は驚いて顔を向けたが、スタッフの姿はすぐに見えなくなった。

「どうした」

佐々木が台本を手に横に立つ。えっと、と杏花は頭を振って思考を戻した。

「おい、シギちゃん——？」

佐々木の焦った声に杏花は落涙していることに気づいた。

「すみません、なんでもありません」

涙はすぐに止まった。視線を感じて舞台に目を向けた。春日井が虚ろな目で見ていた。それを受け止めながら、杏花は急いで頬を拭った。

「大丈夫です、先生。全部昇華させます」

「——オレさ」

佐々木が春日井を眺めた。

「私情は挟んでないつもりなんだよ、だけどな」

「はい」

「駄々漏れなんだよな、お前。あいつがまだ好きで、好きで好きでたまらない。離れて暮らさざるを得ない王への後の思慕に転化してはいるが、オレにはさ、その裏が見えちまう」

「——すみません」

謝ることないさ、と佐々木は台本を開いた。勝手に妄想膨らましてんのオレだしな、悪いのはオレ。

「どうして先生なんですか」

「最初に話受けたとき、この後の役はお前に頼むつもりだった」

「——名前のせいですか」

「ああそうだ。後は之伎野、それだけでお前だなんて思った。でも地元女優ありきで始まった企画だったから無理でな。だから結局こうなったのは最初から決まっていたことなんじゃないかって思ったりする」

「光荣です。血はあちらですから」

「気にすんのか、そんなこと」

いいえ、と杏花はやつと笑顔を佐々木に向けた。

「母はこちらに帰化しましたし、わたしは日本で生まれて育って、韓国は外国って感じしありません」
「だよな」

「でも快く思わない人もいることは知ってます。理由は様々でしょうけど、そのことを非難するつもりはありません」

「——シギちゃん」

「だってそうでしょう？ 好き嫌いはどうしようもないこと。嫌いな国があるからって、どうすればいいんですか」

佐々木はフツと息を吐いて微笑した。

「演じる百済王族はみんな死んじゃうけど、でも美郷の人たちはまだ忘れずにいてくれて、お祭りまでしてくれてる。なんか嬉しくて」

「そうか」

「それにあの人とまた同じ舞台に立てるなんて思わなかった。もうすっかり整理したつもりだったのに、でもやっぱりそうじゃない。想いは消えない」

佐々木はじつと聞いている。杏花は集まり始めた人々を眺め、笑みを深めた。

「その思いは舞台上に込めます。王妃之伎野として、禎嘉王を想う気持ちに込めます」

「すっかり女優だな」

佐々木は目を細める。

「ついこないだまで、本番前は緊張でゲーゲー吐いてトイレから出てこなかった小娘だったのにな」
「おかげさまで」

佐々木は杏花に舞台上に戻るように手で示すとマイクを手にし、稽古再開と伝えた。

十七時。陽が落ち風が止んだ。開演ベルはない。舞台は静かに始まった。懐かしいような異国の音楽を奏でるのは地元高校の吹奏楽部。

「よろしくお願いします」

張られた舞台袖の影で、諒が小さな声でいう。

「よろしくね、諒くん」

僅かに緊張した声で答えて杏花は舞台を眺める。まだ暗黒のような舞台には主役の禎嘉王である春日井がスタンバイしている。

微かな匂いが漂う。今はわかる、これが丹青の乾く前の匂いだ。止んでいた風が吹き始め、杏花の髪を乱した。目を凝らす。春日井の影が振り返り、闇に慣れた目が合う。愛しさが胸を突く。

春日井の口の端が上がり、次の瞬間、祝詞のような声が山に響いた。

優秀賞（審査員特別賞）講評

民俗学者
遠志保

私は海の向こうからやってくる渡来人伝説の研究をしてきた。民俗学の立場から、伝説が地域の文脈のなかでどのように生かされてきたかを追ってきた。美郷町南郷神門には2003年、百済王伝説に縁があると伝わる木城・比木神社と神門神社の「師走祭り」の調査で訪れた。目的は論文執筆だったが、南郷神門の人々の温かさにふれ、以来、師走祭りに足を運ぶようになった。今年で16年になる。こんな縁で、「みさと文学賞」の審査員に名を連ねることになった。

作品は今年の師走祭りから帰ってすぐに拝読した。辻佳代子氏「郷光る花咲き盛る」は、まだ見たことのない美郷の桜を想像させてくれた。松岡博氏「月よ、高く昇れ」は、美郷の山を下りれば百済に繋がる海があることを思い出させてくれた。小松菜々香氏「サラバ、いつかゆく末で」は、小丸川が今昔を結ぶ役を担ってくれた。禎嘉王や福智王といった百済王伝説の主人公たちが、息を吹き返したようだった。

そのなかで私は審査員特別賞に原田須美雄氏「神門」を選んだ。前記の作品とは異

なり、ここに禎嘉王や福智王はいない。昭和初年の神門神社への学者来訪を祖母の記憶からたどりよせ、合併前の南郷村をなんとかしなくてはならないと格闘し、百済王伝説を見出していく。「小さな村の大きな挑戦」と銘打ち、「百済の里づくり」に奔走するなかで、多くの来村者がそれを支えた。神門に生きてきた人にしか書くことのできない、旧南郷村の記録となった。

「みさと文学賞」は、美郷町を知ってもらうきっかけづくりだったろう。そのなかで、百済王伝説が地域の人々の不断の努力によって伝承されてきたことが、美郷町の人の筆によって明らかになったことは意義深い。美郷町にはかつて『さいごう文芸』『いだごろう』などの地元文芸誌があり、いまも『美郷文芸』として文芸活動が続いていると聞く。新たな作品がまた美郷町から生まれることにも期待したい。

優秀賞
(審査員特別賞)

「神門」

原田須美雄



本稿は過疎、高齢化にあえぎ苦しむ行政と村人が未来への夢と希望を託し、地元に残る百済伝説をモチーフに再起をかけて挑む「小さな村の大きな挑戦」の物語。

一序章

宮崎県日向市から西へ四十キロ歌人若山牧水の生家を横目に山間を進む、やがて小さな峠のトンネルを抜け小丸川沿いに出る。更に川を遡り山奥へ、突然ポツカリ開けた小さな盆地に入る、ここが美郷町南郷で中心地を『神門』という。

正面にうっそうと繁る社叢に覆われた神門神社と、土塀をめぐらした閑静な一角に西の正倉院がある。九州山地に囲まれひっそりと佇む、まるで小さな山奥の都だ。ここが『古代史の謎』と呼ばれる百済伝説の村である。

その伝説とは、古代朝鮮の百済が滅び多くの王族も日本に逃れた。畿内地方に定住したが、その後の動乱から舟二艘で筑紫を目指すも瀬戸内で時化に遭い日向灘まで流され、父禎嘉王一行は今の日向市金ヶ浜、息子福智王たちは高鍋蚊口浦に漂着、それぞれ安住の地を求めた。父王は現在の南郷神門に、王子は児湯郡の木城町に定住した。王族は死後土地の人々により神として祀られ、神門神社・比木神社のご祭神となっている。両神社には王族の墓と呼ばれる古墳も実在する。

この伝説の証として村人が守ってきたものが二つある。一つは神門鏡と呼ばれる神門神社の社宝の銅鏡三十三面、馬鈴、馬鐸、直刀の鉄剣等の考古学的遺物。

もう一つは九十キロ離れた伝説の地の神様（王族親子）が、一年に一度対面する形で催される伝統ある師走祭り。

この祭りは複雑な祭事が織り成す味わいと、フクロガミと呼ばれる神輿以前の形態を残すご神体も特徴的で、日本ひろしといえども極めて珍しい祭りとされる。

昭和初年二人の学者が神門神社にやってきた、二人は広瀬都巽・新納忠之助。神門神社の銅鏡に初めて調査が入った日である。この日の事を神門神社の宮司だった（故）原田八郎の妻フイさんが克明に覚えていた。「奥さん、こんな立派な鏡がどうしてこんなに、なぜだろう。」といいながら食事する時間も惜しんで調査に没頭していた。

神門神社は養老二年（七一八）創建の社伝をもつ古社である。

この頃南郷村は、木材、木炭、椎茸、栗、山茶などの産物が経済の中心をなしていた。

明治三十六年、近隣町村に先駆けて開通した県道により周辺の村々の物資の集散地となった。それぞれ専門の商人や大小の企業家が入り込み大阪と直接取引も行われた程で、山間部では珍しい市街地を形成したのである。遊郭が二軒もあった。

大正十年頃にはT型フォードの走る姿も写真に残されている。この車はキリスト教の宣教師でク

ラークさん、この頃、天理教や金光教なども布教活動を展開し経済も絶頂期を迎えていた。

この繁栄の中にもう一つの賑わいがあった、旧暦の十二月に催される祭りであることから「師走祭り」と呼ばれるが、お祭りには「市」が立つことから村内はもとより奥地の椎葉や諸塚からの人も多く参加し、お正月前の買い出しで賑わった。ちなみに、この「市」は「江戸時代、延岡藩の高千穂採葉記に遠近の村々より群集し各地の産物を交易する」とあり、古くから市が立っていた記録も残されている。

大正十三年には、村営の発電所が建設される等当時としては画期的な発展ぶりであった。

この輝かしい時代も昭和八年頃、周辺の村々に独自の道路網が開通すると、取引は途絶し衰退の一途を辿る事になる。

その後は全国の山村がたどった同じ道を転がり落ちていった。

昭和五十年代は全国的に地域づくり、むらおこしが盛んな時代だった。特に大分県の「一村一品運動」の躍進ぶりが連日テレビや新聞で報じられていた。

これらの刺激を受け、南郷村でも「何かないか」「何とかせにゃならん」と役職者などを集めて意見交換が行われていた。当時を振り返れば、「新しいもの探し、または変り種探し」だったような気がする。これといったアイデアもうかばないまま時が過ぎてゆき、村には焦りにも煮た空気が漂っていた。

過疎、高齢化の波に村民は自信を失い、村への誇りさえ失ってゆく現実が進んでおり、精神の衰退という過疎の恐ろしいような現実が村をむしばんでいった。

このころ新村長が就任する。

これまでの手法ではダメだ。村民に自信を取り戻させ、誇りを回復させなければ——。

「これからは地域の誇りとなり地域イメージの向上につながる事が村おこしになるのではないか。百濟伝説は、その核とならないだろうか」

時間はかかっても一から出直すしかない。

実は村長は、百濟伝説の証とされる『師走祭り』の神事の一つが行われる家で生まれ、幼少の頃からその行事を見てきた人だ。

企画担当者も、代々神門神社の宮司の家系に生れ、百濟伝説については幼少の頃より関心が高かった。たまたまこの組み合わせが伝説の謎解きに挑戦することになる。

話しは少し遡るが、一年前の秋、前の村長が企画課に「昭和四十六年師走祭りを夕刊デイリー新聞社が密着取材した記事」の保存版を持ち込んで指示した。

「百濟の本家韓国に調査団を派遣する」

調査団は村の文化協会長、議会の総務委員長、企画課担当の三名が指名された。何事にも熱心なメンバーではあるが専門家は一人もいなかった。

昭和六十一年二月初めての調査団が出発した。行く先は百済最後の都のあったとされる、韓国忠清南道「扶余」。現地通訳の案内でソウルから一路扶余へ向かう。全くの手探り、今に思えば空恐ろしいような旅だった。

扶余文化院長の案内で扶余郡庁へ、郡守に面会する。郡守は「百済にまつわる伝説は日本に多くあると聞くが伝説のみでの交流はどうかと思う、決して否定するものではないが今後充分調査されてはどうですか」とのことであった。

「百済の里づくりのはじまり

「火のないところに煙は立たない」という諺があるが、南郷村には『百済伝説』があり、その証とされるお祭りがある。王族の遺品とされる銅鏡がある。これ等を掘り起こす事で何か出てくるのではないか。全くの手探り、専門家もいない、あるのは村おこしの熱意だけ、無謀ともいえる挑戦の始まりだった。

「鏡は本当のお宝だった

訪韓調査のニュースが地元新聞で小さく報じられた。その記事を見た村の出身者から電話が入っ

た。「二年前、奈良の博物館を見学した折、展示品の銅鏡に宮崎神門神社という表示を見た記憶がある」とのこと。これは何かある、そんな予感がした。

早速、奈良国立博物館に連絡を入れると電話は考古室にまわされた。電話の方が「宮崎の神門神社ですね」といった。「神門をご存知ですか」と聞くと「神門神社の銅鏡は有名ですよ」。奈良時代の鏡だけでも日本の十指に入る。しかも正倉院の御物、東大寺の国宝鏡などと同氈鏡をもち、これほどの銅鏡が一箇所に伝世されている事は極めて珍しいと話された。調査報告書もありますのでコピーを送りましょうと約束された。報告書は、昭和三十五年・大和文化研究「神門鏡と同文様鏡について・岡崎讓治」「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料及び同氈鏡の分布とその鑄造技術・中野政樹」。

先の村の出身者が見た鏡は、東大寺大仏台座下、西南隅から明治四十年出土の鏡（国宝）。全国で五面しかない鏡なので、出土、伝世地等が表示されていたとのことだった。

伝説にまつわるとされる、銅鏡の価値判断のできる資料が見つかった事は今後の方向付けを決定するような重要なポイントであった。

村ではこれまで神社の宝物として大切にしてきたが、それは研究や学術の域を意識しない守り方だったと思う。

一相次ぐ学者、研究者の来村と地元の取り組み

昭和六十二年、神門神社に古代史家 直木孝次郎氏より手紙がくる。「神門の鏡を是非見せてほしい」とのこと。

同じ頃、同志社大学の森浩一氏は「新日本史への旅（朝日新聞社）」の取材で銅鏡の調査を行っている。そして出版された冊子の表紙を神門鏡が飾っている事にビックリしたものである。

昭和六十二年二月、奈良国立博物館の考古室長より電話が入る。先の神門鏡の情報をくれた井口喜晴氏である。「先輩が調査した神門神社鏡の確認と調査に伺いたい、地元の気運の高まった今、この機会をとらえ調査したい、普及室長と二名で行きます」

奈良国立博物館から頂いた資料を要約すると、鏡は一般に出土・伝世に大別されるが神門鏡は伝世鏡である。伝世地は奈良正倉院・三重神鳥八代神社・神門神社が三大伝世地である。国内で現存する唐式鏡の五、六%が神門という事実。ともあれ正倉院の御物、東大寺の国宝鏡、長屋王邸址出土鏡、飛鳥坂田寺址出土鏡など当時の権力との関わりを感じさせる同型や同型鏡の存在、更に馬鐸、馬鈴、鉄剣など遺物の集合体は何を意味するのか。

もう一つの資料では、奈良時代の出土・伝世場所は八十二箇所を数えるが最も多く同型鏡を持つ神門神社と関連のある同型鏡を持つ場所をあげると千葉香取神宮、奈良正倉院、奈良興福寺、八代神社、岡山大飛鳥、宮崎神門神社などが十箇所になるが三重八代神社、神門神社とは同型鏡の分布

を考える時特殊な相互関係を持つていとされる。

その年の四月、奈良国立文化財研究所の文部技官杉山洋氏から神門鏡の調査研究に神門神社に行きたい旨の公文書がくる（調査報告書あり）。

昭和六十三年、文化庁文化財保護部長内田弘保氏の神門神社訪問。

六十三年、百濟伝説をあらゆる角度から検証し、よりリアルなものにしたいと、素人でも出来る事から始めた。伝説では「畿内地方に逃れた王族は、その後の動乱から筑紫を目指したものの瀬戸内でしげに襲われ日向の国の金ヶ浜、高鍋の蚊口浦に別れ別れに漂着した」伝説の核心の一つをなす部分。『漂着』ははたして現実になようなことが起こり得るか、潮流からの検証を試みる。海上保安庁日向細島保安署を訪ねた。事の理由を説明すると、次長さん「時化のとき、中国山地、四国山地に降った大雨は多くの河川から瀬戸内へドツと注ぎ込まれる、狭い海峡はわずかに水位が上がるという。伊予灘、周防灘付近で時化に遭うとその潮は豊後水道を南下日向灘へ流れる。この流れの漂流物は金ヶ浜、蚊口浦へ流れ着く事が多いことは良く知られている。日向郷土史資料、高鍋藩史を調べるとこの地の漂着物の歴史がよく解かります」と付け加えられた。この二箇所が漂着の舞台というのが最も自然だと海図を前に話をされた。

平成元年、京都大学名誉教授上田正昭氏が関西の考古学愛好者一行と来村、一行は銅鏡調査を熱心に行う。これほどまとまった鏡、しかも伝世品に驚きの声。地元として、ここは「日本書紀にも記録されてない。何か淋しさがある」とつぶやくと、「日本書紀、あれは当時の権力者達の都合の良い記録である。記録にない事をたどるのが考古学とも言える」と話された。上田教授の来村は南郷村の百済伝説にさらに広い視野から光を与えられる契機となった。

平成二年一月、文化庁から師走祭りに調査が入った。天野武主任文化財調査官、祭り二日目途中からの調査だった。この祭りに触れた途端、「途中からの調査で申し訳ない、今回は最後まで見せていただきますが、来年もう一度初日から調査をさせていただきます」。何か徒ならぬものを見たという感じを受けた。

翌年の師走祭りに調査官が来村する。今回は韓国民俗学会会長、任東権先生を同行、昨年の調査時に感じたものが任先生を調査に招いたのだろう。

この祭りは比木神社の一行がフクロガミという神輿以前の形態と考えられるものを御神体として奉じて延々九十キロ隔たる神門神社まで決まりの道順にしたがって巡行、そこに滞在して慣例にのつとつた行事を執り行つて帰る。師走の時期に執行される事から一年の締めくくりという要素が濃厚に顕現していると、天野調査官は受け止められる。

「そこで問題としたいのは、江戸時代において比木神社が高鍋藩、神門神社が延岡藩の領内に鎮座する事から師走祭りが藩域を越えてなされた点である。その事は江戸時代における例外的慣行とは受け止めがたく、むしろ藩が分割される以前からの名残ではないか、そうした理解の仕方が許されるならば、祭りの起源は中世以前にまで遡る可能性がある」。また他面では往古、異国神（百済王族）がこの地に定着したとする由来伝説が付着している事が注目されるとしている。

任東権先生は、南郷村はいまこそ交通の便も良くなったが明治までは絶壁の下を溪流に沿って細道を辿って行った山村だったのであろう。このような奥地の社に多くの宝物がしまっていたのはおそらく豪族が住んでいたか有力者が隠れ住んでいたものと推測される。

主人公の史実よりもそのような伝説が現地に伝承され信仰されて千年余経った今なお人々の心の中に伝えられている事が重要である。民俗現象は強要され命令されて形成されるものではない。師走祭りは村民自ら創造し反復して祭儀した郷土文化である。これらから古代史の一部が基層文化として隠されている事を知る事ができる（調査報告書あり）。

師走祭りは平成三年文化庁の「記録作成を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。

平成三年、韓国政府派遣の学術調査団（考古、民俗）が来村する。一行は任東権先生を団長に韓国中央博物館、韓国民俗博物館、扶余国立博物館や大学関係者の八名で構成され、奈文研の杉山技

官も加わった。神門神社の文化財、師走祭り、県内の博物館、福岡、熊本と広範囲な調査を行った。平成四年、五年にも任東権先生は三回にわたり現地調査を行った（書籍あり）。

平成六年三月、西の正倉院の建築指導を担当する奈文研の建造物研究室、細見啓三氏が来村、同氏の南郷訪問は五回目だった。初めて神門神社本殿を見学した折、既に着目されていたようである。「神門神社本殿は構造形式でいうと、七間社流れ造り、という全国的にも珍しいもので学術的にも価値があると見ています」と控え目に述べられた。「実はこの建物の内部を調査したいのです。神門関係者に取り次いでほしい」との申し出を受ける。

神門関係の了承を得て細見氏と本殿内部に入る。内部は日頃誰も中に入れない。何ともいえない神秘的な空間があったことを記憶している。明かりを当てると板壁、柱すべてヤリカンナ仕上げのようだ。その時の報告書を要約すると、「最も注目を引くは屋根材で厚板葺目板打ち段葺き、この手法は、奈良時代すでに行われていた事が平城京の発掘により知られる」という（調査報告書あり）。このとき内部の屋根裏にはおびただしい数の銚と三十六歌仙があった（三十六歌仙の調査報告書あり）。この調査を基にした神門神社本殿は平成十二年十二月国指定重要文化財となる。

平成六年、シンポジウム『百済王族伝説の謎を解く』開催（書籍あり）。

平成七年、宮内庁正倉院事務所 吉松技官神門神社宝物調査「綾織りの墨書」に注目し調査を試みる価値があると助言された（後日、奈文研で赤外線カメラ撮影、調査依頼）。

平成七年、西の正倉院敷地の発掘調査が行われた。「杯」と呼ばれる完全な須恵器三点、土師器千五百点が出土。状況から何らかの祭事が行われていた事、周囲に当時集落のあった可能性を示唆していた。注目されたのは朝鮮半島から技術が伝わったとされる須恵器の出土である（宮崎県埋蔵文化財センター）。

平成八年、調査活動から発見された資料、「祭神御事歴付記」によれば「伯智王は御名を禎嘉帝と申し奉る」とある。伯智王と禎嘉王は同一人物との記録が見つかった。

平成八年、神門神社宝物「綾織り」の赤外線フィルム現像のコピーを比較文字学の専門家に判読を依頼した。「綾布墨書」と名付けられ、『国の布令』の文書で王城の長官への布告文が記されているという。真跡の百済文字だと推断された。この判読だとはじめて直接伝説に繋がる物証という事になる（報告書・前宮崎大学教授、福宿孝夫）。

このようにして村の人たちの予想をはるかにこえる形で神門神社の宝物や文化財の文化的、学術

的価値が判明し始めたのである。学者の調査という基盤を得て改めて村人にも認識され始める

これまでの一連の学者、研究者の来村は全くの偶然で、今考えるとこれも神様の引き合わせだったのではと思いたくなる。

一日韓交流の動き

第二回の訪韓調査（昭和六十二年三月）メンバーは三名、議会から議長が加わった。

一回の調査は全く余裕もなく緊張の連続だったが二回目は穏やかな雰囲気の中で懇談となった。新しい郡守は「師走祭り」に興味があり感謝の心を表明された。相互の交流も必要であり要請があればこちらからも出向きたい。扶余は文化院長、副郡守の二名を考えているとの事だった。

同年七月扶余からの使節団を迎える。始めての使節団を迎え歓迎一色、「百済シンポジウム」が開催された。会場は立ち見が出るほどであった。

昭和六十二年、今後の韓国との交流、歴史調査等に対する理解と協力を求めて、東京の韓国大使館、福岡の総領事館を訪ねる。

昭和六十三年、日韓友好のシンボル、百済の里のイメージづくりから「百済の館」建設を計画する。モデルとなったのは扶余の国立博物館敷地に立つ「客舎」と呼ばれる建物。博物館の了承を受

け、極彩色の丹青を施工する技術者も扶余から招聘する。瓦・陶板は韓国から。平成二年十一月の落成式典には韓国から国際文化使節団が来村、完成した施設は、百済文化、日本国内に残る百済の足跡を紹介する施設として活用されている。

平成二年、韓国との交流や文化の理解に欠かせないとして国際交流員を配置する。

現在十一代目の交流員が活躍中。初代交流員は帰国後ソウルの日本大使館に勤務し、今も美郷町に様々な形で協力している。

平成三年、百済古都「扶余」と姉妹都市提携調印。

平成五年、それは降って湧いたような話が発端だった。『百済の里づくり』の盛り上がりの中で村人は「神様を一度故国に帰したい」と語り始めた。そんな折、韓国駐日特命全権大使・呉在熙氏が南郷村を訪問、大田世界博覧会出展の打診があった。世界博参加など身に余るとして辞退したものの、再三にわたる熱心な誘いに参加を受諾。最初は百済王族の遺品の展示だったが「百済王族千三百年故国訪問」の企画を提示、呉大使も大賛成。村は神様の御神体を先頭に、多くの村民が参加しその意義・感動を分かち合う事が出来ればと考えた。大使との打ち合わせはソウル、韓国内のみ受け入れ態勢については大使が整える。交流団は神門神社、比木神社関係者、一般村民、宮崎県副

知事にマスコミ関係者が加わり総数二百人となった。宮崎空港から大韓航空チャーター便で金浦空港へ、事前打ち合わせ通り御神体はフリーパス(出入国も同じ扱い)。平成五年十月二十五日であった。一行は扶余へ、翌日は百濟王陵での帰郷報告式典(日韓五百人が参加)戦後初となる神楽公演等の行事を終え、二十七日万博会場へ、展示館オープンなどを大成に納めた。

連日韓国の新聞はこの記事で埋め尽くされテレビもどのチャンネルもこのニュースだった。

その他の日韓交流の主なものを紹介すると、平成二年韓国青少年連盟の研修団百八十名来村。南郷の中学生(第一回)韓国訪問。日韓の青少年交流は現在も続いている。韓国初の旅行団(二百名)韓国文化使節団の来村。韓国教師団八百十六名の来村、韓国の元総理金鐘泌氏、三名の韓国駐日大使が南郷村を訪問している。交流は南郷村をパスポート保有率が全国で二番目に押し上げた。

日本の外務省も動いた。非公式ながら外務省高官の来村。ソウルの日本大使館も師走祭りに来村した。

一野焼きから迎え火

昭和三十年代迄あった師走祭りの野焼きは、禎嘉王が「追っ手から逃れる為野に火を放す」との故事にのっとり行うものだった。土地の事情等から中止されていたものを「神の迎え火」として神社下の水田地帯で復活させる。迎え火は氏子から毎年三十基以上が奉納され神々しく壮大な炎、古

の道を辿る神の行列を奉納者が迎える。その参加者は千人を超え今年で三十二回を迎える。

「マスメディアの注目」

マスメディアが南郷村の動きに関心を示し始めるのは神門神社の古代の鏡の価値が判明し、著名な学者の来村が相次いだ事からである。

最初は宮崎日日新聞が「唐花六花鏡」を一面トップで掲載した。マスコミは地域づくりの視点からも百済の里づくりに着目する、朝日新聞、毎日新聞、西日本新聞それぞれに特集を組む。宮崎放送、テレビ宮崎も積極的に取り組んだ、テレビ宮崎の特番「神門物語」は、村内取材はもとより銅鏡との関わりを追って奈良、飛鳥、鳥羽の神島にまで取材を伸ばし神門を訪れた著名な学者も取材に応じた。

その後NHKは全国放送（「歴史発見」「ひるどき日本列島」「おはよう日本」）で多くのメジャーな番組を制作放送した。新聞各紙、国内の主なテレビ局、韓国の新聞テレビも取材に入る。平成五年十月二十八日付け朝日新聞の『天声人語』にも載り、航空会社の機内誌、旅行雑誌などの取材が続きこれ等の情報発信は住民に大きな自信をつけた。

「正倉院への道」

「火のないところに煙はたたない」この伝説を掘りおこせば何かが見えてくるのではないかと始

まった活動は、考古、民俗の両面から思わぬ成果を見出した。神門鏡を中心とする貴重な文化財を保存展示するにはどうしたらよいか、ここから途方もない計画が生れる。

その計画とは、正倉院の御物と同氈鏡の存在をきっかけとして奈良正倉院の原寸大の収蔵庫を造り貴重な文化財を持つ村としてアピールする事、『小さな村の大きな挑戦』である。

構想が打ち出されたのは昭和六十二年のことだった、この計画も素人の発想だからこそスタートが出来た事だと今にして思う。

計画の目玉はあくまでも本物作りを目指す、つまり奈良正倉院の原寸大複製、天平建築の完全再現を目指したのである。その為には学術的な支援が不可欠であり、銅鏡調査を通じて知り合った奈良国立文化財研究所に計画を説明して支援を求めた。

完全復原には宮内庁が門外不出としてきた正倉院図（大正二年の正倉院解体修理時に作図）が欠かせないとのこと、宮内庁に協力をお願いすることになる。この問題は宮内庁正倉院事務所、京都事務所、宮内庁書陵部と幾度となく通い、門前払いのような状況であったが紆余曲折を経て学術支援の奈文研が宮内庁に閲覧申請をして図面を写真撮影する形で決着した。

次には造営材の確保、建築基準法の問題など基本的な課題がまだ山積していた。

設計事務所は奈文研の紹介で特に構造、古建築に強い〈財〉建築研究協会一級建築士事務所（京都大学工学部建築学教室に設置された歴史を持つ）に委託、設計は大森健二博士・西田義雄部長が

担当することになる、これで奈文研の学術支援が正式に決定した。指導担当は奈文研の細見啓三主任研究員。

一 造営材はあるか

宮内庁の了承を得て正倉院の部材を外部から直接測定、材料調達の参考とした。

南郷村は林業の村『タル木』位なら何とかなるだろう、その程度の知識でスタートした。材料探しは最初から躓いた。村内はもとより宮崎県内にもない。県内の大手材木屋を尋ね材積表を見せると『そんな木があるか』一喝され、笑われた。

探す材料は『檜』である。全国有数の檜の産地に足を運び調査、材積表を配布したが直接的な成果は何も得られなかった。

平成元年春だった。重要な情報が飛び込んできた。木曾の材木店から「全国のあちこちから見積もり依頼がきています。調べてみると南郷村の計画らしいが間接的な取引は高くつきます直接取引で行きませんか」朗報であった。全国の「檜」の産地調査の折、配布した材積表の成果が現れたのだ。この会社の状況把握、調達する材の仕様、価格等の交渉が続き関係者が木曾入りするまでに約四年の歳月が経っていた。

一 建築基準法の壁

一方では建築基準法に関する協議も問題を抱えたままである。この問題を要約すれば「高床式、校倉造り、無窓の建物にお客を入れる等々、建築基準法のない時代の建物を現行法で裁く」わけである。建築研究協会が先頭になりこの問題にもう三年取り組んでいる。様々な妥協案が示されたが、村は「本物づくりを目指す」の信念で妥協しない姿勢。この打開策に宮崎県はつくば市にある建築研究所第三構造部を紹介した。県、南郷村、設計者が出席し協議した。結果『日本建築センター』の評定に委ねるとの方針が決まった。これは関係者の時間をかけた取り組みの賜物でもある。

平成四年、評定がなされ建築基準法第三十八条の建設大臣の特別許可が出された。ここまでに五年の歳月を要した。

一 準備は整った

木材に調達の目途も立った。設計図も出来た。木曾では製材が始まった。木の乾燥を終えて第一陣を南郷に輸送するときに来た。

木曾で偶然見た「伊勢神宮の御木曳」のビデオからヒントを得る、「伊勢神宮に倣って」の企画書をつくる。倣うとは、宗教行事ではなく、自治体がやれる行事とする事だった。

一 当時の御木曳き企画書の趣意書

「この、大プロジェクトは、これまで数々の壁を乗り越えて今日を迎えたわけであるが、いかに苦
労したといえども、ここまでは行政の手がけた事である。しかしこれからは違う。『西の正倉院』
の造営は今回のイベントを通じて村民多数が参加する事で始めて、村民のものになる。子供たちは
将来村を離れる事があってもこの日の思い出が必ず心に残るだろう」

平成五年一月九日が木曾の御木曳き。南郷では一月十一日（師走祭りの最終日）が御木曳き。事
務局では木曾、南郷の御木曳も含めマスコミに売り込んだ。木曾では前回の伊勢の遷宮に使用され
た台車（長野県上松市に保存のもの）を借り出した。

南郷では昔の荷車四台。小中学生も参加する。区長会、公民館でも参加を決議した。村民多数が
参加し感動を共にするならば一気に村民の結集を図ることが出来る。

木曾の御木曳ニュースが全国に流れた。この様子は我が村でも多くの人々の目に触れ、これが一
月十一日のイベントに拍車をかけることになる。

二日前、木曾谷から送り出された檜の第一陣「百本」、神戸からフェリーで（大型トラック三台分）
日向市細島港へ、そして南郷へ。建設現場の三キロ手前から御木曳は始まる。

沿道には観光客もつめかけている。檜の引渡しを受け、開始宣言、参加者は千五百人以上、村民
の半数以上が参加したことになる。上空には朝日、毎日、読売の取材ヘリが飛び交う。イベントは
大成功、翌日大手新聞各紙も一面トップで紹介、テレビも全国ニュースで報じられた。

その後、工事着工、宮大工の仕事始式、立柱祭、上棟祭、とすべて伊勢神宮に倣って古式ゆかし

く行われその都度マスコミを大いに賑わせた。準備に五年、建築に五年延べ十年の歳月をかけた大プロジェクトは遂に完成した。

平成八年五月八日東大寺大仏殿の落慶法要に倣って天平絵巻を繰り広げた落成式典が盛大行われた。そこには、奈文研(前)所長の鈴木嘉吉氏、宮崎県知事、韓国大使等の姿があった。

「むずびにかえて

神門に伝わる「百済伝説」の謎解きは「火のないところに、煙はたたない」、何かあるはずとの単純素朴な考えから始まった。計らずも学者や研究者の調査や情報という基盤を得て改めてその価値が認識され、結果として伝説というレベルを突き越えて学術的なアプローチをとった事になる。

伝説、鏡、祭りを一つの筋書きとして謎解きに挑戦してきたが、資料や論考に目を向けると、これまでの考え方だけでなく複数の答えや、幾つかの組み合わせがあるのではと考えるべきではないか。また謎が益々深まった。とにかくこの地神門は、古の時代我々の想像を超えた何か大きな役割があったのではないか。発見された史資料や考古学的遺物の集合体から更に想像が広がる。

また百済というキーワードのもと韓国にもその輪を広げる事ができ日韓双方の研究者による学術的なアプローチもとれた。

神門鏡や師走祭り等の学術的価値を、原寸大複製に拘り十年の歳月をかけた西の正倉院を展示収蔵の場として一般に公開、住民の自信と誇りを回復させるとともに併せて古建築に親しく触れる場

を提供する事とした。

今回一連の動きの中で重要文化財指定、記録作成を講ずべき無形の民俗文化財指定など開闢以来の収穫もあった。

専門家は、昭和三十年代伊勢湾の神島（八代鏡群）と（神門鏡群）鏡群同志の同汎関係の考察以後の唐式鏡研究はすべてこの集成研究をベースに出発している程で神門鏡の位置づけの重要性を強調している。

またNHKの番組「歴史発見」では壬申の乱から八十年後、東大寺の大仏が建立された時期、朝廷内では再び百済系の人々が勢力を盛り返していた。天平時代になると百済王敬福を中心全面的に百済系が復活している。神門の一族は壬申の乱で大友皇子側につき重要な働きをした武官だったので徹底的な追撃を受ける、身を隠さざるを得ない立場の人だったのではない。乱から八十年百済の復活が禎嘉王を思い出させ彼を探す、つまり一族の行方を探し当て、その地に祠をたて慰霊した。そこに鏡を贈ることにより鎮魂したのではないか。同じ一族を鎮魂する為と考える説も出された。

謎解きは三十年が経った、地域おこしも道半ばと思う。「百済の里づくりは、地域イメージの向上につながる事こそが村おこしになる」というその原点に帰れば、伝説、鏡、祭りは美郷町の誇る貴重な歴史資源であり磨けば更に大きく光る玉だと考える。この間、膨大な情報が集まった。まだまだ永い道のりと思うが、許されるならば生命ある限りこの難題に向かってみたい。

本稿は、百済の里づくりの体験から得た情報を紙面の許す限りまとめて見た、今後とも多くの方々の参加を期待しその参考になれば幸いである。

神門は霧の里である。秋の深まりとともに濃い霧に包まれている、伝説の謎もまた霧の中にある。

佳作

「うそつき」

平伊志七



「花火大会の話なんだけど」

桜が散ったばかりなのにずいぶん先の話をするんだな、とおかしく思いながら森山の次の言葉を待った。もしかしたら、とほんの少し、鼓動が早まった。

今年は二人で行かない？

そんな言葉が続くのではないのかと。私たちは昨年も、一昨年も一緒に花火大会に行っていた。高校一年生の一学期、同じ班だった六人で。名簿順で並べられた席を何の意図もなく区切って作られた班だったけれど、五月の校外学習が私たち六人を妙に仲良くさせた。二期期の班変えの後も、高校二年になってクラス替えでバラバラになった後も私たちは誰一人欠けることなく仲のいい、友人関係を続けていた。高一の時に揃って花火大会に出かけ、来年も来ようと口約束をし、それを果たした昨年、私たちはまた「来年も」と約束した。

今年私たちは高校三年生で、大学受験を控えていようと、部活動引退の夏だろうと、塾やバイトが忙しかろうと、その日だけいつもの六人で花火大会に行くものだと私は思っていたし、他のみんなもそうするだろうと思っていた。けれどもし、もしも森山が二人で行こうと誘ってきたら、「え、だめだよ」と言いながらも私の顔は緩むに違いなかった。いつもの花火大会はいつものみんなで行って、違う花火大会に二人で行くことにしようよと提案するところまで、私は妄想していた。森山がなかなかセリフを再開しなかったからだ。

六人の中で私と三年間同じクラスなのは森山だけだった。ついでに言うとも部活も同じで、私たち

は部活帰りに時々二人だけで学校近くのこの松尾神社で話すことがあった。ちょっとした愚痴や、くだらない悩み、深いんだか軽いんだか分からないことを山ほど話した。

一方で私は一番大きな秘密を森山に話したことはなかった。もつとも森山にだけ秘密というわけでもなく、例の六人組の誰一人としてそのことについては話したことはない。

そのことを知っているのは私のおばあちゃんくらいのもんだ。おばあちゃんは私のありとあらゆる秘密を知っている。親には話せないことも、おばあちゃんにだけは、「まあいいか」と口が滑ってしまう。滑った言葉の数々を、おばあちゃんはそのまま抱えておいてくれるから誰にばれることもない。そういう信頼が、おばあちゃんに対しては特別口を軽くさせた。

森山が好き。

紙に書いたらたった五文字。口にしてもたった七音。

短くて、単純で、裏も表もない秘密。だけど、私にはひどく大きな秘密だ。

森山も、そうであればいいのに、と期待して、私は彼との時を過ごす。もしかしたら、同じ気持ちなんじゃないかと勘繰ってみたり、やっぱりただの友達ちに過ぎないよねと落ち込んでみたり、森山は私の心を騒がしくさせる。

たとえ、言葉なく隣に座っているだけでも。話さなくてもいい関係っていいよな、と笑う森山がほんの少しだけ憎らしい。私だって同じことを思ったりもするのに。それ以上でありたいだとか、その言葉を深読みしていいのだとか、あれやこれや考えるのが苦しい。

「今年の花火大会は」

森山が、言い直す。また、途切れた。聞きたいのは、その先。お願い、私の期待通りでありますように。願いながら私はこぶしを握りしめた。

「行けないんだ、俺」

「……え？」

「引越すことになったんだ。急だけど今月末に出てくから、花火大会までいられなくて」

「行くって言ったくせに。嘘つき」

言う必要のない言葉が発射した。

「つくつよりはなかったんだよ」

いなくなると、言っている。

森山が私のクラスメイトでなくなると言っている。同じ陸上部員じゃなくなると言っている。約束していた花火大会に行かないと言っている。

「嘘つき」

また、私は森山をなじった。そう言ったところで彼が引越すのをやめて、花火大会も約束通り一緒に行ってくれるわけでもないのに。彼の言ったことが嘘になってしまってもないのに。

そう言えば、私が森山に初めて向けた言葉は「嘘」だった。

森山の名前は早貴という。ハヤタカではなく、サキ。

入学式の日、私は自分の後ろの席に「モリヤマサキ」ちゃんという女の子が座るものだと思っていた。ところが、やって来たのはどこからどう見ても、男子だった。

「嘘。男子だ」

思わず漏れ出た心の声を、森山は慣れた様子で、「サキちゃんって呼んでもいいよ」と笑顔で流したのだった。

嘘、で始まり、嘘つき、で終わるなんて、何て皮肉な話なんだろう。

「どこに越すとか聞いてくれないの？案外近い場所かもしれないのに」

森山の言葉にハッとなった。確かにそうだ。引越すと言っても色々だ。隣町に越すだとか、県内ってこともある。

「近いの？」

そうでありますようにと祈りながら問いかけた私に、森山はなじみない地名を言い吐いた。

「宮崎県的美郷町ってとこ」

「どんなとこ？」

「まだ行ったことないから俺も分かんないや」

「……九州ってさ」

「うん？」

「遠いと思うんだけど。……森山の嘘つき」

もしかして近い？　なんて期待させておいて、ひどい答えた。

ここは奈良県だ。

そもそも私は九州には馴染みがない。地図の位置くらい思い浮かべられるけれど、宮崎への行き方なんてこれまで一度も考えたこともない。

「近いかもって言っただけだよ、俺」

私にさんざん嘘つき呼ばわりされているのに、森山はちっとも気にした様子はなく、穏やかな声で言っ、挙句穏やかな笑顔で私を見ているから、浮かべる表情に困った。

「花火大会、今年も一緒に行くもんだと思ってた」

「俺もだよ」

そこで会話が途切れた。とうとつに、引越す森山が腹立たしかった。もちろん一高校生である彼の意志でないことくらい容易に想像できたけれど、それでも腹立たしかった。

本当は悲しかっただけかもしれない。胸のうちを席卷するこの感情の正しい名前を私は知らない。

私は黙りこくった。どういうわけか、どういうつもりか森山も黙っていた。

私たちはこれまで何度も一緒に過ごした松尾神社の階段のつぺんに腰かけて、二人して無言で遠くを見た。

ただ、目の前には私たちの当たり前と日常が広がっていた。この先、誰かさんにとっては当たり前でも日常でもなくなるであろう景色だったけれど。

「まあ、今は昔と違ってこういう便利なものもあるし、いくらだつて連絡も取れるよ。ちょっと遠くなるけど、ずっと友達だからな」

スマホを取り出した森山は許可なく私を写真に収めたようだった。カシヤ、と音がした。

「ろくでもない顔してたと思うんだけど今の私」

「だから撮った」

ふざけた調子で言い、森山はへらつと笑った。

「俺が引つ越したらさみしくなるなあ」

「自分で言う？ それ」

「泣くなよ、三原」

「泣くわけないでしょ」

今度は私が嘘をついた。「そっか、残念」と森山は笑った。

その日が待ち遠しいときは、時の流れはたいていゆっくりだ。反対に、来なくていい日は、あつという間に訪れる。

森山は奈良を去り、宮崎へと旅立った。

引つ越すと聞いたあの日、私は初めて聞いた「宮崎県美郷町」への行き方をネットで検索した。

町のホームページの『交通アクセス』を見て、愕然となった。公共の交通機関を使ってうちからそ

こに向かうとすると、飛行機で宮崎空港に向かい、そこから特急で一時間で日向市駅に行き、さらにバスで五十分。六、七時間はかかることになる。

バス代まで調べていないけれど、飛行機と電車で片道約三万円。月のお小遣い五千円の私につきつけるには、あまりにむごい現実だ。

国内だし、同じ国内でもっともつと遠い場所であることを思い知った。はや意味をなさないほど遠い場所であることを思い知った。

行けないよ、そんな遠いところ。ただの友だちの身の上で。が、私の結論だった。

その上、森山はよいいな一言を残していった。

「さみしかったらいつでも連絡して来いよ。悩みも愚痴も聞いてやるからな」と。

さみしかったら。この言葉は曲者だ。だってずっとさみしいし。だからってそうそう頻繁に本当に連絡していいのか悩む。「さみしかったのか」と言われて、「そうだよ」と素直に返す自分は想像できない。あるいは言葉そのものは素直でも、大げさに演じて、茶化して、自分たちの関係は友人以上でも以下でもないと感じる姿ならば想像できたけれど。

森山に連絡するには、理由が必要だ。言い訳になる理由を探すのだけれど、そう簡単には転がっていない。

そっちはどう？ と、様子を聞くつもりだったのに、去った三日後に森山の方から『俺がいなくなっ

てどうよ?』と聞いてきた。『特に変わらないよ。そっちは?』と尋ねると、『三原はいないな』と帰ってきた。どう返信していいか分からず、『こっちにも森山はいないけど』と返すと既読がついたつきり、返信はなかった。

そのやりとりをしてから、五日ほど経つ。私はまだ動けずじまいだ。スマホを眺めて、アプリを開いて、やっぱりやめて、放り出す。その繰り返し。

「トントン」

実際にドアを叩く音と同時に擬音語を口にして、おばあちゃんが姿を現した。

「結ちゃんが近頃遊びに来てくれないからおばあちゃんの方から来ちゃった」

私はベッドに投げ出していた体をゆっくりと起こした。ベッドから降り、すでに座っていたおばあちゃんの真向かいにテーブルを挟んで腰を下ろす。

「久しぶりねえ。結ちゃん忙しかったの?」

そう言えば、かれこれ一月ぶりだ。おばあちゃんは自転車で二十分くらいのところに住んでいる。おばあちゃんは自転車には乗らないし、車も持っていない。どうやって来たんだろうという疑問は、次の言葉であっさり解決した。

「美容室に行ったついでタクシーで寄ったの。どう?」

見てみれば確かにいつもの二割増し髪型がばっちり決まっている。美容室帰りと言われれば納得だ。「いい感じだよ」

本心からそう思ったにもかかわらず、私の返事はおざなりだった。それだけでおばあちゃんには色々伝わってしまったようだ。

「何か悩み事があるでしょう」

これまでさんざん、何でも話してきた仲だ。さらに言うと、友だちにも隠していた森山への気持ち、知っている唯一の人物でもあるわけで。

「一人で悶々とあれやこれや考えるよりは、曝け出した方が幾分楽になれるものよ。話してごらんなさいな。おばあちゃんが口が堅いのは結ちゃんが一番知っているでしょ」

私を丸め込むことにかけては右に出る者のいないおばあちゃんの誘惑のような言葉に絆されて、結局私は洗いざらい、おばあちゃんに話すことになったのだった。

「あらあら、そうだったの。森山君が引越すだなんて。それは結ちゃん、さみしくなるわねえ」
おばあちゃんと森山は面識がない。ないけれども、ずいぶん前からおばあちゃんは私の話に出てくるだけの「森山君」とすっかり顔見知り気分だ。

「きつともう会えない」

私の言葉におばあちゃんは肩をすくめた。

「何言ってるの、おじいちゃんじゃないんだから」

おじいちゃんがそういうことを言ったというわけではない。私のおじいちゃん、言い換えるとおばあちゃんのだんなさんは、四年前にもう会えない人になった。どうしたってもう二度と会えない

人だ。それを比較対象に出されると、言葉をつまらせるより他ない。

森山は、二度と会えない、かもしれない、くらいのもんだ。

「結ちゃん次第でしょう、そんなの。今は昔と違って色々便利な世の中なんだから」

「でも調べたけど、めちゃくちゃ遠いんだもん」

「森山君が引越してから連絡は取ってるの？」

「向こうから一回来ただけ。私からは連絡してない」

「どうして。結ちゃんからもしなさいよ」

「連絡する話題がないの」

別におばあちゃんのせいではないのに、思わず八つ当たりするようにぶっきらぼうに言ってしまった。

「話題なんて何だっつていいと思うけどねえ」

簡単に言ってくれる。私には、そんな簡単なことじゃないのに。

「それで、森山君はどこに引越したの？」

「宮崎県的美郷町ってとこ」

「あら」

大げさな芝居じみた様子で、おばあちゃんは「驚いた」を表現した。知ってるの？ と問い返す前に、おばあちゃんの方から私に質問が投げかけられた。

脈絡なく、突拍子もないように思える質問が。

「ねえ、結ちゃん、おばあちゃんの実家がどこ知ってる？」

「え？知らないけど」

「あら。そう。ふふふふ」

いたずらっ子のような顔をしておばあちゃんは、くすくすと笑いだした。

「結ちゃん知らないようだから、言うけど、おばあちゃん美郷町の出身よ」

「え。ええ？」

嘘でしょ？ そんな偶然あるの？

私が信じられなくて、何度も目をしばたかせている間も、おばあちゃんはひどく楽しそうに笑っていた。

「どなたとこなの？」

「そういうのを森山君に聞けばいいのよ」

おばあちゃんは笑いながらスマホを指さした。

「おばあちゃんの出身がそこだったって伝えて、美郷町の写真を色々送ってくれないか頼んでちょうだいよ」

こんな偶然本当にあるんだろうか。信じられない思いでおばあちゃんを見て、スマホを見て、おばあちゃんをもう一度見た。

「ほら、早く連絡して」

「え、今？」

「そう、今」

急かされるままにスマホを手に取り、『どうしてる？実はおばあちゃんが美郷町の出身だってことが分かって、ちょっとお願いがあるんだけど』と打って森山に送ると、思ったより早くすぐに返信が来た。

『マジ？何？』

たった数文字のそんな言葉にすら、胸が躍る。おばあちゃんがそばにいるので、できるだけ、顔には出ないように努めてはみるけれど。

「森山君、返事くれたの？」

おばあちゃんがスマホをのぞきこんでくる中、私は次のメッセージを手早く打って送り返した。

おばあちゃんの案を、そのまま頂いて。

『おばあちゃん、美郷町の色んな場所の写真を送ってほしいんだって。頼んでもいい？』

『いいよ。でも俺まだあんまり詳しくないから、有名なところとかよく分からんし、クラスのやつに聞いてみるな』

『ありがとう。クラスの人とは仲良くなった？』

『三原ほど仲いいやつはまだいないよ。笑』

文末の、「笑」の妙な存在感に、惑わされつつ、私も『笑』と一文字だけ打ってスマホを手放した。

にやにやと、何か言いたげな表情のおばあちゃんと目が合った。

「森山、美郷町の写真送ってくれるって」

「良かったねえ、結ちゃん」

「送ってほしいのはおばあちゃんでしょ」

「だけかしらねえ？」

きつとおばあちゃんにはお見通しなのだろうけれども、私は肯定も否定もせずにおいた。

一緒にお昼を食べた後、森山君によるしくねと言っておばあちゃんは帰っていった。一人になって、自分の部屋に戻った私はまた、ベッドに寝転んだ。『三原ほど仲いいやつはいないよ。笑』と、書かれた文字をもう一度眺めながら、いつの間にか眠ってしまった。眠りから覚めても、森山はこの町にいないままだった。だけど早速『俺の家イン美郷町』と題された写真が森山から届いていた。

その日から、二日に一度は森山から写真が送られてくるようになった。

森山の通う学校。通学路、家の周り。平日に送られてくる写真は森山の日常の一部みたいな物や場所が被写体だった。土曜か日曜に送られてくる写真はどうかやら美郷町の名所で撮られたものらしかった。

休日に送られてくる写真には、「おばあちゃん用」とわざわざ書かれていた。じゃあ平日は、私用なんだろうかと勘繰ってみたりもするけれど、それほど深い意味はないに違いないと自分に言い

聞かせる。一人で勝手に浮ついたり落ち込んだり、心の中が騒がしい。

そういうぐちゃぐちゃな思いは自分の胸にしまつて、森山が送ってくれた写真を見せるため、私は毎週おばあちゃん家に自転車走らせる。

おばあちゃん用と題された写真の第一弾は、百済の館という場所。緑と赤の色遣いの美しい建物の写真だった。歴史の授業でも耳にしたことのある百済と縁のある場所らしく、古代朝鮮半島にあった国の建物を模したらしい。

次の週は神門神社。美郷町と百済を結びつけかけになった、百済から亡命してきたという王様がまつられている神社とのことだった。前の週に送られてきていた写真と比べればずいぶん地味だったけれど、神社の屋根の、狛犬みたいな像が妙にかわいかった。

その次は、なぜだか正倉院の写真が送られてきた。それは奈良のものだ。『なんで正倉院?』と返すと、『違うよ、これは西の正倉院って言って正倉院を再現したやつ。奈良とも縁があるんだよ、ここ。運命だな。笑』すぐさま返事が来た。嘘みたいだ。

森山の写真をおばあちゃんに見せるたび、結ちゃんが毎週来てくれるから嬉しいわ、とおばあちゃんはお機嫌な様子で言う。来週はどこかしらね? と顔をほころばせて言う。

ある日、森山が自分の写真を送ってきた。ウェイクボードに乗った姿だった。バナナボートに友達らしき人物と乗った写真も続けて送られてきた。石峠レイクランドという所で宿泊学習だったそう。夜には部屋で知らない子たちの中でもみくちゃんになっている森山の姿が送られてきた。それ

までの写真は景色や物ばかりで、森山の姿を見るのは転校して以来だった。

久々に見る森山の顔が楽しそうで、良かったと思う一方で少しだけさみしくなる。とは言え、さすがにそんな身勝手な感情を森山に向けるわけにはいかないの、『楽しそうで何より。忙しいだろうから、毎日送ってくれなくてもいいんだよ』と送り返して息をつく。毎日送ってくれて嬉しいのに、送ってくれることを期待しているのに、送ってくれなくてもいいだなんて、心にもないことを言う私は嘘つきだ。

引越すと告げた森山に、散々嘘つきと言ってしまった私の方が、よっぽど嘘をつく。『俺がいなくなつてさみしいだろ?』にも嘘で返し、『三原って好きなやついの?』にも『いないよ』と嘘をついた。

嘘つきな私の強がりな嘘を森山は気にした様子もなく、ほとんど毎日写真を送ってくれた。

ある日、真つ暗な写真が送られてきた。『昔、夜空の暗さで日本一になったんだって。中小屋天文台つとこで星見た。撮れんかった。撮れてないけど、本物はきれいだよ。写真じゃ伝わらんから見に来る?笑』また、『笑』だ。冗談なのか、ほんの少しは本気なのか、ちっとも森山の心の内が読めない。

おばあちゃん用の四回目は、おせりの滝というところだった。『三段になつてて実物すごいきれいなんだけど、うまく撮れん。受験生、息抜きに旅行とかどうよ。本物見に来い。笑』

「きれいなとこねえ、結ちゃん」

「行ったことないの？ おばあちゃん」

「ないわねえ」

写真をのぞきこんだおばあちゃんがきっぱりと言う。そして写真の下にある森山のメッセージを見て、おばあちゃんが「いい案ね」と呟いた。

「いい案って？」

「行こうか、結ちゃん、美郷町に」

「え？」

「おばあちゃん行きたいのよ。付き合ってちょうだいよ」

「めちやくちや、行くの大変そうだったけど」

「でもおばあちゃん、これを逃せばもう美郷町に行くことなんてない気がするもの。孫娘と二人旅、楽しそうじゃない。行きましようよ、結ちゃん。嫌？」

「嫌じゃないけど……。本気？」

「本気も本気、おばあちゃんの頼みだと思って一緒に行きましょ」

「……分かった」

森山の冗談みたいなお誘いから始まった突然の旅行計画は、嘘でも何でもなく本当に決行されることになったのだった。

行くと決めてからのおばあちゃんの行動は早く、夏休みに入るその週に行ってしまおうと、宿

を取り、J Rや飛行機のチケットも購入していた。

二泊三日の旅行の日程が決まると、すぐさまそのことを森山に伝えた。

『嘘だろ』

それが、森山の最初の反応。しかしこの件に関しては、私は嘘つきじゃない。『本当なんだよね』と伝えると、『せっかくだったら会いたいけど、時間ある?』と返ってきた。おばあちゃんに聞くと、『私は一人でのんびり過ごしたいから結ちゃんとは宿と行き帰りだけ一緒ならそれでいいわよ。結ちゃんは森山君と遊んでらっしゃいな』という答えが返ってきた。孫と二人旅、と言っていた割には私と過ごすことに重きを置いているわけではないようだ。久々の故郷で、一人で振り返りたい思いもあるのかもしれない。

結局、一日目はおばあちゃんと過ごし、二日目丸一日を私は森山と過ごすことになった。あまりに私に都合のいい展開に、妄想でもしているんじゃないかと自分を疑ったりもするけれど、どうにも本当のことらしいまま、森山との再会の日は近づいてくる。私の心拍数も日に日に上がるような気がするけれど、それは気のせいかもしれない。

そしてついにおばあちゃんの故郷、森山の住む町、美郷町へ向かう日がやってきた。私とおばあちゃんはお母さんに見送られて、朝五時三十一分発のJ Rに乗って、バスを經由しながら伊丹空港に向かった。宮崎空港から日向市駅を目指し、そこからさらにバスに乗ってようやく美郷町に着いた頃には午後三時を回っていた。

私たちがバスを降りたのは、おせりの滝。ここに来るきっかけになった場所だ。木々の緑と、流れ落ちる滝の白さが美しかった。確かに、写真以上の迫力だ。竜神が住んでいるという伝説まであるらしい。おばあちゃんは私よりいきいきと、遊歩道を軽い足取りで進んでいった。傾斜のきついところもスタスタと私の前を行った。

おせりの滝の観光を終えると、私たちは予約した宿に直行した。

おいしい料理に舌鼓を打っていると、宿に着いてから送った『美郷町に着いたよ』に森山から返信が届いた。

『ごめん。明日、用事できた』

え、嘘。嘘でしょ、と打ち返す間もなく、『嘘だけど。宿に十時に迎えに行くな。寝坊するなよ』と森山からの次のメッセージが来た。本当に、心臓が悪い。一瞬、本当に会えなくなるのかと思った。

次の日、迎えに来た森山におばあちゃんは「初めまして。結ちゃんをよろしくね」と言って森山と握手までした。おばあちゃんに見送られ、私たちは、宿を後にした。

久々、と行っても三か月ぶりくらいだし、スマホでのやりとりは、ほぼ毎日だったのに、二人つきりになると妙に気恥ずかしくなって、何を話そうかいちいち考えてしまう。今まで通りってどんな感じだったっけと、考えれば考えるほど、緊張してしまう。

森山に言われるがままにバスに乗り、並んで座って、しばらく沈黙が落ちた。

沈黙を破ったのは森山の方だった。

「俺に会いにわざわざここまでやって来るなんて、三原そうとう俺のこと好きだな」

「ふえ」

出したことないような変な声が出た。慌てていろんなことを、ごまかす言葉を言い吐く。

「何だよ。おばあちゃんの付き添いだけだから。たまたま、おばあちゃんの実家に森山が引越してたってだけだから」

「はいはい、分かっていますよ」

そしてまた、しばらく会話がなくなった。流れる景色に目をやっても、頭の中は森山のことについていた。かわいげのある言葉の一つも言えない自分が歯がゆい。

森山が案内してくれたのは、奈良とのつながり、西の正倉院だった。

「ここは、内側も見られるんだね。奈良のは外からしか見られないけど」

「造りは同じだから、あっちもこうなんだなって想像するのもおもしろいな。俺、けっこう歴史好きだから」

「そうだったけ？」

「そうだよ。知らなかったよ？」

知らなかった。自分の知っていることがいかにわずかばかりか思い知らされる。

「歴史って言えばさ、ここにも書いてある百済王伝説っていうのがけっこうおもしろくてさ」

西の正倉院の中を巡りながら、森山が語る。私は黙ってそれを聞いていた。

百済が新羅に滅ぼされたときに、日本に逃げてきた王が、禎嘉王という人で、嵐で日向の金が浜に流された後、占いでこの美郷町に辿り着いたらしい。しばらく平穩に暮らしていたけれど追っ手に居場所を突き止められ、結局殺されたそうだ。

「でもさ、不思議な点がいっつかあるんだよな」

「何？」

私自身はそれほど歴史は好きではないけれど、楽しそうに語る森山を見るのは楽しかった。森山が好きだ。やっぱりどうしても、好き。

好きだと言ってしまえば、終わるかもしれない関係。でも、物理的に離れた距離は、現状維持すら許してくれない。好きだと言わなくても、終わるかもしれない関係。

言うべきか、言わざるべきか。本音を言えば、森山が私のことを好きで、森山が告白してくれたらどんなにいいだろうかと思ってしまうのだけれど、そんな私に都合のいい展開、起こると思えないし期待しているうちにこの旅行は終わってしまうに違いない。

「百済が滅びたのは西暦六六〇年なんだけど、ここらへんで伝わっている禎嘉王がやって来た年は七五六年なんだよ。滅びた百年後。変だろ？　そもそも百済の最後の王って義慈王って言って、その近身に禎嘉王って名前もない」

「……伝説が嘘なんじゃないの」

私の言葉に、森山はにやりと笑った。

「甘いなあ、三原。そこが歴史の面白いところだろ。嘘とかじゃなくて、何か理由がある、どこかで食い違いがあるって考える方がおもしろいじゃん。俺の仮説聞く？」

「言いたいなら聞いてあげてもいいけど」

「俺は、七五六年に注目したんだけどさ。その年に日本では橘奈良麻呂の乱つてのがあったわけ。そもそも百済が滅びたときに日本には義慈王の息子の善光って人が来てただけど、そのまま住み着いて日本の貴族になったんだよ。百済王って名字で子孫たちが続いていったわけ。だから、奈良麻呂の乱に巻き込まれた百済王氏の誰かが逃げてこの地に来たつてもありうるかなって。後、その年って、中国の唐だと安史の乱があったんだよ。楊貴妃のあれな。だから、もしかしたら、唐にも百済の王族の末裔がいて、安史の乱に巻き込まれて逃げてきたつてもありかなって。いろいろ想像するの、面白いだろ？」

「そうだね、おもしろい」

嘘をついた。まくしたてるように話すものだから、地名や登場人物がごちゃごちゃして森山の話にほとんどついていけなかった。だけど熱く語る森山はずっと見ていたいほどおもしろかったのは、嘘じゃない。

森山と過ごす時間はあつという間に過ぎた。時の流れは無情だ。西の正倉院の後は、百済の館に行ったり、友情が深まると森山が言った百花亭という場所に行った。そこに、「恋人の丘」と、書

かれていたことに、気づかないふりをした。森山もそれには触れなかった。

森山はわざわざ宿まで送ってくれて、また明日な、と去っていった。

また明日、と言っても明日はほとんど時間が無い。十時過ぎに宿を出て、奈良に着くのは夜だ。かかる時間に、遠いことを改めて痛感させられる。

おばあちゃんと夕食を食べながら、それぞれの今日一日の行動を報告した。「楽しかった？」と聞かれて、うん、と答えた。嘘ではなかったけれど。本当に楽しくもあったのだけれど。それだけでは、なかった。

おばあちゃんに誰か懐かしい人と会ったのか問うと、一人で色々巡ったわ、と答えてふんわり微笑んだ。

森山は九時過ぎに宿にやって来た。おばあちゃんが、どうぞどうぞと言うものだから、森山は私たちが泊まっていた部屋に招かれて、姿勢よく正座しながら、勧められるお茶にも手を伸ばした。

私はその向かいに座り、おばあちゃんは私の隣でにこにこしていた。

「本当にいいところね、来てよかったわ」

おばあちゃんがまるでただの旅行者のようなことを言い出した。

「え」

私と森山の声が重なった。おばあちゃんの発言に違和感を感じたのは私だけではなかったらしい。「おばあちゃん、ここの出身なんだよね？」

「ふふふ。嘘でした」

「え？」

「本当は私、和歌山県出身よ」

「嘘でしょ」

「ほんと」

嘘つき嘘つきと、森山や自分に何度も向けた言葉は、予想だにできなかったけれど、おばあちゃんにこそ向けられるべき言葉だった。

私が言葉を失っていると、森山が笑い出した。

「そんなことある？ 三原も俺もすっかりだまされてたってこと？」

「色んな写真がありがとうね。森山君。素敵な写真がたくさん見られたし、そのうえ結ちゃんが毎週それを見せるために来てくれたから嬉しかったわ」

「……おばあちゃんの嘘つき」

私がつぶやくと、おばあちゃんは飄々とした雰囲気です。「結ちゃんは嘘はつかない？ じゃあ聞いてもいい？」と首を傾げた。

「結ちゃんは、森山君のことが好き？」

知ってるくせに、森山の前でとんでもないことをおばあちゃんが言い出した。そして聞いたくせに、答えは森山君に言っておいてと言い残し、散歩に行ってくるわと出て行ってしまった。

とんでもない置き土産を置いて、森山と二人つきりにされてしまった。

「えっと、三原、俺のこと好きなの？」

「それ、私、嘘つけばいいの？ 本当のこと言えばいいの？」

「どっちでも。俺の都合のいいように取るし」

「どっちが都合いいの」

「俺も、って言いたい」

「分かんないんだけど。その答え」

森山がスマホを取り出した。何か操作しているなと思っていたら、私のスマホに森山からメッセージが届いた。

『好きなんだけど』

目を疑う。そうであればいいと願いはしたけれど、本当に？

「嘘、じゃ、ない？ これ、ホント？」

「うん。引越すことになったから諦めようかなって思ってたけど、越しても三原との縁って切れそうにないなって思えてきて、まあ、半分おばあちゃんの嘘だったわけだけど、とにかく遠いけど、なんか何とでもなるかなって思えてきたし、うん。それで」

「好き」

森山の話の最後まで聞かずに、唐突に、私は告げた。ほとんど無意識だった。

「それ、嘘じゃない？」

「うん」

「ややこしいな、なんか」

嘘だとか、嘘じゃないとか。

二人で笑っていると、おばあちゃんが戻ってきた。まるでタイミングを見計らったかのように。

「結ちゃん、もう出発しないと間に合わなくなるわ」

「嘘」

「残念ながらこれは嘘じゃないわよ。さ、準備して」

嘘と本当が入り混じる中、私は慌ただしく美郷町を離れた。

こののち、森山が私の彼氏になったことは、嘘ではない。

佳作

「郷光る花咲き盛る」

辻佳代子



遠く続く山脈が、漂う朝霧に包まれて静かに揺れていた。幻の景色のようである。

風が通ったのか、いつとき霧が流れて瑞々しい緑の木々の重なりが見えた。現実の景色であると明らかに知らされた。

果禰弥は、その山の頂に微かな煌きが降り注いでいるのを見分けた。

「阿琪頼様、ごらんなさいませ、あの光を」

「光？ それは見えぬが……」

アキライは山々を眺めわたす。

「やっと辿り着きました。間違いございません」

しなやかな少年のように、カヒミが澄んだ瞳で凜々しく言い放った。

遅しく日焼けしたアキライの顔が綻んだ。二十歳前の男の潔さが晴れている。

「木々の間にいくつもの白い花群が見える。懐かしい。百済の山々をそのまま移してきたような」

「みな様方、行く先は見えました。あと一息でございます」

カヒミの言葉に、付き従ってきた供人、工人、農民ら二十人余りの人々は、

「おお」

「はあ」

「着いたか」

それぞれ腑抜けた声を放って、日向灘の砂浜にへたり込んだ。

「ひめ様本当でございますか？」

高い声をあげたのは、常にカヒミの傍らに添っている未南鳥であった。

「ああ確かにこの山だ。もう迷いはない」

「ふわあゝ。ようございましてあゝ」

浜の砂に膝を落とし、両手をついた。

「待て待て、まだあの山の頂近くまで登らねばならぬ。まだ座り込むな。アキライ様、みな様方も今少しお力を」

「わかった。みな気を抜くな。少し休んでからあの山を目指そう」

「あの広い川に沿ってまいりましょう」

「なんと伸びやかな流れの川か。白村江から続いているような。あの川は何と呼ばれているのだろう」

「耳川とか」

「不思議な名前ではないか。耳川とな。あの川は我らの声に耳を傾けるのであろうか。それなら偽りを言うてはならぬ。耳川とな。我らが耳を澄ませばよいのか。それなら黙って瀬音を聴こう」

「この川の流れを聴きながら遡ってまいりましょう。きっと美しい郷に到りつけましょう」

「さ、もう少しだ。力を尽くせ」

アキライはみなを励ました。出立の頃の弱々しい気鬱の影は、すっかり消えていた。

およそ一年前になろう。

アキライは生きる力を失っていた。望みも喜びもなく、死のみを引き寄せて過ごしていた。可愛いがっていた従弟の多季多をおのが刀で引き裂いた。

黒く重い悔いの念。それだけを抱えて、景安寺の境内に閉じ籠り鬱々と沈んでいた。

《戦とはそういうものよ》と誰もが言う。

《百済の者たちが敵味方に分かれたのだ。仕方がない》と慰める人もいる。

《それはわかっている。わかっている》

アキライは心の中で叫ぶ。

世の常はわかっている。

《戦いには勝たねばならぬ》

敗北の惨めさを誰よりも百済人は知っている。

新羅に滅ぼされた時、国が消えた。白村江で敗北を喫した時、おのが立つ片隅もなく倭の船に救われて海を渡った。百済最後の義慈王も、その皇子豊璋王も幽えられ命を失った。

豊璋王の妹辛音の息子であるアキライは、まだ十歳の子供であったが、船に乗り、遠ざかりゆく

百済の山脈を滲む眼で見据えて心に刻んだ。

《戦いには勝たねばならぬ》

倭の国は百済の王族をあたたく迎え入れた。昔から数知れぬ人々が訪れていたし、半島で暮らす倭人も多く、長い往來の経緯はあつたにしても、王族がその臣下ともども移り住むのははじめてであつたろう。

父義慈王、兄豊璋王亡き後、その弟である禪広が王を継ぐべき唯一の人であつた。禪広王は以前から倭国に暮している人物である。倭の世情にも明るい。「百済王クダラノコニキシ」と呼ばれ政の世界でも重い役割を与えられた。

《もう故郷はない。これからは倭の世界で生き延びて行かねばならない》百済の人々は強い思いを抱いていた。

そんな時、吉野の大海人皇子の不穏な動きが伝わり、大友皇子との間がきな臭いとの噂が流れた。壬申の年である。

気づくと辺りに戦の匂いが浸み出していた。

緊迫した気配が徐々に広まり、手がかりを得ようとする足音が、右に左に大路を慌しく行き来する。どちらにつくかが思案のしどころ。鼻を利かせ勝つ側に立たねばならない。誰もが潮の流れを読むのに目を凝らした。倭人も百済人もない。風向きを読む。それに尽きる。煽動や策謀が横行する。表では忠誠を誓いながら、密かに敵と通じる者がいる。何があつても不思議はない。それが戦

いの常である。

いよいよ明日にもとなると、家々の裏口から人が出入りし短い言葉が交わされる。恩賞の誘惑が露骨に取沙汰される。押し殺した脅迫の声が夜に溶ける。まん丸い月が見下ろしているにもかかわらず。

裏切りもしよう。騙しもしよう。それが戦いの常である。一族の未来がかかっている。おのが家の地盤を固め、末代まで続く基を築かねばならない。子々孫々に亘って興隆する礎を造らねばならない。そのために男は戦いに出て行く。

アキライも十八歳になった。戦う男になった。

禅広王は、熟慮の末、大海人皇子に味方すると決した。しかしすべての百済人がそれに服したわけではない。中には勝ち目があると踏んで大友皇子の側についた者もある。

豊璋王にはアキライの母の他にもう一人の妹があり、彼女にはタキタという息子がいた。

タキタは、アキライの二つ年下で、百済にいた小さい頃から見知っていたが、倭国に渡る船の中で、アキライのそばを離れようとしなかった。父親を戦いで失っていたタキタは、寂しく心細かったのであろう、アキライを兄と慕った。アキライもまた格別な愛しさを持って可愛がった。

倭に来てからタキタの母は、倭人長谷辺氏に再嫁したが、アキライとタキタの仲はますます深くなり、齢を重ねるに連れて、人に言えない話もし、いずれは百済王を扶けて役に立つ勇者になろうと約しあっていた。

ところがこの戦で、長谷辺氏は大友皇子に加担すると決まった。それを知った時から、アキライの躰と心に暗い翳りがつき纏いはじめた。

二

「みな様方、ごらんなさいませ。光降る郷が、木の間に見えてまいりました。この峠を下り、小さな丘を越えると辿りつけましょう」

カヒミが弾む声で告げる。

「おおあれがわれらの行くところでござるか。山々に囲まれた清げな郷でございますなあ、アキライ様」
「なんと美しい郷ではないか。山懐に桜の大樹が見える。咲き盛る花が我らの訪れを微笑んでいるようだ。」

カヒミ、景安寺でお前と出会った日を思い出す。あの日散り切った桜の幹のこちらとあちらに背を凭せ、お前と語り合った。あの時、こんな日が来ようとはほんの少しも信じてはいなかった。カヒミ、お前がここへ連れて来てくれた。お前がいなければ、私は今も暗闇の底でもがいていただろう。「あの日が、遠い昔のようににも思われます。壬申の年の戦から帰られた時、あなた様は心を病んでおられました。はじめは日射しさえ拒んでおられた」

戰場から引き摺るようにして連れ帰られたアキライは、一言も発しなかった。難波の屋敷の奥にただ蹲っていた。薬師が無理やり少量の食べ物を飲み込ませ、薬を与えた。逞しく力強かった青年が、見る間に青白く痩せ細ってゆく。まわりの心配は一通りではなかった。

百済王の甥であり利発で壮健なアキライは、一族の中心的な役割を期待されていたのである。

ともかく静かな場所であちこち落ち着かせるのがよからうと、海を見下ろす夕陽丘にある百済縁の景安寺に向わせた。この丘から臨む夕景は、西方極楽への道を思わせる。寺で心を宥めて、元の平穩を取り戻してもらいたいとの一心であった。

半年ほど過ぎると、漸く一人で食事が摂れるほどには回復した。それでも、どこへも行こうとしない。寺の奥に籠ったきりであった。

アキライの母幸音の心配はひとかたならず、傍らにいる年老いた巫女に打ち明けた。

「アキライの鬱気はタキタを殺めたことに尽きよう。長谷辺氏の追手の噂も耳に入っているやもしれぬ。もはや長谷辺氏にそんな力が残っているとは思えぬが、アキライはいっそ追手の手にかかりたいでも考えているのであろう。いかがしたらよいものか」

「さようでございますなあ。私もいろいろ思案いたしました末、ある娘に思い至りました。カヒミ様でございます」

「カヒミというと鬼道の系譜に繋がる娘じゃな。お母上は帝に召されるほどの霊力の持ち主と聞く」
「さよう、カヒミ様は母親より強い力を持つと言われております。アキライ様より一つ下の十七

歳になる美しい娘でございますが、少し変わっておるようで、政には関わりたくないと申され、かといって嫁にも行かず、毎日貧しい民の訴えを聞いたり病を治してやったり、親の無い子供の世話をしたりと駆けずり回っておられるとか」

「その娘にアキライを任せようというのか？」

「カヒミ様は心優しい娘であると、誰もが申します。しかもアキライ様やタキタ様とは子供の頃何度かお顔を合わせておられるはず。アキライ様の今のご様子をお話しすれば、必ずやお力になってくださいますよう」

「ようわかった。今は藁にでも紙縊にでも縋りたい。厚くお願いをしてその娘をお頼りしよう」

アキライの母と巫女から話を聞いたカヒミは、進んで引き受けた。ちょうどカヒミも、アキライの様子を伝え聞き、心を痛めていたところであつたのだ。

春の嵐であろうか、風の強いある朝、カヒミは供のミナトリを連れて景安寺を訪れた。

夕陽丘ゆうひがおかに立つこの寺は、百済の様式で建てられ、鮮やかな色彩に包まれた華やかさを誇っていたが、戦で死んだ人を偲び戦の無い世界を祈る鎮かな佇まいをも漂わせている。

ときおり吹き荒ぶ風に草々が地を這ってなびき、木の枝が撓っていた。

門をくぐりしばらく行くと、大きな桜の樹が目に入った。花の季節は終わったばかり。一ひら二ひら残っていたとしても、今日の嵐でことごとく吹き飛ばされてしまふであらう。

カヒミは樹に近づいた。大樹たいじゆに出会うと手を触れるのがカヒミの常である。樹も葉も花も語りはしない。けれど通い合い繋つながれる。

カヒミはそつと桜に掌てを当てた。

その時、幹の向こう側に人の気配けはいを感じた。

覗くと男が一人、座って膝を抱え樹に寄りかかつて、彼方かなたの海をぼんやり眺めている。海は流れる墨色の雲に覆われていた。

《アキライ様だ》 気付いたカヒミは、ミナトリを去らせてから、そつと声をかけた。

「もしや、アキライ様ではございませぬか」

アキライは物憂ものうげに振り向いた。

「アキライ様、覚えておられますでしょうか。カヒミにございます」

「カヒミ？ ああ巫女のカヒミか」

「ずいぶんと年月としつきが流れてゆきました」

「……」

「アキライ様、子どもの頃、よう木の根方ねかたに座ってお話をいたしましたなあ」

アキライは何も答えなかつたが、カヒミは幹の反対側に座もたって凭たれた。樹を通して伝わるアキライの息遣いきづかいがカヒミの息を衝つき動うかした。

悲しみが、苦しさが、もどかしさ悔しき絶望ぜつぼうが、脈々と伝わってくる。

《この人を守らなければ》

カヒミの鬼道の血が呟いた。

「アキライ様、あなたのまわりには憂いが漂っておりませぬ」

「見えるのか。そうだな、お前は鬼道の者であった。ああその通りだ。私は押し拉がれている。暗闇の中で悶えている。辛い。もはや生きてゆく力もない」

「アキライ様、苦しみを外にお解き放ちなさいませ。心の中に抱え込んでいると闇は濃くなるばかり。どす黒い煙を放ち、全身が蝕まれてしまいました。私にお話しなさいませ。巫女は聴く者にございます」

「巫女は神の声を聴く者であろう。私の声は穢れている」

「巫女はあらゆる声を聴きます。神々しい声も、地の底の呻きも」

「聴いてどうする。この地獄から救いだしてくれるのか」

「いいえ、救い出すのは難しい。けれど分かち持てましょう。あなたが暗闇をさまよっておられるなら、手を携えて共にその暗闇を迷いましょう。寄りそって共に地の底を這いましょう」

「カヒミ……」

「さあお話しなさいませ。カヒミはお傍におります」

「あれは林の中の戦いであつた。

木々が立ち並び、下草が絡まり、どこに敵が潜んでいるか判らない戦場であつた。幹の後ろから思わぬ槍が突き出てくる、小刀が飛んでくる、気が抜けなかつた。

刀を振るゝ斬り結び幾人かを倒したが、胸の鼓動が持ちこたえられず、大きな木の幹に手をかけて、ふーっと息を整えた。隙だらけの危ないふるまいである。

すぐさま、背後に人を感じた。大きな殺気が押し寄せてきた。察知した瞬間、振り向きざまに刀を振るつた。

敵は倒れた。普通の兵とは違うきらびやかな装束が、見る見る朱に染まってゆく。安堵の吐息をもらし、相手の顔に目をやった時、私の全身が止まつた。

タキタであつた。初陣のタキタであつた。腹の中から吐き氣と呻きが絞り出て来た。背を向けた兵士を与し易いと思つたか、一人で飛び出してきたのであろう。

《タキタ！》

喉を引裂く獣の唸りを発して抱きかかえた。

タキタはきよとんとした顔で私を見つめた。

訳がわからぬ風であつた。

それからゆっくりと目を細めた。

瞳から殺戮の強さが消え去り、柔らかい優しい光が私に向けられた。

微笑しようとしているのであろう。

そして死にゆこうとしているのであろう」

その時、前後から喧しいいくつもの声が湧き起った。前方からタキタの供廻りが怒声を発しながら駆け寄ってくる。後方からはアキライの家臣らが押し寄せ、タキタを抱いて呆然と座り込んでいるアキライの前に立ちはだかった。幾人かはアキライをタキタから引き剥がし、引き摺って後ろに下がらせた。アキライはずっと木の幹に頭を打ちつけていた。家臣らは、アキライを戦場から立ち退かせた。

「あの時から私の全身が止まった。力が失せた。見てはならないものを見た。この世には、人の力ではどうにもできぬ裂け目がある。裂け目の向こうは暗黒の炎が渦巻いている。見た者は壊れる。

見た者は生きながら死ぬ」

「アキライ様。カヒミは聴きました。聴いてあなたの暗黒に触れて、私の軀も震えております。けれど私には人並み以上の力がございます。どうぞ私をお頼りなさいませ。私がお守りいたします」

「守る？ 何を。私には何も無い」

「アキライ様、あなたはここで苦しんでおられる。ここはあなたの場所ではない」

「私の場所ではないと。何を言っておる。私の場所？ そんな所がどこにある」

「どこにあるか、それはわかりません。私にわかるのは、ここではないということだけ。人は心優しい場所で生きなければなりません。心嬉しい場所で生きなければなりません。暗闇の底で蹲うすくまつていてはいけない」

「なんと愚かなことを」

「私にはわかります。ここはあなたの場所ではない。違う場所が必ずある」

「訳のわからぬことを言うな！」

「アキライ様。立ち上がってお歩きなさいませ。あなたの喜びだけではない。民のために生きられる場所がきっとあります。私がお守りいたします。探しにまいります。旅立ちましょう」

「旅立つ！ カヒミ、旅立つとな。戯言ざれごとはもういい！」

「アキライ様、人はみな安住の地を求めて旅立ちます。自らを偽らず、顔を上げて暮せる大地を探して足を踏み出します」

カヒミは言う。

すぐに見つかる幸運な人もいる。ふと周りを見渡すと、心通かよい合う家族や仲間が笑っている。そんな良き運の人もいよう。

けれどなかなか見つけられず、終生かけてさまよう人もいる。

ある者は、流浪の果てに海を見下ろす断崖に到り、もう前に進めぬと知ってうなだれる。押し寄せる怒涛の響きに身を委ね涙をこぼしていると、呼応するように美しい波の旋律が心に流れ、あゝ安住の地はここに、この心の中にあつたと覚るかもしれない。

死の間際になつて、天から落ちてくる一条の暖かさに満たされ、この世ではないどこかにその場所があると安んじる者もいるであろう。

また砂嵐舞う砂の荒野に取り残され、そんな場所はどこにもないと思ひ知つて、かえつて心静まる者がいるかも知れない。

「アキライ様、ここが安住の地ではない者は、ここで暮すべきではありません。あなたはここで苦しんでおられる。この地があなたを蝕んでいる。旅立つには充分な理由でありましょう。まいりましょう。美しい郷へ。あなたがあなたのまま生きられる場所へ。

私の中の巫女の血をお頼りなさいませ。我が家は鬼道をよくする血脈にございます。遠い昔、神の意を承つてこの国を治められた卑弥呼というお方が、我が家の祖先と伝え聞いております。

巫女の血が、必ずや、あなた様を安住の地へお導きいたします」

カヒミの言葉は力強く、何の迷いもなかった。

アキライは次第にカヒミの言葉に魅き寄せられていった。

《私はここで苦しんでいる。この地は私を蝕んでいる》

アキライの心の扉がほんの少し開いた。
そのわずかな隙間に、カヒミは手をかけてこじあけた。

四

アキライは、カヒミの言葉に魅かれましたが、まともに取り合つてはいなかった。

《カヒミはこの世とは違うところに住んでいる。清浄な神の世界に。私は暗黒の世界に。どちらも現実の世ではあるまい》

戯言が実の世界で動くとは思ひもしなかった。

しかしカヒミの行動は早かった。

すぐアキライを、その両親の許に連れて行つて、旅立つと告げた。強く引き留めると思った父母が、顔をほころばすのを見て、アキライは驚いた。

母幸音は涙を零しながら、

「母は別れる悲しさを泣いているのではありません。そなたの健やかな顔を見るのが嬉しい。心愉しく生きておれば道は開ける。躰をお勞わりなさいませ。心をお庇いなさいませ」

父は喜びの言葉を送つて旅立ちを寿いだ。

「アキライよ。人にはそれぞれ役割がある。そなたは子どもの頃から心優しい男子であつた。今も

それは変わらぬのであろう。ここで政争に巻き込まれ、神経をすり減らす暮らしは似つかわしくはない。そなたの場所がきつとある。為すべき仕事が必要ある。百済の技を広めるがよい。百済の智慧を教えるがよい。

百済人のある者は陸奥へ行って鉾脈を探しておる。ある者は関東へ行って五穀の育て方を伝授しておる。

工人、職人、農作の者も共に連れて行くがよい。もちろん従者頭の当寬も離れはすまい。

カヒミも我が巫女も西南の方角がよいと言うておる。難波の津に船を仕立てよう。なに、百済の者は流浪には慣れておる。漂泊の中で生まれ波に揉まれて大きく育つ。身を勞わり心を庇え。そなたの場所で生きよ」

「父上、これまでの不甲斐無いアキライをどうかお許しください。きつと自分の場所を探し、為すべき仕事を致しましょう。母上、お心を安らかに。アキライは新しく生きてまいります」

カヒミの両親は、あらかじめ成り行きを追っていたので、すでに心を定めていた。

父は「もう会えぬかもしれぬな」と気弱に涙を見せたが、同じ巫女の血を引く母親は、カヒミの強い靈力に敬意を払っていたので、いつも口を挟まず黙って見守っている。

ただ一つ、赤子の時からカヒミの世話をしているミナトリを供にと願ったが、ミナトリが承知するかどうかと気を揉んだ。

話を聞いたミナトリははたして、

「はあ、旅でございますか……。ふう、してそれは、どこへ？　いつ？」

カヒミはわざとそつげなく答えた。

「行く先はわからぬ。準備が整い次第すぐだ」

ミナトリは、カヒミの面倒を見るのは自分だけだという誇りと、旅への不安で揺れ動いていた。顔を上げたり下げたり、もぞもぞと手を動かしたり、はかばかしい答えをしない。

カヒミは半ばなかからかって言った。

「嫌なら来なくともよい。やめておけ」

「そんな！　ううっ……わかりました！　カヒミ様に生涯お仕えすると心に誓っております。参ります！」

「決して文句を言うではないぞ」

「はい決して！　いや……決して、とは……。いえ申しません。絶対に申しません！」

五

「揺れております。気持ちが悪うございます。止めてくださいませ」

決して文句は言わぬと言ったミナトリが、難波の津を出てすぐ喚わめきはじめた。

けれど誰も取り合ってはくれず、アキライの従者頭のトーカンなどは、「うるさく言うな。すぐ慣れる」とにべもなかった。

「百済のお方と違って、私、船ははじめてでございますよ。こんなに辛いのなら来なかったものを」「苦しいという割にはようしゃべる奴じゃなあ。少しは黙っておれ」

「なんと無礼な。私はお喋りなんぞではございませぬ」

トーカンの言った通り、二日もするとミナトリもすっかり船に慣れて、瀬戸内の珍しい光景に、忙しく顔を向けていた。

「ごらんなさいませトーカン様。海に陸が浮いておりまする」

「ばかを言え。あれは島じゃ。まあ確かに浮いていると見えるかのう」

「トーカン様。海の潮が渦巻いております。船が吸い込まれます！」

「ばかを言え。渦潮は避けて通るのが道理じゃ。何も知らぬやつじゃなあ」

「だから船ははじめてと申し上げておりましょう」

ここぞと思える泊りに上陸し、行くべき場所を探して歩いた。カヒミが先に立ち山野を訪ねる。

みなは「ここがその地か」と期待に満ちてカヒミに従う。幾日か探し廻った末、

「ここではない」

カヒミが悔しそうに呟くと、みなどつと落胆する。また船を遣り、今度こそはと、別の地を巡り巡る。

「ひめ様、本当にそんな場所があるのでございましょうか」

ミナトリがたまりかねてカヒミを糾ただした。みな気持も同じであつたろう。

「確かにある。どこかわからぬが必ずある」

強く言い切り、一步も引かぬカヒミの覚悟だけがみなをまた立ち上がらせた。

アキライは、信じているのかどうか。

ただカヒミの言うままに、潮風を浴び、野を歩き、山路を辿り、沢の水を含む日々を過ごしていたが、その日々は、アキライの脚の力を蘇らせ、躰の張りを元に戻した。

「ミナトリ、いいではないか。こうやってどこまでも歩いて行こう。ほれ、鳥たちも囀さえずっておる。お前と同じように賑にぎやかじゃなあ」

笑い声さえ上げるようになっていた。

幾度かそんな放浪を繰り返しているうちに、いつしか瀬戸内を抜けた。

ある朝、カヒミが船の甲板に立ち、凍ったように動かず一点を見つめている。

やがて「小舟を出してください」と静かに船長ふなおさに頼んだ。重く低い声であった。ミナトリさえ口を挟めなかった。

小舟が降ろされ、アキライたちは日向の浜を目指して漕いだ。

日向の浜辺から耳川を遡り、峠を下つてその郷に辿り着いた時、目に入ったのは満開の桜であった。下に入って見上げると天空が花で覆われた。

「何とみごとな」

「花の空じゃ」

みな華麗さに打たれてはしゃいだ。

ややすると郷人が集まってきた。近づき過ぎぬ距離で周りを囲み、ただ黙ってじっと見ている。

アキラたちが挨拶に迷っていると、年輩の男が近づいてきた。急いで呼び寄せられたのか、着物の胸元を掻き合せながら、静かに歩んでくる。堂々とした背の高い男であった。

「おことはどこの者じゃ」

警戒と威嚇と寛容が混じった声である。

アキラが言った。

「われらは難波の夕陽丘というところから来た者でございます。瀬戸内を船で渡り、日向の浜に打ち上げられ、ここまで辿り着きました。長い話でございます。なにとぞお耳をお貸しくださいませよう。」

それにしても見事な桜でございますなあ」

「そのような長い旅をして来た者が桜を愛でるとは。面白きお方々よなあ」

「決して悪事なす者ではございませぬ。詳しくお話し申しあげます。しかしながらその前に、みな疲れ果てております。水を飲み、物を食ひ、ひと休みする暇をただけませぬか」

「ますます面白きお方々よ。あいわかった。

私はこの郷の長でドンタロと呼ばれておる者。

その先に空き小屋がある。お使いなされ」

「ありがたきお言葉なれど、この桜の下で休ませていただきましょう。もはやこの樹が懐かしい。ここから離れるのが惜しい」

「ははは、好きになさるがよろしかろう。では後ほど、私の家へおいでなされ。ただしまだわれらはお前方の素性を知らぬ。黙って信じる訳にはまいらぬ。幾人か見張りを立たておくがよろしかろうな」

アキライはドンタロに來し方を詳しく物語った。カヒミも控えていたが、すべてを自ら話した。武人としては恥ずかしい心の闇も隠さずに語り尽くした。

「戦は酷い。戦は悲しい。

百済の者は戦いの中に生きてきました。父も、祖父も、その前も、幾世代もの祖先が戦いの中に生まれ、戦いの中に死んでゆきました。百済、高句麗、新羅という力の拮抗した国々がある以上、

戦いは続くしかなかった。

どの国も覇者となって君臨することを願う。覇者とならなければ、妻を悲しませ子供を泥沼に突き落とし、父母を飢えさせてしましましょう。

勝利を手に入れた男たちは美しい。ちぎれんばかりに手を振って迎える女や子供らの歓びの声。家族を守った男たちは拳を突き出し雄叫びをあげる。その顔は喜びに溢れ、誇りに輝き、おのが為した業に恍惚としております。けれど……戦は酷い。戦は悲しい」

ドンタロは深く頷いた。

「私にも戦働きに出た昔がござる。歓呼の雄叫びをあげました。だがその歓声に混じる断末の絶叫を聞き分けて、肌粟が立ったことも忘れられぬ。戦は酷い。戦は悲しい。おことのお気持ちはよくわかる」

ここにも聴く人がいたと、カヒミを見つめながら、アキライは和やかな吐息をついた。

「おことらは、この郷に暮りたいと思うておいでなのか？」

「はい。ここが私の場所だと確かに感じます。どうかこの郷の片隅にわれらを置いていただけませぬか。工人、職人も共に来ております。黍、麦など五穀の種籾も携えてまいりました。百済の技をお伝えいたしとございます。それが私の為すべき仕事でございます。この郷で私をお役立て下さ

いますよう」

「ありがたきお申し出じや。百済や唐の方々が勝れた技を伝えられたとは、この辺りにまで聞こえております。鉄を作る石を求めて人が巡ってきたこともござる。どうぞ末永くお暮しなされ」

七

「ひめ様、早う早う。桜が散りそうでございますよ」

ミナトリが、男の赤子を背負い、五つになる女の子の手を引いて走りながら叫んでいた。

「まあミナトリ、そんなに走っちゃ危ないわ。まだ桜は盛りですよ。でも今朝も確かめないとね。今行くわ」

カヒミも、ちようど去年の今頃生まれた女の子を負ぶつて外に駆けだす。

山懐の桜の大樹は、咲き盛っていた。

花びらが揺れて朗らかに笑みを撒いている。

この郷に住んで七年の歳月が流れた。

桜の頃は、一つ二つ咲き初めてから一ひら残らず散りゆくまで、毎朝見守るのが習わしになっていた。「きれいですねえ。沙裨弥ちゃん」

カヒミの背中の子の頬をつつきながら、ミナトリが言う。

「サヒミちゃんは可愛いわねえ。アキライ様とひめ様のお子だから、どっちに似ても可愛いに決まっている。お兄ちゃんの福智様も凛々しい男ぶり。それに引き替え、我が家の子供たちはトーカーンに似て敵ついたら」

「どの子も可愛いわ。みんなおおらかに育っていますよ」

「ああ、アキライ様とトーカーンが参りましたよ。福智様とうちの康寛も一緒でございます」

「おお満開だな。この郷に来た日と同じだ。今年もみな健やかに暮らせたなあ。

きつとわれらの一族も、夕陽丘の景安寺で、賑やかに花見をしておられるだろう。

タキタも、浮かぶ雲の上でこの花を愛でていよう」

「アキライ様、この美しい郷でまた一年を過ごしましょう。一年が過ぎると、また花咲き盛る麗らかな春が巡ってまいりますよう」

花びらがいくつつか、やわらかな風に乗って空の彼方へ舞っていった。

佳作

「月よ、高く昇れ」

松岡博



船が大波をかぶり帆柱に亀裂が走った。次の瞬間、帆柱が折れて舳先が岩礁に乗り上げ、船は真つ二つに割れて荒れ狂う夜の海に沈んでいった。

百済の聖明王子は黒い海に投げ出されたが、目の前に浮いていた帆柱を抱きかかえた。しばらくは、周りに従者たち二十人ほどが船板や柱につかまって波のまにまに浮き沈みしていたが、いつの間にか、一人、二人と消えていき、気がついたときには王子一人だけになっていた。

——このような暗い海で、ひとり寂しく死ぬのか……。

聖明王子は帆柱からずり落ちそうになったが、帆柱に絡みついている綱を自分の身体にくくりつけた。

どれぐらい時間がたったろう。風が吹き、東の空が明るくなってきた。陸地が見える。

太陽が水平線から昇り始めた。

二人の漁師が潮風に吹かれながら日向の海岸を歩いていった。漁に出かけるところである。砂浜に押し寄せる波が朝日を浴びて白く砕けている。

「おい、あそこに見えるのは人じゃねえか」

「そうや。人や、人が倒れとる」

二人が駆け寄ると、波打ち際に若者がうつぶせに倒れていた。見ると風変わりな衣装を身にまとっている。芝居役者のようだ。身体を仰向きにさせると、一人の漁師が若者の鼻のところに自分の耳を近づけた。

「生きとるぞ！」

「生きとるか。よし。寺まで運ぼう」

漁師は若者を持ち上げて水を吐かせ、海岸近くにある専修寺に運んだ。

早朝からたたき起こされた住職は、若者を奥の部屋に運ばせると、小僧を呼んで気つけ効果のある薬草を持ってこさせた。草を若者の鼻孔に近づけ、匂いがかがせると、若者はせき込んで目を開けた。しばらく目がうつろで呆然としていたが、枕元に座っている住職に言った。

「ここはどこですか」

百済語である。住職も漁師も百済語が分からない。住職はその時初めて若者の衣服が一風変わっていることに気が付いた。紫色の大袖袍おわそでのほうと青色の錦袴にしきぼかまを着て、幅の広い素革帯すかわおびを締めている。帯は紅色で正面の円の中に龍頭の側面図が描かれている。手首には朱、青、金色の百索縷ひやくさくろが巻き付けてある。

住職は衣裳を見て若者は百済の人に違いないと思った。若者は住職を見上げて、

「ここは百済の寺ですか」

と尋ねたが、言葉が通じない。住職が一方的に自己紹介をした。

「私はこの寺の住職、恵尋えじんと申します。あなたは百済から来たのですか」

住職はゆっくり日本語で言ったが若者は首をかしげた。恵尋は小僧に筆と半紙を持ってこさせて、「百済」と大きく書いて、仰向けになっている若者に見せた。若者は「百済」の二文字を見ると、

惠尋の目を見て大きく二回うなずいた。

——やはり、百濟人じゃ。

と、惠尋は独り言を言つて、漁師の方に向き直り、

「あなた方は良き功德をなされた。こちらの若者は百濟の高貴な方のようじゃ。ところで、百濟の言葉じゃが、鬼神野さまなら、使用人に百濟語が分かる人がいるから、身体が回復したら、鬼神野さまの所に連れて行つてくれまいか」

「お安い御用です。いつでも呼んでください」

「では、頼みますぞ」

漁師たちは惠尋においとまして、寺を出た。

鬼神野氏は九州でも指折り豪商で皇族と繋がりがあり、倭国内はもろろん遠くは百濟、琉球まで手広く商いを営んでいた。使用人は五百余人、帆船は四十隻以上あつた。

漁師が帰ると、惠尋は若者に重湯を飲ませ、様子を見てから次に小粥を食べさせた。若者の頬に血の気がさし、そのまま深い眠りに落ちた。

聖明王子が日向の海岸に漂着する三か月前のことである。紀元五一三年、聖明王子は父である百濟の武寧王の名代として、百濟の都、熊津（公州市）を出立して倭国に向かった。王子は従者九十余人を従え、三隻の帆船で玄海灘から周防灘に入り、瀬戸内海を航行して奈良の大和朝廷に朝貢した。

帰路、周防灘に向かう途中、嵐に遭遇して三隻のうち二隻は無事に玄海灘に出たのであるが、王子を乗せた船は南に流され、日向の沖で難破したのであった。

王子は翌日の夕方までぐっすり眠った。目が覚めて立ち上がりとしたが、脚に激痛を感じ、悲痛な声を上げた。

「どうしました」

付き添っていた小僧が尋ねた。

「脚が痛い」

王子は、裾をまくりあげて脚を見た。赤く腫れ上がっている。小僧は恵尋を呼んできたが近辺には医師がない。恵尋はどうしていいか分からなかったが、鬼神野氏のことを思いついた。

鬼神野さまの所なら医者が手当てをしてくれるはずじゃ。明日の朝、漁師に若者を運んでもらおう。

翌朝、専修寺の近くを流れている耳川みみかわまで王子が戸板で運ばれ、舟に乗せられた。耳川を半刻はんとせきほどさかのぼると、山あいにある、のどかな村に着いた。美郷みさと村である。舟を降りて杉の木が林立する小道を登っていくと、鬼神野氏の広大な屋敷が見えてきた。

鬼神野氏が玄関に現われた。玄関先に恵尋と漁師が立ち、戸板に若者が横たわっている。

「これは、これは、御任職、いかがされました」

「今日は、ちとお願いがありません」

と言つて、惠尋が鬼神野氏に事情を話すと、すぐに王子は玄関脇の小部屋に運ばれ、医者と百済語が分かる使用人が呼ばれた。

使用人が来ると、惠尋は気になつていた質問をした。

「あなたは百済人と思ひますが、どういふ身分の方ですか」

「はい。わたしは百済の武寧王ぶねいおうの嫡男、聖明王子です」

惠尋も鬼神野氏も驚いた。惠尋は若者が高貴な人とは思つていたが、まさか王子とは思つていなかった。いろいろ訊いていくうちに王子は大和朝廷に朝貢した帰路、船が遭難し日向の海岸に漂着したことが分かつた。

百済と倭国とは百済第十八代、腆支王てんしおうの頃から百年間にわたり友好関係を結び、一年ごとに交互に親善使節を送つていた。

鬼神野氏は王子の骨折を治し百済に送り届ければ、百済との交易が盛んならうと考へた。鬼神野氏は早速に通訳を通して王子に挨拶をした。

「私は鬼神野と申します。ここ九州の商人で百済とも取引があります。王子様が回復されるまでお世話しますから、どうぞ安心してください。今、私の家族を紹介します」

鬼神野氏は、家族、特に息子たちを若者に引き合せておくのは何かと都合だと思つた。

王子は鬼神野氏に頭を下げて言つた。

「お世話になります。ご恩は一生忘れません」

王子には中庭に面した大きな部屋が用意された。王子がそこに移されると、鬼神野氏の妻、三人の息子、娘が部屋に入ってきた。王子は上半身を起こした。鬼神野氏は妻の太媛夫人と息子の紹介を終えると、娘の方を掌で示して言った。

「こちらは娘の磐耶姫です」

磐耶姫はうつむいていたが顔を上げた。聖明王子の目と磐耶姫の目が合った。王子は二十歳、姫は十九歳である。

王子は磐耶姫を見て心臓がどきりとした。世の中にこのように美しい女性がいるとは……。まるで天女のような。王子は一目で魂を奪われてしまった。

磐耶姫も王子を見て心臓が一瞬止まった。なんとという美青年……。精悍な顔立ち。凛々しい目鼻。姫は一目惚れしてしまった。

その後、磐耶姫は青年が百済人であることを知った。会いたいと思っても人の目がある。こちらの想いを伝える方法はないものかと考えている内に、最近聞き覚えた百済の歌を思い出した。その曲を倭琴で弾けば、中庭を挟んで反対側の部屋にいる王子の耳に届くと思った。

その夜、月が隈なく照らし鈴虫が鳴いていた。磐耶姫は庭に向かって琴を置き、つるる想いを込めて曲を奏で始めた。

丁度そのころ、王子は部屋の縁側に出て月を眺めていた。王子は医者の手当てのお蔭で杖をついて縁側までどうにか歩くことができるようになっていた。

庭の花や草木が月の光を浴びてそよ風に揺れている。今頃、百済で母上は同じ月を見ているのだろうか。思えば、熊津の都を出てから、早や三ヶ月は経っている。母上はわたしが死んでしまったと思ひ、嘆き悲しんでいることだろう。母上、わたしは無事に生きていますよ。

そのとき、どこからともなく琴の調べが流れてきた。懐かしき百済の調べである。鈴虫の鳴き声にかぶさるようにして夜のしじまに流れてくる。故郷の景色が臉に浮かんだ。

王子はじつと聞き入った。目がうるんできた。真つ暗な海に投げ出され、死の淵をさまよい、今このように故郷の曲を聴いている。

どなたが弾いているのだろうか。あの美しき磐耶姫だろうか。自分も二胡で同じ曲を奏でたいものだ。次の夜も、倭琴の調べが庭を通して流れてきた。愛しい人を恋焦がれる想いが伝わってくるようであった。

次の日、王子は使用人に尋ねた。

「あの琴の調べはどなたが弾いているのですか」

「磐耶姫です。しばらく当家に滞在していた百済の人に習われたのです」

「そうですか。だから百済の調べが聞こえてくるのですかね。ところで、わたしも楽器が弾きたいのですが、奚琴けいきん」「二胡」という楽器はこちらにございませんか」

「そのような楽器はありませんが、大琴てくむ（横笛）ならあると思います。明日持ってきてあげましょう」
翌日、月が昇り、聖明王子が大琴を吹くと、その調べが夜の静寂に広がった。

月よ、高く昇っておくれ

隈なく照らしておくれ

あの人は市場へ出かけたけれど

歩く夜道が気にかかる

ぬかるみに足をすくわれないうで

心静かに

転ばないで

王子の笛の音が庭を横ぎって磬耶姫の部屋まで届いた。磬耶姫は笛の音を聴き、即興で倭琴の伴奏をつけた。王子と姫の調べが寄り添うように流れた。

今度は、同じ曲を磬耶姫が奏で、王子が伴奏をつけた。二人の呼吸がぴったり合い、調べは屋敷中に美しく響きわたった。

鬼神野氏も使用人たちも静かに流れる音曲に聞き惚れた。王子は笛を吹きながら、磬耶姫の白い指が倭琴の弦をかき鳴らす細やかな動きを想った。磬耶姫は倭琴を弾きながら、王子の凛々しい横顔を想い描いた。

翌日の朝餉のときである。鬼神野氏が磐耶姫に言った。

「昨夜は美しい調べを聞かせてもらった。王子の笛とお前の琴がぴったり合って見事であった」

太媛夫人が提案した。

「一度、二人が合奏するのを聴いてみたい」

その日の夕方、広間で合奏することになった。広間には花が飾られ、ろうそくの光が部屋の隅々を照らした。鬼神野氏の家族や使用人が集まると合奏が始まった。

初めの内は二人の呼吸が合っていたが、途中から、ばらばらになった。というのは、王子は大琴を吹きながら、磐耶姫の心を射止めようと念じ、磐耶姫は倭琴を弾きながら王子の琴線に触れるように願った。次第に二人の心拍が激しくなり、指が汗ばんできて呼吸が乱れてきたからである。

どうやら大きく調子を崩さずに合奏は終わったが、二人は夢うつつであった。王子も磐耶姫も一日中、いや、死ぬまでぶっ続けに合奏していたと思った。

王子が鬼神野氏の屋敷に来てから三ヶ月経った。骨折は完全に治り、いよいよ王子は百済に戻るようになった。鬼神野氏は百済まで帆船を一隻出すことにした。いま百済の王子を助けておけば、将来百済王になったとき何倍もになって見返りが来るはずだと思った。

出発を三日後に控えた日、王子は廊下で磐耶姫の召使いに書き付けを渡した。書き付けには使用人に教えてもらった言づてが書いてある。

「今夜、庭の松の下でお会いしたい。私が夜中にろうそくに火をともしたら来てください」

磐耶姫は夜のとばりが下りてから、じつと暗い庭を見つめていた。夜半過ぎ、ようやく庭の反対側にろうそくの火がともり、かすかに揺れている。磐耶姫は月の光を頼りに松の木に向かった。

磐耶姫には許嫁がいた。北九州の豪族、葛城かつぎ氏の嫡男である。密会かひぎは許されない。王子も鬼神野氏の大事な娘と逢引していることが見つければ、ふしだらな男と見なされる。

二人は松の影で会った。目と目が合い、手を取り合った。磐耶姫の手は柔らかく絹のようになめらかであった。

王子はたどたどしい日本語で言った。

「明後日、わたし、百済に帰ります。あなたを妻にしたいです。四カ月後に迎えに来ます。待っていてください」

「うれしい。必ず迎えに来てくださいね」

王子は磐耶姫を抱いた。二人とも脈拍が次第に速くなり、互いの心臓の音が、ぴたりと合った胸を通して、互いの身体に響いてきた。

突然、けたたましく犬の鳴き声がして二人は離れた。別れ際、王子は手首から百索縷ひやくさくろうを磐耶姫に渡し、姫はかんざしを王子に渡した。

翌日の午前、王子は通訳を伴って、鬼神野氏の部屋に行った。部屋に入ると、鬼神野氏と太媛夫人は、観世音菩薩像を眺めながら茶を飲んでた。王子は鬼神野夫妻に深々と頭を下げた。

「鬼神野さま、この三ヶ月間、大変お世話になりました。明日はお陰様で百済に帰る日となりました。大変感謝しております」

「いやいや、王子様に滞在してもらい、こちらこそ光栄でした」

夫人も一言添えた。

「船が無事に百済の都に着くように祈っていますよ」

王子は思い切つて言った。

「言い出しにくいのですが……」

言葉に詰まった。

「何か、おっしゃりたい事でも？」

「はい、実は、不躰けなお願ひですが、わたくし、磐耶姫さまを娶りたいと思っております」

鬼神野氏は驚いた。娘が王子と親しくしていたことは知っていたが、王子が百済に帰るまでの事と思つて寛大に見ていた。それに、姫には許嫁がいる。

「娶つていただくのはありますが、娘には許嫁がいるのでお断りします。それに娘が何と言うか」

「磐耶姫さまは、わたしから言うのも何ですが、わたしの妻になることを望まれているようです」

「それはうすうす感じていた。しかし、挙式を三か月後に控えておる」

「差し出がましいようですが、磐耶姫さまは葛城氏の嫡男様の許嫁だとうかがっております。失礼ですが、葛城氏と手を組むのが賢明か、百済と手を組むのが賢明かを秤にかけていただきたい。わ

たしは、将来百済の王になる身分です」

太媛夫人が反対した。

「たとえ娘が百済王妃になろうとも、大事な娘を異国に嫁がせるのは娘が可哀そうです。隣国であっても風俗や習慣、言葉も人も違います。食べ物だって気候だって違うでしょう。そのようなところで嫁がせるわけにはまいりません」

「分かりました。一度磐耶姫さまとお話ししていただければ幸いです。わたしは父王を説得して四か月以内に磐耶姫さまを迎えに来るつもりです。無理にとは申しませんが、四か月間だけ猶予をいただきますとう存じます」

「そのようなことは約束できない」

鬼神野氏はきっぱり断った。

王子が部屋を出た後、鬼神野氏は磐耶姫を呼んで姫の気持ちを問いただすと、「王子さまと別れるくらいなら死にます」とまで言った。

鬼神野氏はそこまで思い詰めているとは思っていなかったが、王子が百済に帰れば、その内に熱が冷めるだろうと思った。しかし、王子の言った「秤にかけてください」という言葉が気になった。王子を送り返すだけで百済との関係は親密になることは間違いないが、さらに百済と交易を盛んにするには百済の王子に娘を嫁がせるのが最上の策である。

太媛夫人は、別れるくらいなら死にます、と言う言葉を重く受け止めた。そんなにあしく想うの

ならば、王子と一緒にしてやることは娘の幸せになるかも知れない。王子はしっかりと知っているし、凛々しい好男子である。それに比べて葛城氏の嫡男は四十歳近いし病弱である。もし百済王子に嫁ぐとしたら、召使いを何人かお供に付けさせればいいのではないか。

翌日、王子が出立する時間となった。鬼神野氏は王子を無事に百済の都まで送り届けるといふ名目で、有能な使用人をお供に付けた。彼の役割は百済の軍事的、経済的情勢、また王子が本当に百済王の嫡男であるかを調べることであった。場合によっては、葛城氏との婚約は破談にしてもよいと思うようになっていた。

聖明王子は玄関で挨拶をしたが、見送りの人の中に磐耶姫の姿が見えなかった。ふと二階を見上げると窓に磐耶姫の姿が見えた。その手にはしっかりと百索縷が握られている。王子は紫大袖袍の袖からかんざしを磐耶姫に見えるように取り出し、すぐ袖に戻した。

王子が乗った帆船には乗組員の他に王子の警護役として二十人が乗り、百済王への土産に翡翠の勾玉、麻布、真珠等が積まれていた。

船は黄海から錦江（忠清南道）の河口に入り、王子達は二隻の舟に乗り換え、錦江をさかのぼり、扶余を通過して、百済の都、熊津に着いた。

船着場から熊津城までの沿道には、馬に乗った王子をひと目見ようと住民が並んでいた。王子が倭国を出立したことは既に武寧王に連絡が入っていた。

「王子様、万歳！」

「お帰りなさい！」

「よくぞご無事で！」

熱狂する住民の歓声が響き渡った。

城門の前には武寧王、王妃、宰相、將軍、高官達が待っていた。王子は馬を降りると、

「父上、ただ今戻りました。ご心配をおかけしました」

「よくぞ戻った」

王妃は王子を見るなり、言葉を失い、涙が流れるのをこらえて、ただ王子の手をしっかりと握りしめるだけであった。

翌日は王子帰還祝賀会が盛大に執り行われた。百済の酒を飲み、歌を聞き、舞いを見ながら王子は百済に戻ったことを実感した。

三日後、王子は父王と王妃に拜謁した。

「どうじゃ、長旅の疲れは取れたか」

「はい」

「それは良かった。随分と心配したぞ。戻って来てくれなかったら、後継者を新たに決めなければならなかった」

王妃が言った。

「わたしは仏様にお前が無事であるように、毎日祈っていたのだよ。願いがかなって、こんなうれ

しいことはありません」

「ところで、聖明、折入って話があるのだが」

武寧王が改まって言った。

「他でもないが、お前の婚礼のことじゃ。お前の安否が分からず、立ち消えになっておったのだが、実は、新羅の王女とお前の婚儀の話が進んでいるのじゃ」

王妃が後を続けた。

「王女は十七歳で、見目麗しき才媛と聞いております。このような良い話はまたとありません」

「待ってください。実は、私には将来を約束した人がおります。今日はそのことをお話しに参りました」

王も妃も驚いた。妃が尋ねた。

「して、その女子おなは誰じや。まさか倭国の女人にょにんではないでしょうね」

「いえ、倭国でお世話になった人の娘です」

「お世話になった人？」

「倭国、九州の鬼神野という豪商です。倭国でも指折りの商いをしており、この国や琉球とも交易をしております。使用人には百済人も何人かいます」

王が声を荒げた。

「その、どこの馬の骨ともわからないような男の娘を嫁にするというのか。愚かしいことを言うで

はない。そもそも、お前は五百年続く百済王国の王子であるぞ。粗野な倭国の豪族の田舎娘などと結婚しようなど、朕は許さない」

「豪族ではありませんが、大和の天皇と繋がりがありません」

「繋がりがあろうが無かるうが、豪族には変わりが無い。お前が嫁を取るのには王族の娘と決まっておる。卑しき田舎娘を娶るなど、ご先祖に申し開きが出来ない。王家には王家のしきたりがある。その娘のことは諦めよ」

「しかし、結婚するのは私です」

王子は抗議したが無駄であった。磐耶姫の声が聞こえてきた。

——うれしい。必ず迎えに来てくださいね。

三ヶ月近く月日は流れ、九州、美郷村では磐耶姫と葛城氏の嫡男、辰己麻呂たつがまろとの婚礼の準備が着々とすすんでいた。磐耶姫のところには、聖明王子から何の便りもなかった。

わたしのことを忘れてしまったのかしら……。そんなはずはない。固く約束したのだから……。

磐耶姫はどうしようもなかった。

婚礼の七日前になり、辰己麻呂は婚礼前の最後の挨拶にきた。この日から婚礼日まで二人は、慣例として会うことが禁じられていた。

鬼神野氏夫妻の隣に磐耶姫がすわり、その反対側に葛城氏夫妻と辰己麻呂が座した。親同士は茶

を飲みながら親しく歓談した。磐耶姫は辰己麻呂の顔を見るのも嫌であった。

「辰己麻呂どの、ご病気は回復されたと聞いておりますが」

鬼神野氏が尋ねた。

「はい、お陰様で、今ではすっかり元気になりました。ご心配をおかけしまして誠に——」

そこまで言ううと辰己麻呂の顔が急に険しくなり、激しく咳きこむと、口から血を吐きだした。血は辰己麻呂の衣裳を赤く染め、床に飛び散った。そのまま辰己麻呂はうずくまり、倒れた。

葛城氏は息子が肺を患っていることをひた隠しにして、婚儀を推し進めようとしていた。

婚儀は取りやめとなった。

磐耶姫は取りやめになったことを喜んだが、聖明王子と連絡のとり様がなく、その後の毎日を悶々と過ごした。

百済でも変化があった。新羅の方から一方的に聖明王子との婚礼の約束を反故にしてきた。新羅の王女が回復見込みのない重病になったという理由であった。

武寧王は間諜を新羅に送り込み、真偽のほどを調べさせた。二十日余り過ぎた頃、間諜が王に報告した。

「王女の病気は偽りです」

「なぜ見え透いた嘘をついていたのだろう」

「新羅は高句麗と親交を深めようとしています。近い将来、高句麗と手を組んで百済を攻め、この

国を分割統治しようとしているようです。即ち、百済の北半分は高句麗が支配し、南半分は新羅の領土にしようと企んでいる模様です」

「それは由々しき問題だ。いつ新羅は軍事行動に出るのだろうか」

「そこまでは煮詰まっていないようです。攻めてくるのは来年かも知れませんが、三年後かもしれない」

武寧王は対策を講じなければならなくなった。高句麗と新羅の挟み撃ちになってしまふ。百済を護るためには、遠い魏の国より、隣の倭国と親交を深め、いざという時に援軍を頼むしかないと考えた。倭国と親交を深めるには……。

聖明王子の言葉を思い出した。王子が娶りたいと言う娘の父親は倭国の皇室と繋がりと繋がると言っていた。

武寧王は聖明王子を呼んだ。

「新羅から一方的に縁談を破棄してきた。新羅は高句麗と軍事同盟を結び、我が国に攻めてくるという情報が入った」

「では、我が国は倭国と同盟を結び、対抗しなくては」

「その通りじゃ、で、お前が言っていた豪商は皇室と繋がっているというのは誠か」

「そのように聞いております」

「もし繋がっておるのならば、その娘との婚姻を許そう。間諜を倭国に行かせて調べさせる」

「では、私の想いが叶うかもしれないのですね」

「まだ、決まったわけではない」

その夜、王子は月を見ながら笛を吹いた。あの「月よ、高く昇っておくれ」の曲である。調べが満月に届き、跳ね返って九州の美郷村に届けとばかり、熱い想いを込めて吹いた。

その夜、磐耶姫も月を眺めて倭琴を弾いた。琴の音色が海を渡って百済の王子に届くようにと、恋慕の情をこめて琴をかき鳴らした。

一ヶ月後、百済の間諜は美郷村に潜入し、鬼神野氏の家柄を調べると、先祖は皇族であることが分かった。また、磐耶姫の縁談が破談になり、磐耶姫がまだ嫁いでいないことも分かった。

間諜の報告を聞いて、武寧王は王子が鬼神野氏の娘と結婚することを許した。早速、百済勅使が鬼神野氏の下に派遣され、王の意向が鬼神野氏に伝えられた。鬼神野氏も娘が王子と結婚することに同意した。

聖明王子が美郷村を出立して五カ月経っていた。王子は磐耶姫と婚礼の儀を挙げるため倭国の美郷村に向かった。二隻の百済船には百済の高官、従者、歌師、舞師、楽師、料理人、召使い等、合計百余名が乗っていた。

三日後、結婚の儀式が美郷村神門神社みかどで厳かに挙行された。式場の中央に大礼床膳てれさんが置かれ、その上に松と竹、赤と青の布で包んだ雁の木像、赤と青のろうそく、なつめと栗が載せられた。また祭壇には百済王から贈られた「唐花六花鏡」とうかろっかきょう、「海獸葡萄鏡」かいじゅうぶどうきょう、「三角縁神獸鏡」さんかくえんしんじゅうきょうなどの銅鏡八面が飾ら

れた。聖明王子と磐耶姫は晴れて夫婦めおとの契りを結んだ。

披露宴が開かれると、百済の歌と舞いに引き続き、倭国側からは二頭の大蛇おとが舞う若宮神楽が披露され、百済と倭国の料理が出された。賑やかな雰囲気の中で、百済人も美郷村の村人も王子と磐耶姫の結婚を大いに祝った。

十日後、いよいよ磐耶姫が聖明王子の妻として出立する日が来た。鬼神野氏の屋敷から耳川の船着場までの沿道には美郷村の村人が大勢並んで磐耶姫を見送った。

船着場まで来るといよいよ父母との別れである。磐耶姫は挨拶をした。

「父上、母上、お世話になりました……。行って参ります」

鬼神野氏は娘の目を見たが、この場で何と言って良いのか戸惑った。ただ娘の両手をしっかりと握り、王子に向かって言った。

「よろしく頼みます」

王子は「はい」と言って大きくうなずいた。

次に磐耶姫は母の手を取った。今生の別れである。太媛夫人は涙をこらえて娘を強く抱きしめた。互いに別れを惜しむ中、磐耶姫は王子に手を引かれて舟に乗った。磐耶姫に付き従う侍女八人も別の舟に乗り込んだ。百済の高官、従者、歌舞団たちも次々に船着場に着く舟に乗った。

十三隻の舟が耳川を下っていくと鬼神野氏と太媛夫人はいつまでも手を振って見送った。磐耶姫も次第に霞んでいく父母の方に向かって手を振り続けた。

舟が耳川から日向沖に出ると、一行は二隻の百済船に乗り移り、一路、百済に向かった。

六日後の早朝、百済の錦江の河口が見えてきた。見ると、河口付近からおびただしい数の舟が、のぼりをあげて王子の船に近づいて来る。どの幟にも「聖明王子万歳」「磐耶王女万歳」と書いてある。

祝賀の鉦や太鼓の音が聞こえてきた。

澄み切った青空の下、朝日が舳先で寄り添う王子と王女の顔を照らしていた。

佳作

「サラバ、いつかゆく末で」

七ツ樹七香



紅の絹地に金糸で刺繍のある美しい装束をまとつて、フクチは神門の館に座している。宴の夜だ。

「フクチ様、どうぞ」

空けきれない素焼きの盃に、下女が酒を継ぎ足そうとするのを押しとどめた。

「いや、もういらぬ」

彼女は深く頭を垂れて、音もなくフクチの傍から下がった。

すこしだけ含んだ酒が、腹の底を焼いている。

皆それぞれに楽しんでた。

甘く喉を焼くにこり酒が絶え間なく男衆の酒杯にそそがれ、しまいには調子をはずして歌う者まで現れる。笹ひと枝を手にした舞手を囁しながら、酔った中年男が自分もと舞に加わり、背を丸めた老人は合いの手をいれて場を盛り上げる。

並んだともしびが照らし出す影を眺めつつ、フクチは退屈をのどの奥でかみころした。じりじりと焼けるような焦りが手に汗をにじませる。

明日、死ぬかもしれないのに。

苛立つ。見知らぬ舞に、なじみのない音楽。

車座に集った人々の盛り上がりから目を離し、フクチの隣りで片膝を立てて座るテイカを見やる。

彼は――、フクチの父禎嘉王は、おだやかな面持ちで静かに酒杯を傾けていた。

威厳のある佇まいだった。フクチと同じく豪華な鳥の刺繍のある装束を身にまとい、正装なのか立派な金細工の冠をつけている。

土汚れのついた服でくつろいでいる人も多いというのに、不釣り合いな格好だ。けれど、誰も彼を咎めるものはいない。この村の人間にとって、テイカはそうあってもなんら違和感のない人間なのだ。

屋敷に出入りする者に、ひとたびテイカのことを尋ねれば誰の口にもほめそやす言葉があふれた。『薬草や調査にも、医者が肝をつぶすぐらいおくわしくて！ テイカ様がいらっしゃったんで、長いこと病気だったうちの妻も助かったんです』

『いやいや、テイカ様といったら田畑のこともおくわしい。畑上手の若杉のじい様だって舌を巻く。下手の水路だってあつというまに作っちまって、うちの麦の収穫が倍になったんですからね。神様みたいな方ですよ』

『テイカ様はお天気だって言い当てなさる！ お天道様が味方ですからね、なあに戦にだって負けやしませんって』

明日は戦いだとテイカがいい、皆ともに戦うと氣勢を上げた。

神門に隠れ住む禎嘉王を討たんと、朝廷の軍はもうすぐそこまで迫っているのだという。彼の息子「福智王」と呼ばれる自分も、あるいはそこで死ぬのかもしれないなかった。

この見知らぬ父、縁なき他人と、親子として。

皆が顔を綻ばせてほめちぎる男は——。
フクチにとっては、ただの嘘つきだ。

＋＋＋

「フクチ、フクチよ。わかるか、父がわかるか？ 体は痛むか？」

少年が目覚めたとき、そばにいたのは悲壮な顔の男がひとりだった。結って油で撫でつけた黒髪に、目鼻立ちのくつきりとした顔立ち。口周りのヒゲは威厳を感じさせる。壮年の美男にみえた。

「あんた、ダレだ」

男の顔に見覚えのあるような気がしたが、はっきりとはわからない。少年は自分が薄い敷布団の上に寝かされ、得体の知れない毛皮の掛布をかけられているのに気づくと叫んで起き上がったが、身体中に走った痛みにうめきをあげて猫背になった。

「フクチ、ずいぶん長く眠っていた。ケガもある。急に動くでない」

そばにいた男はゆっくりと言い、白い寝間着を着せられた彼の背にそっと手を添えて横たわらせた。痛みゆえにされるがままになった少年は、男の手の思わぬやさしさに、わずかに体の緊張を緩める。少し匂う毛皮の上掛けを、そっとかぶせる男の手つきは丁寧だ。

真上に見える男の顔をじっと見る。

フクチ、と恐らくは名前を呼んでいる人物の顔に、どこもない懐かしさを感じるのには確かだった。名の響きにも親しみがある。だが、それが本当に自分のものかという確信が持てない。

「我はテイカ、そなたの父ぞ」

「父……」

壮年の男がうったえるように言葉は、少年には遠く聞こえる。

「わからぬのか……、無理もない。そなたは死の淵にあつたがゆえ」

肩を落とし、沈痛な面持ちでテイカという中年男は片手で顔を覆った。

「俺の、父親なんですか。本当に？」

「父が我が子というを疑うはなにゆえか。そなたは、かつて半島に旗たてし百済王が子孫にして、禎嘉王の息子「福智王」ぞ。来し方を見失おうと、それは変わらぬ」

「王、王様？」

少年が不安げに尋ねると、テイカは色の薄い目を細めて深く息をついた。

「今や名ばかり。国を失い、血だけが生きる流浪の王族よ。フクチ、そなたは我が子。何もわからずとも、父を信じておればよい。皆を呼ぼう。そなたの加減が気になってたまらぬのだ」

スツと立ち上がったテイカが、明かり取りに半分開けていた木戸を勢いよく開くと、そのうしろには十人ほどの人間がひしめくようにして隠れていた。あざやかな着物をまとう者は少なく、生成色の簡素な装束の者がほとんどだ。

「わあっ、テイカ様。申し訳ございません」

「フクチは目覚めた。さあれど、病を得てものがわからぬ……。御仏の導きによりて我が手に戻りしは重畳なれど、当分は養生させねばならぬ」

平伏した人々はテイカの言葉にめいめい顔を見合わせる。するとパツと顔を輝かせて若い男が立ち上がった。汚れた白い衣は簡単な貫頭衣で、腰のあたりで荒縄をぎゅつと縛っていた。着物の裾からにゅつと突き出た浅黒い素足は痩せている。あまり身分の高い者ではないのだろう。

「鹿の肉がごぞいます！ イノシシも！ クマも乾いたものならござりますれば！」

「なんの、カモがよかるうものを。それとも、滋養にいいという、ツルをとって参りましょうか」
「ふ、ふ、太い……マ、マスも上がっております」

皆がフクチと呼ばれる少年にと、口々にごちそうを提案する。

ハハ、と大口を開けてテイカは一笑した。

「病人なるぞ。精がつきすぎるわ。粥をもたぬか、粥を！ 五穀を混ぜて腹にぬくうしみわたるのを早う！」

パンパンと手を叩くと、みな散り散りになって我先にと駆けていく。純朴な反応だった。フクチと呼ばれた少年は、それをあつけにとられながら見守り、目の前の男を信じるしかないことを己に言い聞かせた。

自分が何者かも、今の自分にはわからない。

数日を過ごし、一日二食の粥が味気なくなると、塩をふった川魚が出されるようになった。あつあつと湯気をたてるこの魚は例えようもなく美味しく、ときにガツガツと三尾も骨にして、テイカを喜ばせた。

「はよう体を治さねばな、もうよいか。強飯こわいもあるぞ、よく食べよ」

添えられた根菜と塩だけで仕立てた簡単な汁物は、苦味も感じたが滋味深く、あたたかいものが体にしみる感覚は悪くない。時に出される丁寧な血抜きした鳥や獣の肉も、塩だけの単純な味ではあつたが、うま味が濃かった。

「さあ、フクチ様。今日はカモを味噌で焼きました」

「うまい……！」

食事を平らげるフクチに、テイカは目を細める。

「そうか、そなたはカモの肉を好いておったな」

焼いたカモ肉を噛むと、肉の外側についていた脂身から、甘い脂がじゅっと溢れ出した。回復しなかった体にはまだ重たい食べ物にも思われたが、いつまでも噛んでいたいほどに体の求めていた味だった。疲弊しきった体が、飢えていたことをフクチは痛いほどに思い知る。

しかし、自分もかつてはこの地で暮らしていたはずなのに、食べつけないものを食べている違和感が、いつまでもフクチの奥底には凝っていた。

テイカと息子のフクチは、普段は離れて暮らしていたという。年に一度父に会うためだけに、フクチが五日も六日もかかる道のりを越え神門を訪れ、そのたびに大宴会が催されていたことも聞かされた。

「フクチっていうのは、ママでいい奴だったんだろうな……」

少年は他人事のように眩いて、ずいぶん回復した体を端近に出し、すすけた柱に寄りかかって日なたの光を浴びていた。肌寒く感じる朝晩とは裏腹に、昼間はぼかぼかと心地のよい陽気が多い。

ぼんやりとしていたフクチを見つけ、通りかかった舎人が顔を輝かせて近寄って来た。

「あれ、フクチ様！ 今日はお加減よろしいので？ 東の軍との戦いの最中、小丸川おまるがわの流れに飲まれたと聞き、我らみな肝を冷やしました。あの時は大雨で水も多くて……」

男の口にした川の名前に覚えがある気がして聞き返す。

「小丸川？」

「そうです。テイカ様が見つけれなければ今頃……、フクチ様のいらっしやるところがパアツと光ったんだそうですよ。まこと御仏の加護の篤きこと。東の軍も無事に打ち払えましたし、なによりでした」

誰も彼もフクチに話しかける顔はにこやかで、随分慕われていたのかとも思ったが、次第にそれ

は父と名乗るテイカゆえのこととわかつてきた。内乱で都を追われた禎嘉王は、船旅の末嵐に遭い、流れ着いてこの地に暮らすことになったという。しかし平穩無事とは言えず、今も王の生存を知った朝廷の兵がテイカ一族の命を狙っていることを男はつけ加えた。

不安げなフクチを見て男は慌てた。

「申し訳ありません。病身のフクチ様にご心配を……。テイカ様は武勇にも優れたお方です。神門のどん太郎さんだってお味方ですからね。ちよつとやさつとじゃ負けやしませんよ」

博学で、医療・土木・氣象の学問にも通じていると、村人が我が事のように自慢げに話すのをフクチは何度も耳にした。

小丸川、禎嘉王、福智王。神門、どん太郎――。

突然の強い頭痛に、フクチは頭を抱えて身を縮めた。機嫌よくあれこれと話していた下男は、ぎよつとして少年を覗き込む。

「フクチ様、どうなさいました！ 水を持ってきましようか。薬師さまを？」

「いや、いい」

押しとどめる声も聞かず近くの井戸に走った男は、木じやくしに冷たい水を汲んですぐさま戻ってきた。

手渡された柄杓の水面に、フクチの顔が映りこむ。

憑かれたようにじつと見入る少年を訝しみ、男は水を飲むよう促した。言われるままに口をつけ

ると冷たさがのどにしみわたる。水の甘みがこころよくて、思わず喉をならして飲み干した。

「無理しちゃいけませんよ。テイカ様が悲しみます」

口元をぬぐいつつ男に生返事をして、周りの者とまるで違う髪型をした自分のことを、フクチはひとしきり考えた。

思えばおかしなことばかりだ。

食事のしかたや、用の足し方まで馴染まない。近くの川でといわれたときには面食らった。慣れてしまうものではあったが、日常の動作までそっくり抜け落ちてしまうとは、頭を打ったにしてもあんまりのような気がした。

少年の抱く疑念をよそに、テイカは「王」というほどの気位の高さもなく、できうる限りフクチのそばにいて、色々を教えていった。萎えた足を戻すための毎日の運動さえ率先してテイカ自身がつきあうのだ。果たしてそれが王のすることかと不審にさえ思うフクチと、村人も思いを同じくしたらしい。

「我らがお手伝いしますゆえ、テイカさまはゆるりと。尊い方のなさることとも思えません。矢傷もまだ痛まれましたように」

舍人たちが王を押しとどめようとすると、怪訝な顔をしてテイカが言った。

「今のフクチは赤子も同じぞ。妻シギノも亡き今、我がやるほかあるまいよ。政まつりごとやそなたらをないがしろにはせぬゆえ、目をつぶるがよい」

「そうは言われましても」

「そなたら民草を見ておれば、我も自らの手で子を育てることが、楽しきことのように思えてな」
テイカの鷹揚な物言いに、幾分鼻白んで男が答えた。

「お戯れですな。我らには楽しむ余裕などなきものを」

「そうか、すまぬ。なきものをねだる、我も幼い。之しぎの伎野も時にそれを笑ったものよ」

気を悪くした風の舎人をなだめながら、テイカは苦笑をまぜて、フクチの背を軽くポンポンと叩いた。

「シギノって誰のことですか？」

「フクチ、之伎野はそなたが母よ。覚えておれ、うつくしき妻、やさしき母であったのだ」

テイカは顎を引き、さみしげにぽつりとこぼした。既に亡くなっているのだと悟るには十分の声音だった。

やがて、フクチの衰えた足腰も随分回復して、足元をふわつかせていた不快なめまいも治まってきた。胸の奥の違和感だけは、変わらず残ってはいたが――。

屋敷の庭には、ちいさな池がある。

足慣らしに外を歩いてたフクチが、ふとしやがんで水鏡を覗き込むとそそけだつような怖気に襲われた。不快だが何かの啓示のようにも思われ、そつと水面に指先を伸ばした。波紋が広がる。

そのゆらぎの中に、見知らぬ風景が鮮やかに浮かび上がって、フクチは叫びをあげて尻餅をついた。

「なんだ、あれ——！」

水鏡には、老若男女が行列して練り歩く様が写っていた。彼らが横切る家屋はこの辺りにはない形をしていて、服装も見慣れないものばかりだった。当然、そんな行列は今、フクチの周りを歩いてなどいない。そこに写ったのは、ここにはない景色にほかならなかった。

「南郷……いまの、南郷だよな」

不思議なほどはつきりとわかった。

今の光景は、かつて自分の記憶として存在した。

どくどくと、うるさいほどに心臓が脈打つ。

「フクチ様、おかげんはいかがですか？」

「フクチさまっ！ よい魚が手にはいりましたゆえ」

誰もがやさしさかった。父だという、あの禎嘉王も。

皆がござって少年を福智王だと言ひ、集ひ、扱ひ。

そんなはずはない。こんなはずはない。

だって、自分は——。

おののく胸を押し隠して、もう一度池の水面を覗き込んでも、あの時と同じ風景は映らなかった。指先で触れても同じことだ。

(おかしいんだ。俺が、ここにいることは、おかしいんだ)

胸の中で、ぬめぬめとした蛇が絡み合い悶えるような、気味の悪さが繰り返して押し寄せる。眉を寄せ、考え込むフクチを前に、機嫌を損なったのかと遠巻きに自分を見守る人々さえ、鬱陶しく感じてならなかった。

そんな彼を見かねて、禎嘉王が声をかけたのは、ある晴れた朝のことだった。

「フクチよ、馬にのってみぬか？ 今日是一日天気もよい」

「馬、ですか」

「百済式の馬の扱いがフクチは得意であった。いつも手足のごとくに馬をあやつる。気晴らしになるやもしれぬゆえ」

テイカは庭に引き出した月毛の馬に鞍をつけると、怪訝なフクチに二、三指南して彼を馬に跨らせた。

「クダラ？」

「クダラよ、濁らぬ」

あっさり訂正して、テイカは馬上のフクチに目を細めた。

「凜々しいな。騎馬の一軍を率いさせてみたいものよ」

パチンと、目の前で手を叩かれような感覚があった。

百濟くだら、古い国の名前のはずだ。

「昔の、国の名前……ですよね。父、上」

馴染まない呼び名を口にする、途端にテイカは相好を崩した。

「そうだ……！ 名の響きはそなたの中にも残っておるのか。我らの祖の建てし国だ。国難を逃れて我が父とともにこの国に来たのはもう随分前になる。そなたは之伎野の腹にいた。お前にも一度、祖国の土を踏ませたかった」

父王の喜びを間近に、フクチは顔を伏せる。

テイカに手ほどきをうけると、フクチの乗馬は驚くほどに上達した。

「馬の上手は、さすが我が子よ」

誇らしげに称えられると悪い気はしない。そうすると、ふと自分の出自がテイカという通りのものではないかという、ぐずぐずとした思いも湧いた。

久しぶりの運動に疲れ果てて座り込んだフクチを、テイカは穏やかな顔で眺めて言った。

「やはりな、体が萎えておるだけだ。大事ない。いつかはそなたから失われたものも戻ろう。……馬だけでも使えるのなら、良い」

「どういうこと？」

「そなたは、体を労わればよい」

不穏な言葉に続きが欲しくてたちあがろうとすると、遠くの方から明るい声がかかった。

「フクチさまあ、シノセでございますっ！ お加減はいかがにございますか！ 戦いの最中、行方知れずと聞いてっ、シノセは心配で心配でっ！ サラバアと申し上げたのに、もうお会いできないかと」

見覚えのない女は、裾を抑えて小走りに駆け寄ると、深く膝を折り頭を垂れて礼を示した。

自分知る「さらば」とは意味が違う気がして、近くにいた古参の舎人に尋ねると、「生きて逢おう」という百済の言葉と知らされた。なるほど、そういう約束だったのだろう。

「義父上様より便りをいただきました。病にかかられた旨は承知しております。おわかりにならぬやもですが……。シノセは、あなたさまの妻です」

シノセと名乗った女は、かわいそうなほど痩せていたが、その立ち居振る舞いは凛として美しかった。潤みがちな大きな瞳にはくつきりとした意志がうかび、フクチのことを——そのすみきった眼差しで見定めようしているかのようだった。

「敵近しと噂に聞いて、いてもたってもいられず。シノセは、戦いの前にひとめお会いしたかったのです。思うよりお元氣そうで本当によかった。今宵はフクチさまのおそばに」

シノセはたおやかに微笑んだ。

彼女は住まいだという比木の様子をつまびらかに語り、フクチが全快して帰る日を待ち遠しいと目を閉じた。その夜、フクチはシノセと過ごし、自分の知らぬ夜があったことを知った。

「ほんとうに、そっくりそのまま。わたくしのフクチ様」

翌朝めざめると、シノセはフクチの頬を包んで快活に笑った。

「……………」

「あなた様は、わたくしのフクチ様。義父上様もそのようにおっしゃいました。それでようござい
ます。すべては御仏の導き」

シノセはほほえみのまま、そっとフクチの頬に手を添えた。

「あら……お顔がくもっておいでです。お元気でいらっしやらねば、お別れに心残ります。今のお
顔、ご覧になって？ わたくし、フクチ様のお笑いになった顔が好きなんです」

シノセは枕元に置いていた箱から鏡を取り出し、光る面をそっとフクチに向けた。

「この鏡、覚えておいでですか？ 私に贈り物としてくださった」

シノセが手にしていたのは、六枚の花びらをかたどったような愛らしい花の形の鏡だった。彼女
の華奢な手に収まるほどの鏡は、朝の明かりを細く入れただけ部屋の中であるのに、驚くほどはっ
きりとフクチの顔を映し出した。

いや、そこに写ったのはフクチではなかった。

鮮明に映し出されているのは、「さとみやかくし里宮吹史」。

ただの高校生の姿だった。ぐらりと一瞬意識が遠のき、我に帰ると吹史はシノセの手から奪い取
るようして鏡を覗き込む。自分が何者であるかを知った時、彼の脳裏には怒涛のように記憶が溢
れ出した。

「ほら、そうだ。違う、違うんだ……」

「フクチ、さま？」

不安げなシノセになんでもないと告げ、吹史はふらりと立ち上がり静かに部屋を出た。

自分が、福智王ではないと知った吹史に、はじめに湧いたのは恐れだった。

南郷に住まう祖父の家を訪れるたび、幾度も聞かされた遠い昔の物語。禎嘉王、福智王の親子の織りなす百済の王族の伝説。

自分が今辿る日々はそれになぞらえたもののように思えてしかたがない。荒唐無稽、けれど真実だ。これが夢だなんて悠長なことは言っていられない。吹史の記憶と伝わる歴史が確かなら、今は飛鳥時代。現実からかけ離れてすぎてゾツとした。

次に湧いたのは怒りだった。

あの善人ぶった禎嘉王は、吹史をフクチと呼びながらあざむき続けていたのだ。

福智王はなんらかの戦いの最中に川に流されたのだという。そして、その数日後に禎嘉王が自分を見つけた。あの大きな手で、自分を掴み、引き上げ、そして吹史を福智王に仕立て上げた！

吹史の祖父の住む、宮崎県美郷町南郷。

あの日、法事のために訪れていた吹史は近くの神門神社を訪れ、ふらりと西の正倉院に足を運んだ。奈良の正倉院を模したという、立派な建物の中、たまたま展示替えに居合わせた吹史が、係員に促されるのぞき込んだ、花の形をした銅鏡。

「君は歴史が好きなんですか。感心ですね。ほら見て。これも、みがけばこれも立派に顔を写すんですよ。今はサビついて全然だけど」

ガラスケースを開けていた白手袋の職員が熱心に説明をよこし、普段は背面の模様ばかりを見せている鏡を気軽な様子で裏返す。

刹那だった。

古い鏡はかつての輝きを取り戻し少年の顔をくつきりと——、そして水面を揺らがせるように壮年の男の顔をも映し出した。

今にして思えば誰だかわかる。あれは、禎嘉王だ。

「うわああっ……！」

「わ、おい、どうしたキミっ！」

瞬きの間に錆びて輝きをなくした鏡から、逃げるように吹史は西の正倉院をあとにした。頭がおかしくなったと思った。

ひどい頭痛とともに、悲しみと怨嗟を混ぜた誰かを呼ぼう声が、絶え間なく聞こえ始めたのだ。

どこだ、どこにいる。

我が子よ、——よ。

声を探すのは自分ではないのかもしれない。けれどたまらなく恐ろしかった。胸を掻き回されるような不快感がこみ上げる。必死に祖父の家に戻ろうとしたが、鉛のような両脚はすでに言うことを聞かなかつた。ついには悪心のまま橋の欄干から身を乗り出し、吹史は、小丸川に落ちた。驚いたことに浅い川底に体を打ち付けられることもなく、彼が次に見たのは水面だった。

そして誰かが、かき寄せるように吹史の腕をつかみ――。

うたかたの記憶がはつきりと脳裏に絵を結ぶ。

誰かではない、あれはテイカだったのだ。

湧き踊るような記憶の奔流と戦い果てて、吹史に最後に残ったのは悲しみだった。

記憶を取り戻したところでどうしようもなかった。

戦いが近いとシノセは言った。前に聞いた朝廷の兵のことだろう。今から起こる戦いは、人間同士が命を取り合う。尋問も裁判もない。打ち合って、斬り合って、弱いか運の悪い方が死ぬ。

ただの高校生の吹史にできることなど何ほどもない。

あるいはあのテイカ王は、吹史を身代わりに差し出し、命乞いをしようと考えたのかもしれない。息子でもない他人などなにほどのことか。他人に成り替わったばかりか、自分の命さえ危うい。

信じていたのに、信じたかったのに。

「ご武運をお祈りしております。サラバア、フクチ様」

黙りこくった吹史の葛藤など知らず、深く頭を下げたシノセは、別れの言葉を告げて去った。シ

ノセたちは宵闇に紛れて神門を立ち、険しい山を越えてまた比木に戻るのでという。

敵襲が知らされたのは、それからすぐのことだった。

長旅を経た朝廷の軍が、小丸川の河口に陣を張ったと知らせが届いた。

夜を待つて始まった宴は出陣を祝う盛大なものだった。

吹史は豪華な服を与えられ、宴席で懐に隠した花の形の鏡を遊びながら、ひとり時を待っている。シノセに頼んで、この鏡は残してもらった。ひととき吹史のあるべき姿を映し出した手鏡が、くじけそうな気持ちの守りになるような気がしたからだ。

百済の王族親子として舞や踊りを見守りながら、偽りの父に何をつきつけるべきかと吹史は考え続けていた。

夜更け。

踏みしめる足先に怖気と怒りを滲ませて。

吹史は、父王の寝所を訪ねた。

「フクチ、どうした」

「あんたは嘘つきだ」

二人だけになりたいという望みを疑うことなく叶えた禎嘉王は、常と変わらなかった。さらびや

かだった正装をほどこき、気軽な格好でいる。部屋の奥の寝台に腰かけたまま、吹史をじっと見つめていた。かすかな明かりに浮かぶのは穏やかな貌だ。

「フクチじゃない。俺はあんたの息子、福智王なんかじゃない」

腹の底で、やりきれない思いがじくじくと膿んでいる。赤むけた火傷のようにひりついて不愉快でたまらなかつた。

テイカの顔が怪訝にくもつた。

「俺は、里宮吹史だ。あんたの子どもじゃない」

「形が変わったことを誰かが？ そなたは我が小丸川の流れよりすくい上げた。水底に沈み哀れな有様だったが……、そなたは生きていた。それでよいではないか。我が手に戻りしフクチは幾分形を違えしが、なにほどのことか。かつてを思い出せずとも、顔かたちも声も変わらぬ。ひととき御仏がおそばにとどめ給いて、流浪の王を憐んでお返しくださいと信じておる。尊き御仏の導きと」

「そんなじゃない。俺なんか——」

人質にでも出す気だったんだらうと、罵ろうとして舌が喉に張り付く。

禎嘉王はじつと吹史を見ていた。いつも吹史を見守っていたあのあたたかな表情を強張らせて。

吹史には、これがどうして起こったことなのかはわからない。

ただ、自分がここよりずっとずっと未来に生きていたことは確かだった。

「福智王ではないと申すのか」

「そうだ、わかってたんだらう？」

「いや。されば……、いづくより来たりしか」

禎嘉王は静かに尋ねた。

「ここよりずっと先。あんたの知らない世界から」

「世界」

「あんたの孫とか、それよりずっと先の子孫がいるところ」

「あるいは、来世。なれば、すでに今生に残る我が眷族はこのテイカのみなのだな」

取り乱すこともなく、王と呼ばれる男は重たそうに首を垂れた。

「我が子と、信じていたかった。すまぬ」

「……俺の言うこと、信じるのか？」

「ああ、信じよう。そなたの言うことだ」

こともなげな言葉が吹史をえぐる。テイカは怒りも否定もせず、「信じる」とだけ繰り返した。

ただ吹史が目覚めた時のように静かに受け入れるだけだった。そして、言った。

「……やがて夜が明ける。戦いが始まる。今度はこれまでのようにいかぬ」

吹史は知っていた。おそらく始まるのは伊佐賀の戦いだ。禎嘉王が、福智王とともに追討軍と刃交えた激戦。言い伝えが確かなら、禎嘉王はここで死ぬ。

「もとより、そなたは逃がすつもりであった。馬をつけてある。より奥地へ逃げよ」

「あんたも、あんたもそうしたらいい。相手は軍勢だ。戦うなんて馬鹿げてる。いつかほとぼりが冷めた頃、話し合いとかっ——」

その瞬間だった。まるで携帯端末のバイブレーションのように懐に納めていた鏡が震えた。動揺した吹史が鏡を取り落とすと、輝く面を上にして金属鏡がカランと音を立てた。

まるでそのときを待ち詫びていたかのように、鏡からまばゆく光が放たれはじめ。声を上げる暇もない。覚えのある寒気が、背を走りぬけていくのを吹史は感じる。

ハッとした顔のテイカは、戸惑う吹史に向けて言った。

「そなたを見つけし時の光。これも、御仏の導きであろうか」

耳鳴りがする。

「逃げるよ。あんたも、逃げたらいいんだ！」

遠くから吹史を呼ぶ声が、脳裏に響く。

「すでに我らは、果てに近きところまで落ち延びた。しばしの穏やかなる日々を謝するのみ」
禎嘉王の声が、吹史の耳に遠くなっていく。

「……生きるはむつかしき業よ」

諦観をたたえたほえみだった。

「足の運び、手の所作ひとつ。ふとこぼれたなにかが、我らの出自をはるか大和まで知らせゆく。幾度か手勢は追い払ったが、派兵はやまぬ。朝廷が我らを忘れぬ限り。なれば——」

王の瞳の奥に炎が揺らぐ。それは、覚悟の双眸だった。

吹史は、息苦しさをこらえながら、一度は父と呼んだ禎嘉王に手を伸ばす。テイカのがつしりとした手が、くずおれそうな吹史の手を掴む。あの時もこうして救い上げられた。

息が詰まる。言葉も出なくなりそうだった。

「死ぬなよ。生きてなきゃ、生きて——！」

酸欠になりそうな意識の端で、必死に吹史は言い募った。

「生きてか？」

「そだよ！」

覚悟を翻せないことなど、もう吹史にはわかっていた。

「吹史はやさしき息子よな。不思議なる縁を謝する。我は、テイカ。亡国を逃れ、日出づる国に來たりし国なき王。妻や子とともに、荒海を越えたどり着いた先に楽園を夢見たが、やがて潰えるいまや知る。はるか來世より訪れし吹史よ。そなたと過ごし日々ひととき幸福に思えた。フクチに子はなかつたが……、その面差し我にも似て、亡き妻シギノの面影も明らか。あるいは——」

「テイカ様！ 関の声が！ お早く！ お早く！」

頭の奥から響く音が強くなる。

テイカを呼ぶ誰かの声は、もう吹史には聞こえない。この地に來た時と同じように胸の中を搔き回されるような不快な感觸で、こみ上げる吐き気が止まらなかつた。

吹史の輪郭はぼやけて、透明になってゆく。テイカが笑う。

「サラバア」

いやだ、と言いたかった。もう目もうつすらとしか見えない。まだ言い足りないことがあった。死なないでほしいと伝えたかった。

吹史の苦悶を見て取ったように、禎嘉王はあの穏やかな顔で言った。

「オサラバア！」

張りのある声が遠くなる。

部屋中を覆うほどに光が満ち、すぐ一転して吹史の意識は、真つ暗闇に落ちていった。落ちるというより、墜落するといったほうがふさわしい。どこまでも底のないトンネルを落ちていくかのようだった。

まぶしい。

吹史はまぶたを震わせた。

遠くから聞こえていた声がはつきりとし始める。テイカの声に似ていると思った。また、吹史を呼んでいるのか。

「吹史、おいつ、大丈夫か！ わかるか？」

目を開けると、そこには父親の顔があった。

白い部屋、生成り色のカーテンが見えた。やわらかくはないベッド。病院、だろうか。

聞き覚えを感じた声が、ドクンと記憶を脈うたせる。

目に映る父の姿にハッとした。胸の奥にたまっていた血潮を吹き出させるように、父と禎嘉王の顔がびたりと重なる。

「吹史っ！ よかった、本当によかった。体は痛まないか、気分はどうだ？」

遠く——遙か遠く七世紀。

目覚めてすぐにかけられたのもこんな心配の声色だった。

そして、別れ際に与えられた父の言葉。

——生きて、逢おう。
サラバア。

吹史は、重たい手をそっとさしのばして抱擁を求めた。

「なんだあ、おい。子どもみたいだなあ。吹史、よかった。……本当に、よかった」

子を抱きしめる父親の声が、みるみるうちにうるんでいった。

宮崎の山深い地にひっそりと今も残る百済王伝説。

禎嘉王は伊佐賀の戦いに敗れ塚の原に葬られたといい、神門神社に祀られている。人柄は伝わらないが、日向の豪族をも味方に戦った逸話や神として後年祀られたことを思えば、この地で愛され尊敬を集めた人物であったことは想像にかたくない。

その子福智王は、父の危機に馳せ参じ、伊佐賀の戦いで戦死したとも、逃れて比木の地で子孫を残したとも、伝えられている。

佳作

「また、な」

柴田瑤



個人用のスマートフォンに福田礼司の文字が浮かんだ。息子からの連絡なんて久しぶりだった。

「父さん、電話今、大丈夫？」

「礼司か、電話なんて久しぶりだな。十三時までなら問題ない」

昼休みはあと三十分はある。ゆっくり喋りたいところだが、何を話せばいいか浮かばないから、きつと十分もあれば終わってしまうのだろう。

「あのさ、正月とかはバイトとフェスで帰れないけど、成人の日あたりから一週間くらいでそっちに行こうと思う」

東京の大学に通う礼司は自慢の息子だ。片親にしてしまい、金銭的にも苦勞をかけている。しかしそんなことを気にするそぶりも見せず、のびのびと育ってくれた。

「ああ、問題ない。ということは師走祭りの時期だな、見ていくのか」

「それが目的」

「学校の課題か？」

「まあ、そんなところ。大丈夫？」

「布団用意して待っているから、気をつけておいで」

「ありがと、じゃ、切るね」

電話が切れた。やはり十分もかからなかった。名残惜しいが、男同士の会話なんてそんなものだろう。用件だけ言って、おわり。

「佐田さん、何か良いことあったんですか。顔がにやけていますよ」

デスクに戻ってきた部下から指摘された。

「まあな。今年の師走祭りはアツいなあ、って」

「何すか、それ」

師走祭りの参加者は昔よりもかなり減ってしまった。かつては若者が中心となってやっていたが、壮年、いや老年一歩手前のようなナイスミドルが今は中心だ。地方の祭りなんてそんなものだろう。俺は完全な部外者だ。妻……元妻ではあるが、彼女がこのあたり出身で俺は鹿児島出身だ。といっても親が転勤ばかりだったから明確な出身地なんていうものは無いに等しい。一番長く住んでいたのは、ここ宮崎県の次点で高知県というくらいだ。

妻と別れてからは、住み続ける理由なんて無くなるはずだった。会社近くの、もっと中心の都市部に引っ越しても良かった。けれども懐具合とその他諸々の事情により引っ越しを先延ばしにしていたらこんな年になってしまった。

もういつそ、この地に骨を埋めてしまうのも悪くはない。ダメだって地域の人に言われたら、その時は実家に戻ればいい。

なお、元妻は今、大阪にいる。向こうでバリバリ働いているらしい。月一回、生活費やら大学二年になった礼司の学費やらで話をするところがある。といっても味気ない電話ばかりで、向こうの電話の奥では別の電話が始終鳴っていたり、会話が聞こえてきたりするものだから事務連絡のみで終

わる。男同士みたいな会話だ。

成人式の翌々日、礼司は帰ってきた。前日は宮崎市内の友人の家に泊まって飲み明かしたらしい。日向市内の会社から帰る途中で礼司を駅前で拾い、帰路についた。

「父さん、久しぶり」

「元気にしてたか」

「まあね。父さんこそ」

会話はぶつぶつ途切れ、三十分もせずに家についた。

「相変わらず、この家なんだね」

「引越すのも手間だな。同じくらしいの間取りの家を探すのだって、なかなか無いんだ」

「こんなに広くなかったっていいじゃん」

「こんなに広いお蔭でお前が今、広々と泊まれるんだぞ」

「まあ、そうだけど」

言葉のキャッチボールを手慰み程度にやりあう。礼司は荷解き、俺は夕食の準備に取り掛かって
いるから視線は交差しない。

「父さん、ちゃんと自炊してるんだね」

「外食は金がかかるからな」

「東京よりも物価相当安いでしょ」

「だから入ってくるのも少ないんだよ」

「あ、それ。昨日信吾も言ってた。東京の時給ってめちゃくちゃ良いよなって」

「あの信吾君な、今……」

「宮崎市内でフリーターやってた。ミュージシャンなるって」

「そっか」

今日は二人分の調理だったから調味料の加減が慣れない。多少しよっぱくても米は多めに炊いてあるから問題ないだろう。

礼司は何も言わずに食べた。時々、つけっぱなしにしていたテレビの内容に突っ込んだり、いきなり笑いだしたりしていた。

平日は家に礼司がいるからと言って休日になるわけではない。始業時刻は平日の決まった時刻にやってくる。

「ご飯、昨日の残りとかで食べといてくれ。足りなかったら冷蔵庫のを使ってもいいし、買いに行ってもいい」

礼司は俺が出勤する時刻の少し前に起きてきた。大学生の割に早起きた。

「ん。わかった。行ってらっしゃい」

誰かに挨拶されて出るのはいつぶりだろうか。今日の夕飯はもう少し手の込んだものを作ってや

ろうと思った。

朝の挨拶、夕飯の会話くらいがいつもと違うことで、それ以外は大きく変わらないうち日常だった。礼司との会話のネタは次第に切れてきて、いつも通り、テレビに話しかけてばかりいる。たまに礼司とも話すが、二言三言で終わってしまった。お互いの時間には干渉しないのが俺の美点らしい。欠点であると元妻には言われてしまった。

今日は師走祭り最終日だ。昨日は結局仕事があつて師走祭りの見学には行けなかった。

「今日、車出して一緒に行くか？」

「いや、手間でしょ、車出すのは」

礼司は俺に気を遣ってくれる。もどかしくもあり、俺の息子らしいなとも思う。

「いや、片道三十分もかからないだろ」

「だって、父さん。平日も車で通ってるじゃん、日向市の方まで。休日くらい休んだら」

「でも……それに行くって言ったって車無いと行けないだろ」

「免許持ってるから、貸してくれればいい」

「礼司……いつ免許取ったんだ」

「去年の夏。合宿で」

まったく知らなかった。元妻との会話でもそんな話が出てきていないはずだ。

「……そう、だったんだ、な。お金は大丈夫だったのか」

「バイトをめちゃくちゃ入れて工面した」

「言ってくれば出したのに」

「いいよ、そんなの」

遠慮というより、拒絶だった。

「車、借りるけど、いい？」

「いや、保険が俺の名義のままだから貸せない、つべこべ言わずに乗って行け」

意地でも一緒に行ってやる。これくらいしないと父親と認めてくれないような気がした。

「東京で、頑張ってるんだな」

大した娯楽もない山道を車は切り裂いていく。

「別に。普通だよ」

「普通じゃ三十万を工面することはできないだろ」

「いや、二十七万だから」

「似たようなもんだろ」

「大学生の三万円は大きいよ」

「それもそうだな」

俺の時は教習所のお金は親に出してもらった。礼司の偉大さが身に染みて分かる。

「オートマ限定だけどね、父さんの車がオートマでよかったよ。帰り道でも運転できるから、疲れたら言って」

「ありがたいな、でも大丈夫だから」

「休日なのに朝早くに、ほんとおめん」

「謝んなよ」

「迷惑だったろうなって思うじゃん。そりゃあ」

「親だから、そういうのは当然だろ」

親だから当然、そう思ってきたし子供には無償の愛を与え続けるのが親の宿命だと思って生きてきた。

「当然じゃないよ」

礼司は反論した。結構強めに。

「親だから、とか。じゃあ、子だから何かしないといけない訳？ 健気に振る舞うのが理想だ？」

大学に行ってから礼司は弁が立つようになったようだ。

「そうじゃないだろ。血が繋がっている、それだけの関係なんだよ家族ってもんは」

礼司はそっぽを向いた。俺は黙って車を運転し続けた。

十時少し前に神門神社に着いて、朝飯にしたおにぎりを二人で食べた。二人で食べる朝食は久しぶりな気がした。

「やっぱり父さんのおにぎりって大きい」

「手がでかいからだろうな、パートのおばちゃんたちとかよりも」

「今のおにぎりはきつと機械で作ってるよ」

「でも手本はパートのおばちゃんたちのおにぎりだろうよ」

「そう、かもね」

礼司はおにぎりの残りを一口で食べた。

「でも、やっぱり家族なんだから。息子は甘やかしたい」

礼司はまだ口の中におにぎりがあって返答できない。喋りたそうにはしている。

「……甘やかしたい、じゃ、ねえな。同志みたいな、一番自分に近い理解者、みたいな方がいいな、うん」

誰に聞かせるというわけではないが、自分で納得できる答えを持っていたかった。

「……うん。いいね、それ」

咀嚼を終え、おにぎりを飲み下した礼司は同意した。父と子ではないかもしれないが、関係は濃く深く繋がった気がする。

礼司が見たがっていた「下りまし」お別れ式が始まり、ヘグロ塗に移った。べたべたと顔に黒い墨を塗りたくる。

「昔はかまどの煤だったらしいけど、今は黒のポスターカラーらしいよ、あれ」

礼司はそう教えてくれた。

「神事にそんな近代的なものを使っちゃってもいいの」

「煤でも、ポスカでも、悲しみを隠すって言う目的では一緒だから問題ないのかもしれない。でも、もともとが煤だったっていうのは覚えていなければならぬ。共に食事をして、その煤だらうからね。ヘグロ塗りに使ったのは」

共に飯を食った仲はそう簡単に解消されるものではない、同じ釜の飯を食った仲、という考えと似たようなものかもしれない。

オサラバー。オサラバー。

沿道の住人が神社の一の鳥居に並んで、箆なんかを頭上高く振りながら叫んでいた。

オサラバー。オサラバー。

「あのおサラバの、サラって、韓国語で살아。生きるよ、って意味らしいよ」

「普通にさよならって言うてるんじゃないかねえの」

「たぶん、まあ、そうなんだけどさ」

礼司は杖を振り続ける人々を瞬きすら惜しいかのように見続けた。

「神門神社と比木神社が親子で、どちらも百済の亡命してきた王族でさ。亡くなってから地元民に神として祀られているんだよね。なんかさあ、さよなら、っていうより共に生きような、って方が近い気がするんだよな」

生きて、また会おう。

そんな意味が込められているかもしれないというのは礼司に言われなければ気づかなかった。別れの悲しみは、また会えることの期待で塗り替える。そのために、生きよう。そういう礼司の説はどこか説得力があった。

ひととおりの儀式を見て、昼過ぎになった。礼司は満足して、俺と駐車場の方へ向かった。

「腹減ってないか」

「減っていてもこの辺にコンビニ無いでしょ」

「向こうにスーパーマーケットがあっただろ」

「気づかなかった。けど、腹減っていないし、良いよ。帰ろう、家に」

「帰りに家近くのスーパーに寄るぞ」

礼司は頷いて助手席に座った。

「本当は金曜日の迎え火も見たかった」

窓から神門神社の方を眺める礼司と車を運転する俺とはどうしても視線が合わない。だが、初めて俺に向けられた言葉だった気がする。

「また来年来るから、その時は有休取っておいてよ」

「だったらもっと早めに言っとけ」

「……わかったよ、来年な。今、言ったからな。忘れるなよ。父さん」

帰り道、スーパーマーケットで焼酎を買った。俺の父が好きな銘柄だ。礼司は缶チューハイを持ってきたが、買い物かごに入った焼酎を見て棚にチューハイを戻した。その代りに水やウーロン茶を持ってきた。

「ツマミはどうするの。焼酎なんてそんな飲まねえから」

「適当に、乾きものとか持ってきていい。惣菜でもいいぞ」

「会計全部父さん持ちだからな」

にやりと笑って礼司はおつまみコーナーに走り去っていった。おもちゃ付きの駄菓子を選びに行った子供のようなだった。

父と子で一献。今年成人式だったが、知り合いがあんまり行かないからと出席しなかった。本人が言うとおりに、礼司はあまり酒が強くならないらしい。すぐに顔を真っ赤にして、顔を真っ赤にしながらも高価なサラミや肉をたらふく食べて、眠ってしまった。礼司に布団をかけてやる。こんなことをしてやったのはいつ振りだろうか。我儘みたいなお願いを言われたのだから、今日が初めてのよくな気がする。

どこかで、ずっと我慢させていたんだろう。したいことを、すぐにさせてやらなかったり、片親になったから生きづらいこともあったりしたのかもしれない。残念ながら、実の父親とはいえ礼司の苦勞は俺に、完全に理解できるものではない。そこはやはり、別の個体であるから当然だろう。でも。

「困ったときはすぐに、言えよ」

親子というよりも、一個の男同士の絆みたいなものが生まれていた。眠る礼司の肩をポンとたたき、枕元にミネラルウォーターを置いた。

翌朝、日向市まで出勤ついでに駅まで送った。空港まで送ってくれたっていいじゃないと駄々をこねられたが、始業時刻に間に合わないと断った。

「じゃ、また、ね」

「ああ、いつでも戻っておいで。大したことはできないが」

「わかってるよ、父さん。体に気を付けて」

「お前もな」

「駅で別れた息子は今頃宮崎空港だろうか。それとも空の上だろうか。オサラバー。」

また会う日まで。

「異郷に起つ」内山和則

「うそつき」平伊志七

「加子山の空の彼方に」片柳木の実

「風」志奈

「霧と王さまと僕」常田麻宇

「百済王口承伝―亡国の残光」秋田早織

「百済様」門表

「百済の鏡」YUHAN

「百済の禎嘉王と百済王敬福の絆」木村直人

「熊鷹」池山弘徳

「恋死なず」小柴和人

「郷光る花咲き盛る」辻佳代子

「建立時の余聞」山口歌糸

「サラバ、いつかゆく末で」七ツ樹七香

「次元と時空」武田加代子

「小さな村の里山伝説と二人の王の物語」後藤忠良

「月よ、高く昇れ」松岡博

「と、百済王は言った」中野和宏

「箸置きの人」大浦太輔

「日向の稜線」山河大志

「また、な」柴田瑤

「神門」原田須美雄

「みさと」中庭里沙

「水たまり」和田海作

「山霧の森のひみつ」のむらきようこ

奨励賞

「神の門へ」石川秀信

「古鏡」新川亮

「よそ国」出崎哲弥

※最終選考において惜しくも選外となりましたが、今後、より一層の精進を期待して、3作品を奨励賞といたします。

第2回 「西の正倉院 みさと文学賞」の お知らせ

■文学賞概要

古代の朝鮮半島に栄え、仏教をはじめとする多くの文化を日本にもたらした王国「百済」。その百済の王族が隠れ住んでいたという伝説が残る村……。

今の美郷町にかつて存在した九州山地の山間にある小さな村、南郷。百済の内乱から逃れてきた百済王一家の伝説は今もなお語り継がれ、この村に謎とロマンを残した。現存する百済王一家を祀る神社や、ゆかりのある地名、伝説に因む祭、西の正倉院がその伝説を物語る……。

西の正倉院に象徴される百済王伝説を背景とした、美郷町の人物語資源Vを意識したテーマの文学賞を開催します。一次審査、二次審査を経て、大賞ほか選出。受賞作品は公式ウェブサイトに発表後、美郷町で授賞式を行います。

受賞作品は作品集として書籍化。郷土のPRに寄与するものとします。

■応募締切

2019年10月31日(木)

■対象・応募資格

- ・12000字以内(400字詰め原稿用紙30枚程度)。
- ・応募者のプロ、アマ、年齢・性別・国籍問いません。
- ・日本語による自作の未発表原稿のみ。
- ・応募フォームに必要な事項を入力(入力に不備のある場合、選考対象外となる場合があります)。
- ・作品は、電子ファイル(Microsoft Word)のみ受け付けます(郵送、持ち込みでの応募は不可です)。
- ・一度応募した作品の差し替え、修正は受け付けません。
- ・応募作品数は1人あたり1作品のみとします。
- ・18歳未満の方は保護者の同意を得たうえで応募ください。受賞の場合は確認させて頂く場合がございます。

詳細は ▶ <https://www.misatobungaku.com>



第1回「西の正倉院 みさと文学賞」作品集

2019年 3月 31日 初版発行

- 編 者 「西の正倉院 みさと文学賞」実行委員会
(宮崎県美郷町、TBSスパークル)
- 装 幀 飯田千瑛
- 協 力 MRT宮崎放送、一般社団法人日本放送作家協会
- 後 援 宮崎日日新聞社
- 企 業 版
ふるさと納税
協 力 企 業 株式会社イワハラ、株式会社丸誠電器、株式会社花菱
塗装技研工業、有限会社花菱精板工業、株式会社
パシフィックシステム、三桜電設株式会社、大正測量
設計株式会社 宮崎支店、株式会社日向衛生公社、
有限会社前田産業、株式会社バディ、株式会社アプ
ニール、株式会社大興不動産、株式会社南日本環境
センター、株式会社創建
- 販 売 部 蒲地加代子
- 編 集 人 鈴木収春
- 発 行 人 石山健三
- 発 行 所 クラーケン
〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-14 A&Xビル4F
TEL 03-5259-5376
URL <https://krakenbooks.net>
E-MAIL info@krakenbooks.net
- 印 刷・製 本 株式会社シナノ

©Misato Bungakushou, 2019, Printed in Japan.

ISBN 978-4-909313-07-2

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。